一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 7

鳥取県米子市

観音寺狼谷山遺跡
（かんのんじおおかみだにやまいせき）

２０１５
一般財団法人　米子市文化財団

観音寺狼谷山遺跡から東側を望む

観音寺狼谷山遺跡から北側を望む

序

近年の公共事業及びその他開発の縮小に伴い、埋蔵文化財の調査も減少して来ました。そこで、米子市内の発掘調査を行ってきた当財団は、平成20年度の南部町の発掘調査をはじめ、伯耆町の調査を行うなど、鳥取県西部全域を視野に入れた埋蔵文化財の発掘調査に取り組んでおります。

今回、米子市水道局から委託を受けて実施した「観音寺狼谷山遺跡」の発掘調査報告書を刊行することになりました。調査では、古墳時代の建物跡、中世の山城跡等が確認されたほか、以前から周知されていた古墳の調査も行うことができました。また古墳の副葬品では珍しい馬具が出土するなど、貴重な発見もありました。

この報告書が、今後さまざまな分野で広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、今回の調査に当たって多くの方々にお世話になりました。ご指導、ご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

平成２７年３月

一般財団法人　米子市文化財団

理　事　長　　杉　原　弘　一　郎

例　言

1．本書は米子市水道局の依頼を受けて、一般財団法人米子市文化財団が平成25年度に実施した、配水池設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本書の図中の方位は公共座標北で、レベルは海抜標高を示す。
3．本書に記載した第２・４図の地形図は平成25年修正米子境港都市計画地図（米子市）32・39を複写・加筆して掲載している。
4．出土した馬具について、島根県古代文化センターの松尾充晶氏に玉稿を賜った。
5．本書の執筆及び編集は（一財）米子市文化財団が行った。
6　鉄製品のＸ線撮影は、島根県埋蔵文化財センターでおこなった。
7　鉄製品のＸ線ＣＴスキャナー撮影は、九州歴史資料館でおこなった。
8　発掘調査によって出土した遺物は、米子市教育委員会が保管している。
9　現地調査および報告書作成にあたり、上記の方々の他、多くの方々からご指導、ご助言をいただいた。以下に明記して感謝いたします。
加藤雅歳（九州歴史資料館）、澤田正明（島根県立古代出雲歴史博物館）、田中由理（(公財）元興寺文化財研究所）、高田健一（鳥取大学）、中原斉（鳥取県埋蔵文化財センター）、米子市教育委員会（敬称略）

凡　例

1．遺物実測のうち、須恵器は断面を黒塗り、その他の遺物は断面を白抜きで示した。
2　遺跡の略称は、「KODY」とした。
3　遺物実測図の土器の縮尺は1/4、鉄器類1/2・1/3・1/4、石器類は1/1・1/4、銅銭・鉛玉2/3で掲載している。
4　本文、挿図及び写真図版中の番号は一致する。
5　柱穴の法量は（長辺×短辺−深さ）で表記している。

第１図　米子市位置図

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
挿図目次
挿表目次

第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
　第３節　調査の体制 …… 1
第２章　位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　観音寺狼谷山遺跡谷部の調査 …… 8
　第１節　谷部の調査概要 …… 8
　第２節　谷部の堆積 …… 8
　第３節　谷部の遺構について …… 11
　　１　竪穴建物 …… 11
　　２　段状遺構 …… 11
　　３　溝状遺構 …… 13
　第４節　谷部の遺構外遺物について …… 16
第４章　観音寺狼谷山遺跡尾根部の調査 …… 22
　第１節　尾根部の調査概要 …… 22
　第２節　尾根部の遺構について …… 22
　　１　古墳時代 …… 22
　　２　中世 …… 45
　第３節　尾根部の遺構外遺物について …… 55
第５章　まとめ …… 59
第６章　理化学的分析 …… 62
　放射性炭素年代測定　　株式会社　古環境研究所 …… 62
第７章　特　　論 …… 65
　第１節　観音寺狼谷山遺跡の中世山城について …… 65
　第２節　観音寺狼谷山遺跡出土馬具について …… 71

挿図目次

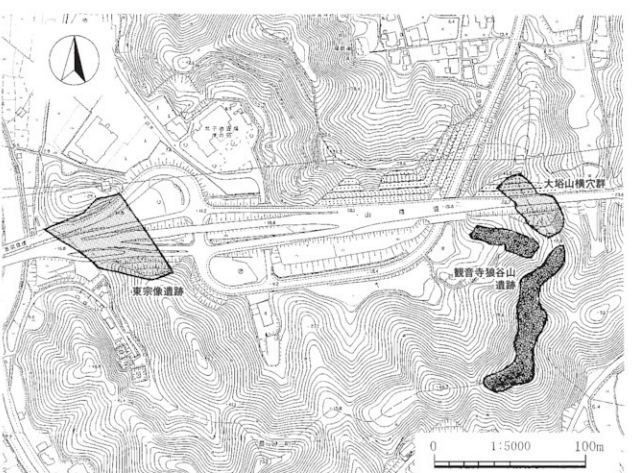
第１図　米子市位置図
第２図　調査位置図
第３図　グリッド設定図 …… 2
第４図　周辺遺跡分布図 …… 5
第５図　谷部調査区設定図 …… 7
第６図　谷部遺構配置図 …… 7
第７図　谷部土層断面図 …… 9～10
第８図　竪穴建物平面および断面図 …… 8
第９図　段状遺構１平面および断面図 ……12
第10図　段状遺構１出土遺物実測図 ……11
第11図　段状遺構２平面および断面図 ……13
第12図　段状遺構２出土遺物実測図 ……13
第13図　１・２区溝状遺構１平面図 ……14
第14図　３区溝状遺構２～５平面および
　　断面図 ……15
第15図　溝状遺構出土遺物実測図 ……16
第16図　谷部遺構外出土遺物実測図（1）……17
第17図　谷部遺構外出土遺物実測図（2）……18
第18図　谷部遺構外出土遺物実測図（3）……19
第19図　谷部遺構外出土遺物実測図（4）……20
第20図　谷部遺構外出土遺物実測図（5）……21
第21図　尾根部遺構配置図 ……23～24
第22図　東宗像22号墳調査前墳丘実測図 ……25
第23図　東宗像22号墳調査後墳丘実測図 ……25
第24図　東宗像22号墳墳丘断面図 ……27～28
第25図　東宗像22号墳第１主体部実測図 ……26
第26図　東宗像22号墳第１主体部
　　掘り形実測図 ……26
第27図　東宗像22号墳第２主体部
　　掘り形実測図 ……26
第28図　東宗像21号墳調査前墳丘実測図 ……29
第29図　東宗像21号墳調査後墳丘実測図 ……29
第30図　東宗像21号墳墳丘断面図 ……31～32
第31図　東宗像21号墳主体部実測図 ……33
第32図　東宗像21号墳検出状況実測図 ……34
第33図　東宗像21号墳主体部横口部
　　閉塞状況図 ……35
第34図　東宗像21号墳主体部横口部袖石
　　および扉石状況図（内側）……36
第35図　東宗像21号墳遺物出土状況図 ……36
第36図　東宗像21号墳掘り形実測図 ……36
第37図　東宗像21号墳主体部
　　出土遺物実測図（1）……37
第38図　東宗像21号墳主体部
　　出土遺物実測図（2）……38
第39図　東宗像21号墳主体部
　　出土遺物実測図（3）……39
第40図　東宗像21号墳出土墳輪実測図（1）…40
第41図　東宗像21号墳出土墳輪実測図（2）…41
第42図　東宗像21号墳出土墳輪実測図（3）…42
第43図　中世平場配置図 ……43
第44図　中世平場土層断面図 ……44
第45図　中世平場平面および断面図（1）……46
第46図　中世平場平面および断面図（2）……47
第47図　掘立柱建物平面および断面図 ……47
第48図　土器溜り平面 ……48
第49図　土器溜り遺物出土状況図 ……49～50
第50図　土器溜り出土遺物実測図 ……51
第51図　中世土坑１平面および断面図 ……52
第52図　中世土坑１出土遺物実測図 ……52
第53図　中世土坑２平面および断面図 ……53
第54図　中世土坑３平面および断面図 ……53
第55図　中世土坑４平面および断面図 ……53
第56図　尾根部遺構外出土遺物実測図（1）…54
第57図　尾根部遺構外出土遺物実測図（2）…55
第58図　尾根部遺構外出土遺物実測図（3）…56
第59図　尾根部遺構外出土遺物実測図（4）…57

挿表目次

第１表　観音寺狼谷山遺跡新旧遺構対照表
第２表　周辺遺跡一覧表 …… 6
第３表　中世山城跡平場一覧表 ……45
第４表　観音寺狼谷山遺跡つぶて石一覧表 …58
第５表　遺物観察表１（土器） ……76
第６表　遺物観察表２（土器） ……77
第７表　遺物観察表３（土器） ……78
第８表　遺物観察表４（土器） ……79
第９表　遺物観察表５（土器） ……80
第10表　遺物観察表６（土器） ……81
第11表　遺物観察表７（石製品） ……82
第12表　遺物観察表８（鉄製品） ……83
第13表　遺物観察表９（金属製品） ……83

第１表　観音寺狼谷山遺跡新旧遺構対照表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
竪穴建物	SI－01	段状遺構１	SS－01	段状遺構２	SI－02
中世土坑２	土坑１	中世土坑３	土坑２	中世土坑４	土坑３
溝状遺構１	SD―01	溝状遺構２	SD―02	溝状遺構３	SD―03
溝状遺構４	SD―04	溝状遺構５	SD―05		



第２図　調査位置図

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、米子市水道管理事業者（以下米子市水道局）の配水池設置工事に伴い、文化財の保護を目的とした調査である。

これを受けて平成22・23年度に米子市教育委員会が試掘を行った結果、遺物の包含層が確認され、米子市水道局との協議の結果、調査を行うこととなった。現地調査は、平成25年５月12日から平成26年１月７日まで行った。現地調査終了後、基礎整理を行い、翌平成26年度に本格的な整理作業を行い、報告書作成刊行した。

第２節　調査の経過

調査面積は、約6,700㎡で、尾根部と谷部の２ヶ所に分かれていたため、排土のことを考慮し、谷部から行うことにした。調査は、調査地全域にわたって、南北方向をアラビア数字（1.2.3・・）、東西方向をアルファベット（A.B.C・・）の10mグリッド（第３図）を設定し、調査地にある工事業者が設置した基準杭を基にメッシュ杭を必要に応じ設置した。遺物の取り上げはトータルステーションで行い、遺構の測量は、メッシュ測量とトータルステーションによる測量を併用して行った。

現地調査は、平成25（2013）年５月12日から重機による表土掘削を開始し、５月14日から作業員による掘削を開始した。８月中旬には尾根部の掘削に入ったが、尾根部には重機が入るスペースがなかったため、全て人力にて行った。平成25年12月15日に現地説明会を開催し、終了後空中撮影を行った。現地調査は平成26（2014）年１月７日まで行った。

調査の結果、谷部では竪穴建物、段状遺構、溝状遺構、尾根部では、古墳、中世の山城跡、掘立柱建物、土器溜り、土坑を確認した。また遺物では、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄器、馬具、玉類等が出土した。

第３節　調査の体制

・調査主体　一般財団法人米子市文化財団
　　理　事　長　杉原弘一郎
・調査担当　埋蔵文化財調査室
　　室　　長　岡　雄一
　　事　務　長　小原　貴樹
　　次長兼統括調査員　平木　裕子
　　主任調査員　高橋　浩樹　濵野　浩美
　　嘱託職員　秦　美香　佐々木志保
　　非常勤職員　田中　昌子

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
尾根部
谷部
0
1:1000
40m

第３図　グリッド設定図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

今回調査を行った観音寺狼谷山遺跡は、JR米子駅から直線で南東2.3㎞にある、標高79mの丘陵に位置する。

米子市は、平成16年淀江町と合併して、総面積は132.21㎡、人口は約15万人、世帯数64,900戸である。島根県との県境となる鳥取県の西端に位置し、北は境港市、東を大山町・伯耆町、南を南部町とそれぞれ接する。

山陰では比較的広い平野である日野川の沖積作用によって形成された米子平野が広がり、周辺部を東側に大山（標高1,709m）とその造山活動によって形成された火山灰大台地、南側から西側には中国山地から続くなだらかな丘陵によって囲まれる。北側には日野川の流出土砂の堆積によって形成された弓ヶ浜半島が島根半島へと延び、これらの半島に囲まれた汽水湖中海に面する。

今回の調査地は、標高79mの狼谷山と呼ばれる丘陵の尾根部と谷部で、東側直下に法勝寺川、さらに東側に並行するように日野川が流れる。調査地の最高地点からは、西側は宗像古墳群のある高山で遮られるが、北に日本海、東に大山、南東を伯耆町、南に南部町をそれぞれ望み、米子平野および法勝寺に広がる平野一帯を一望することができる好立地にある。1984年に調査が行われた東宗像遺跡、1986年に調査が行われた大塔山横穴墓群とは尾根続きである。山陰道によって分断されているこの尾根の先端部には、調査は行われていないが戸上山城跡も確認されている。

第２節　歴史的環境

当該地区で人類の痕跡が見られるようになるのは旧石器時代まで遡ることが出来る。泉中峰遺跡で流込みのものと考えられているが、玉髄製のナイフ形石器が出土している。小波で黒曜石製のナイフ形石器、中西尾で黒曜石製の有舌尖頭器、奈喜良遺跡・陰田宮の谷遺跡においてもサヌカイト製の有舌尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡としては、早期の遺跡として多くの土坑や配石墓と考えられる集石が発見されている上福万遺跡があげられるほか、泉中峰・泉前田遺跡で知られるように、大山山麓の丘陵地帯で集落が営まれる。また淀江地区の海岸部では早期から前期に続く渡り上り遺跡で、多量の石錘・黒曜石剥片とともに木製漁猟具が出土している。

前期になると目久美遺跡では破棄された多数の土器・石器・獣骨のほか、ドングリ貯蔵穴と思われる土坑が多く検出されている。陰田遺跡群でも多くの土器・石器・獣骨が出土している。これらの遺跡は後期から晩期にかけて継続的に営まれていたようである。鰯ヶ口遺跡では爪形文土器、条痕文土器、曽畑式土器が出土している。このほか新山山田遺跡、古市遺跡群において縄文時代の遺構・遺物は出土しているが、集落としての全体像は不明である。青木遺跡では陥穴群が検出されている。

後期になると、喜多原第４遺跡、岡成第９遺跡で知られるように、大山山麓のなだらかな丘陵尾根部において集落が営まれる。後期から晩期になると、青木遺跡、前述した泉中峰・泉前田遺跡、尾高御建山遺跡等で、多数の陥穴が検出される。また淀江地区においても河原田遺跡で、後期から晩期に

かけての土器が多量出土しているほか、井手肱遺跡では漆塗櫛・耳環をはじめとする漆製品が出土している。その他壺瓶山第１遺跡・井手鉄遺跡においても縄文時代の土器及び遺構が検出され、百塚遺跡群では陥穴も検出されている。

弥生時代になると大陸から伝来した水稲耕作と金属器の普及により階級社会が成立していく時代となる。弥生時代になり海退が進むとともに低湿地が広がり、水田が開かれるようになる。そしてその周辺の微高地では集落が営まれるようになる。

前期の遺跡としては、目久美遺跡、池ノ内遺跡、長砂第１・２遺跡（46・47）、錦町第１遺跡などのほか、淀江平野の北部の今津岸の上遺跡では前期末のＶ字状環濠が確認されたほか、初期稲作集落が形成されたことが窺える。

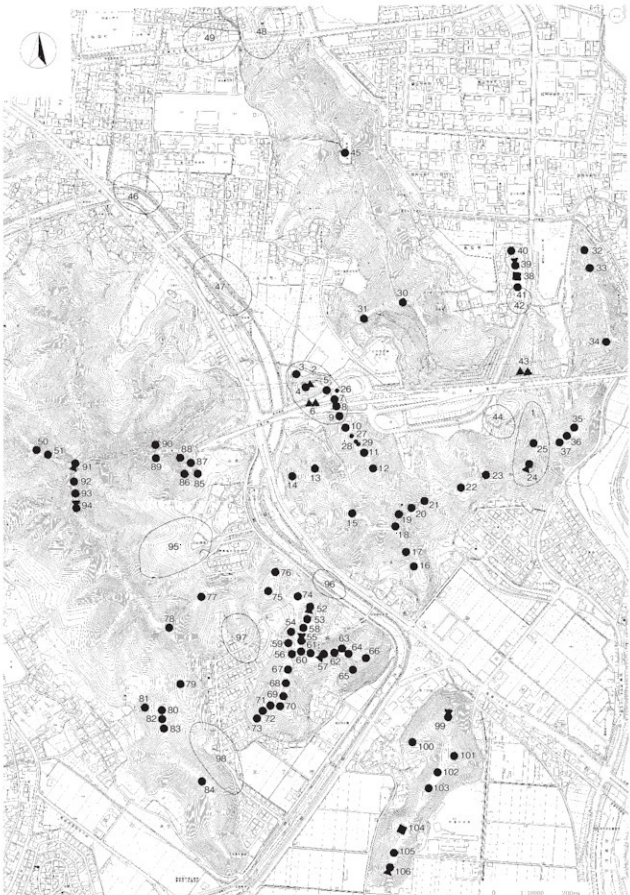
中期になると丘陵にも集落が営まれるようになるが、大規模で長期間継続するものと、小規模で短期間で消滅するものとに分かれる。淀江地区においても平地から微高地にかけて晩田遺跡、北尾宮廻遺跡、角田遺跡、福岡遺跡など集落が分散して営まれるようになる。中でも角田遺跡で出土した線刻絵画は、当時の生活様式及び精神世界を知るうえにおいて貴重な資料といえる。福岡遺跡で確認された粘土採掘坑は、土器製作に用いられたものと考えられる。日野側西岸の拠点的遺跡には、目久美遺跡、青木遺跡、越敷山遺跡群、橋本遺跡群が挙げられるほか、宗像前田遺跡（96）では杭列が確認されている。

後期になるとムラを統括する首長が出現するようなるが、青木遺跡、福市遺跡、越敷山遺跡など中期から引き続き大規模な集落を形成する一方、尾高浅山遺跡１号墓や日下１号墓で知られる四隅突出型墳丘墓が発達する。周辺では長砂第４遺跡（49）が確認されている。また淀江地区においては、百塚第１遺跡、楚利遺跡、井手挟遺跡、坂ノ上遺跡のほか、国内最大の高地性集落として知られる妻木晩田遺跡が出現する。ここでは集落・環濠および墳丘墓が確認されるなど、国家形成期の地方の様相を示す遺跡として注目される。

古墳時代になると勢力をもった集団の存在を裏付けるかのように古墳が築かれるようになる。前期の古墳としては、三角縁神獣鏡が出土した普段寺１号墳・２号墳のほかにも、石州府29号墳、日原６号墳（104）が知られる。普段寺１号墳は前方後円墳、普段寺２号墳、日原６号墳は方墳、石州府29号墳は円墳である。淀江地区においても晩田山古墳群において墳墓が確認される。

中期の古墳としては三崎殿山古墳などがみられる。また米子平野周辺の丘陵部には多くの古墳群が存在する。日野川西側では、福成早里古墳群、宗像古墳群（52～93）、東宗像古墳群（3～5、7～29）、陰田・新山遺跡群、新山・古市遺跡群、日野川東側では、尾高古墳群、日下古墳群、石州府古墳群などの古墳群がみられる。淀江地区においては上ノ山古墳が築造され、ここでは竪穴式石室から、内行花文鏡・滑石製小勾玉・甲冑が出土している。中期後半になると向山３号墳や坂ノ上１号墳が築造されるが、盾持人などの形象埴輪が多量に出土した井手鉄３号墳や径40ｍを測る日吉塚古墳などが含まれる中西尾古墳群において、淀江平野を支配した首長墓の系譜が窺がえる。

後期になると米子平野において横穴式石室を主体部とする古墳と、横穴墓の両方が展開するいくつもの古墳群が形成されるようになる。中でも石州府古墳群、東宗像古墳群、宗像古墳群、観音寺古墳群（32～41）、陰田古墳群、日下古墳群などがよく知られる。横穴墓では、陰田横穴群、大塔山横穴群（43）、東宗像横穴群（6）、福市横穴群、日下横穴群等が知られる。そのほか周辺には、長砂古墳（30・31）、水道山古墳（45）、美吉古墳（50・51）、高山古墳（94）、日原古墳群（100～106）などが確認



第４図　周辺遺跡分布図

されている。

淀江地区周辺においても古墳の数は増え広く分布するようになるが、首長の系譜は向山古墳群に移ったようで、石馬谷古墳、長者ヶ平古墳、岩屋古墳などが築造される。一方城山遺跡、稲吉遺跡、四十九谷遺跡、高井谷遺跡、中西尾遺跡、西尾原遺跡、百塚遺跡、壺瓶山遺跡、小波山古墳、中間遺跡など古墳群・横穴墓群などが多く造営される。

一方集落遺跡は、弥生時代から引き続いて営まれる福市遺跡、青木遺跡、百塚第１遺跡、井手挟遺跡などのほか、周辺では、前期から後期の集落として長砂第３遺跡（48）、後期の集落である東宗像遺跡（2）、奥谷掘越谷遺跡（97・98）が知られる。そのほか奈喜良遺跡、吉谷上ノ原山遺跡、吉谷トコ遺跡、新山紙石山遺跡、新山山田遺跡、古市カワラケ田遺跡、百塚第４・第５・第６・第７遺跡、泉上経前遺跡、小波泉原遺跡、福頼遺跡など丘陵地で多く確認されていた。しかし近年の博労町遺跡の調査で海浜部においても集落跡が営まれていたことが確認された。

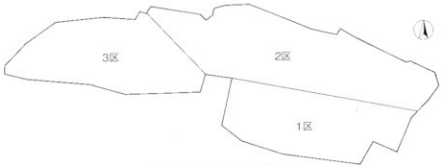
奈良時代以降の遺跡としては、墨書土器や木簡など官衙に関する遺物が出土している陰田・新山遺跡が知られているが、吉谷銭神遺跡、吉谷中馬場山遺跡でも墨書土器や赤色塗彩土師器などが出土している。その他福市・青木遺跡、淀江地区の百塚遺跡群で集落跡が確認されている。

白鳳期には全国的に多くの寺院が建立されるようになるが、国内最古級の仏教壁画が出土したことで注目された上淀廃寺跡が有名である。

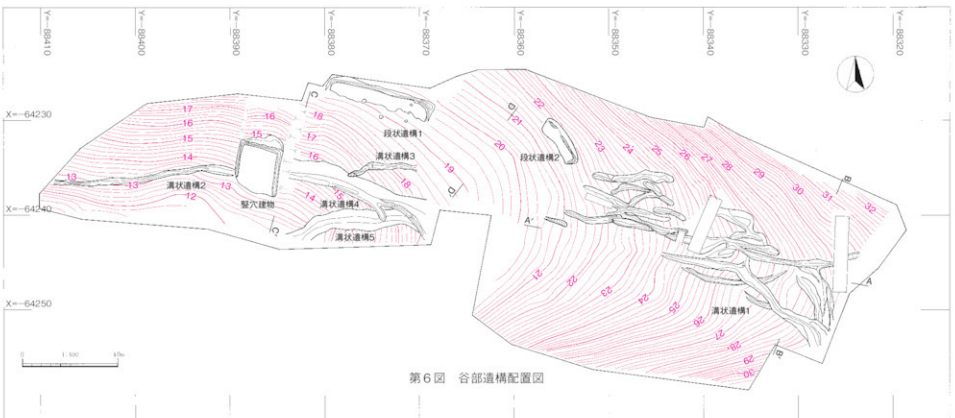
中世遺跡としては米子市内では調査があまり行われていないが、城館跡として、中世の拠点であったと思われる尾高城をはじめ、山名氏支配下の国人によって構築されたと思われる新山要害、石井要害、橋本七尾城などがある。そのほか、中世の遺跡としては、観音寺遺跡（42）、青木古墓、諏訪１号溝、別所長峰古墓、長砂経塚、中山経塚などがある。その他の遺跡として、錦町第一遺跡、博労町遺跡では畠の畝を確認している。

1	観音寺狼谷山遺跡	19	東宗像16号墳	37	観音寺4号墳	55	宗像4号墳	73	宗像22号墳	91	宗像40号墳
2	東宗像遺跡	20	東宗像17号墳	38	観音寺7号墳	56	宗像5号墳	74	宗像23号墳	92	宗像43号墳
3	東宗像1号墳	21	東宗像18号墳	39	観音寺8号墳	57	宗像6号墳	75	宗像24号墳	93	宗像44号墳
4	東宗像2号墳	22	東宗像19号墳	40	観音寺9号墳	58	宗像7号墳	76	宗像25号墳	94	高山古墳
5	東宗像3号墳	23	東宗像20号墳	41	観音寺10号墳	59	宗像8号墳	77	宗像26号墳	95	宗像遺跡
6	東宗像横穴	24	東宗像21号墳	42	観音寺遺跡	60	宗像9号墳	78	宗像27号墳	96	宗像前田遺跡
7	東宗像4号墳	25	東宗像22号墳	43	大塔山横穴	61	宗像10号墳	79	宗像28号墳	97	奥谷堀越谷遺跡C
8	東宗像5号墳	26	東宗像23号墳	44	的場山遺跡	62	宗像11号墳	80	宗像29号墳	98	奥谷堀越谷遺跡A
9	東宗像6号墳	27	東宗像24号墳	45	木道山古墳	63	宗像12号墳	81	宗像30号墳	99	日原1号墳
10	東宗像7号墳	28	東宗像25号墳	46	長砂第1遺跡	64	宗像13号墳	82	宗像31号墳	100	日原2号墳
11	東宗像8号墳	29	東宗像26号墳	47	長砂第2遺跡	65	宗像14号墳	83	宗像32号墳	101	日原3号墳
12	東宗像9号墳	30	長砂1号墳	48	長砂第3遺跡	66	宗像15号墳	84	宗像33号墳	102	日原4号墳
13	東宗像10号墳	31	長砂2号墳	49	長砂第4遺跡	67	宗像16号墳	85	宗像34号墳	103	日原5号墳
14	東宗像11号墳	32	観音寺1号墳	50	美吉1号墳	68	宗像17号墳	86	宗像35号墳	104	日原6号墳
15	東宗像12号墳	33	観音寺2号墳	51	美吉2号墳	69	宗像18号墳	87	宗像36号墳	105	日原7号墳
16	東宗像13号墳	34	観音寺3号墳	52	宗像1号墳	70	宗像19号墳	88	宗像37号墳	106	日原8号墳
17	東宗像14号墳	35	観音寺6号墳	53	宗像2号墳	71	宗像20号墳	89	宗像38号墳		
18	東宗像15号墳	36	観音寺5号墳	54	宗像3号墳	72	宗像21号墳	90	宗像39号墳		

第２表　周辺遺跡一覧表



第５図　谷部調査区設定図



第６図　谷部遺構配置図

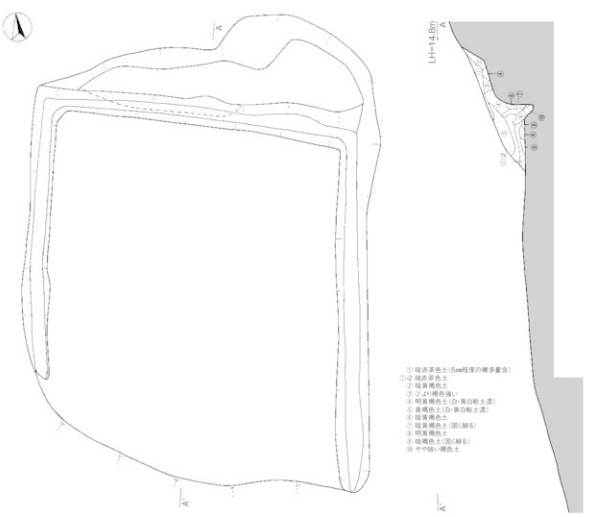
第３章　観音寺狼谷山遺跡谷部の調査

第１節　谷部の調査概要

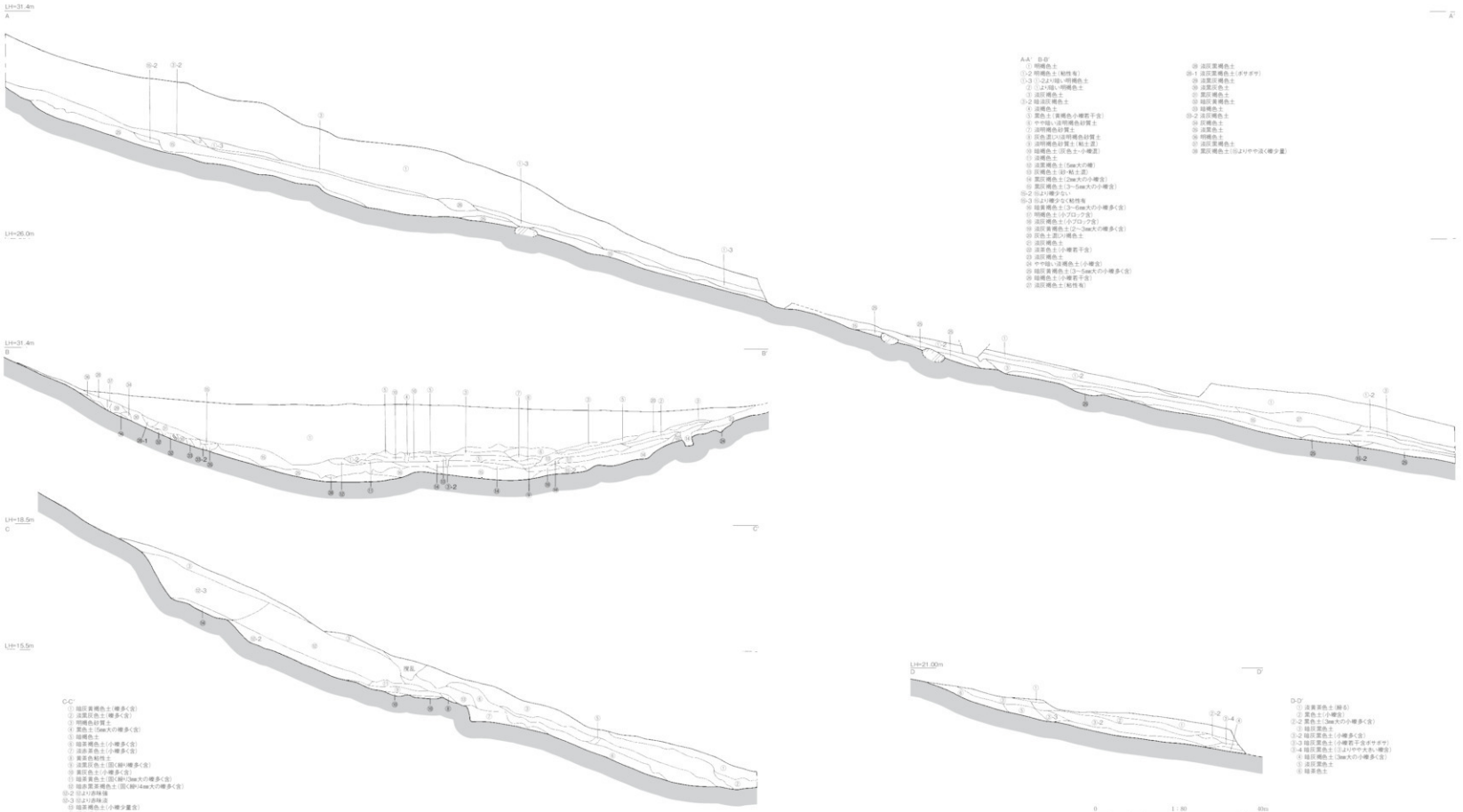
当初、排土置場を確保するため、谷部を２分割して、谷部の中央にある導入路の下側の谷（西側）から調査を行った後、上側の谷（東側）の調査を行う予定にしていた。しかし樹木伐採用の工事道路が必要とのことで、急遽計画を変更し、導入路の上側の南側半分から行うことになった。この時点で、谷部の調査区を３区分に設定（第５図）し、調査は１区、３区、２区の順で行うことになった。

第２節　谷部の堆積（第７図）

谷部の堆積は、１・２区の深い部分で約1.6mを測る。表土の下約1.3mは、明褐色真砂土で、丘陵が崩れて一気に埋まったものと考えられる。この層は３区においてもみられるが、下方に向って堆積は薄くなる。この層の下は、約30㎝の黒色土が堆積しており、遺物はこの層より出土している。３区では、山側は礫を多く含む硬く締った赤黒茶褐色土が堆積し、この層は谷に向かって堆積は薄くなり、谷側部分では１・２区間と同様に明褐色真砂土と黒色土が堆積する。



第８図　竪穴建物平面および断面図


LH=31.4m
A
A'
LH=26.0m
LH=31.4m
B
B'
LH=18.5m
C
C'
LH=15.5m
LH=21.00m
D
D'
0
1：80
10m

第7図　谷部土層断面図

第３節　谷部の遺構について

１　竪穴建物（第８図）

３区Ｋ３で検出した。幅4.5m、奥行5.0m、三方向に最大高0.5mの壁が残る。壁は谷側を除く三方が残り、東西の壁は地山を掘り込んだ部分が山の傾斜に合わせて残る。奥壁は壁面掘下げ段階で崩れてしまったが、約20㎝奥にオーバーハングしていた。床面には柱穴等の痕跡がなく、建物の周辺でも柱穴を確認できなかった。このことから、本建物は板状の壁材を設置していた可能性が考えられる。床面壁際三方向に、幅35㎝、深さ12㎝の溝が巡る。遺物は出土しなかった。

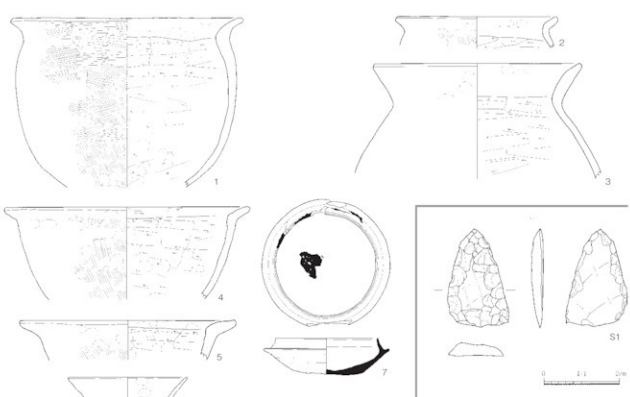
２　段状遺構　２区および３区で２基検出した。

段状遺構１（第９図）　２区Ｊ３北斜面で検出した。幅11.2m、奥行1.9m、三方に最大高0.3mの壁が残る。床面壁際には幅35㎝、深さ８㎝の溝が巡る。出土遺物のほとんどはこの溝から出土した。

出土遺物（第10図）は、№１～№３は土師器の甕、№４・№５は土師器の鉢、№６は土師器の坏、№７は須恵器の坏で、時期は６世紀後半から７世紀前期と考えられる。Ｓ１はサヌカイト製の石鏃であるが流入品と考える。

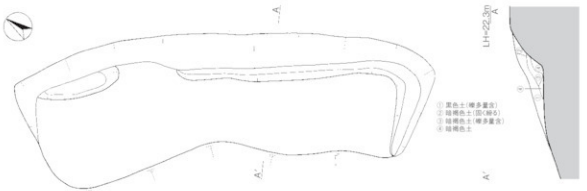
段状遺構２（第11図）　２区Ｈ３北斜面で検出した。幅5.2m、奥行1.4m、三方に最大高0.42mの壁が残る。床面壁際には幅20㎝、深さ２～３㎝の溝が巡る。

出土遺物（第12図）　№８須恵器の甕の口縁部が床面から僅かに浮いた状態で出土した。段状遺構１同様、時期は６世紀後半から７世紀前期と考えられる。

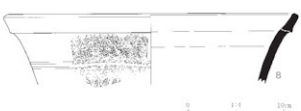


第10図　段状遺構１出土遺物実測図

第９図　段状遺構１平面および断面図



第11図　段状遺構２平面および断面図



第12図　段状遺構２出土遺物実測図

３　溝状遺構

溝状遺構１（第13図）　１・２区の擂鉢状の谷間を縦断するように数条の入組んだ溝を検出した。自然流路であると考えたので、１・２区で検出した溝を一括して溝状遺構１とした。溝は幅0.4～0.7m、深さは最大0.2mで南西端は自然消滅している。溝に規則性はなく、幅も狭く、深さも不規則なことから、自然流路と考えられる。

出土遺物（第15図）　土師器の甕の口縁部№９が出土しているが、流れ込みのものと考えられる。

溝状遺構２（第14図）　３区で検出した幅0.4～0.9m、深さ0.3mの溝状遺構で、溝の上部はかなり硬化した状態であり、埋土も砂質混じりの締りのある土であった。溝は東西方向に走り、等高線とほぼ平行であることから、溝ではなく道状の施設の可能性が考えられる。また、後述する溝状遺構４と繋がる溝であると考えられ、本溝の元の幅はもう少し広かったと考えられる。

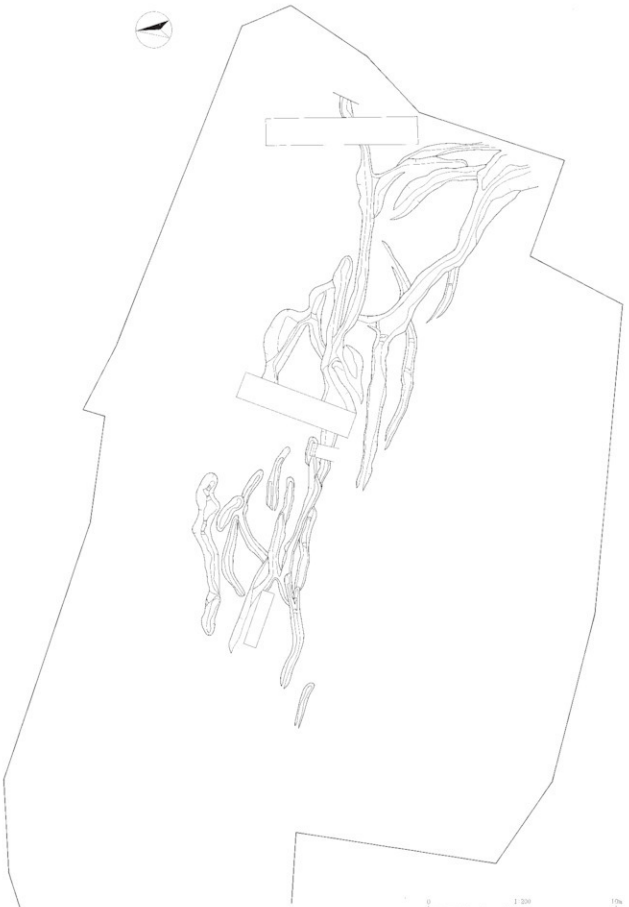
出土遺物（第15図）　土師器の甕の口縁部№10が出土している。また溝の北側肩の、やや山側において、銅銭（第20図M４～６）が３枚並ぶような状態で出土している。溝の中から出土した遺物とは時期差があるが、このことから、この溝状遺構の時期は近世と考えられる。

溝状遺構３（第14図）　３区で検出した幅0.4～0.7m、深さは最大深さ0.2mの溝状遺構で、西端は溝状遺構４に繋がっているが、溝状遺構１と 同様の自然流路と考えられる。

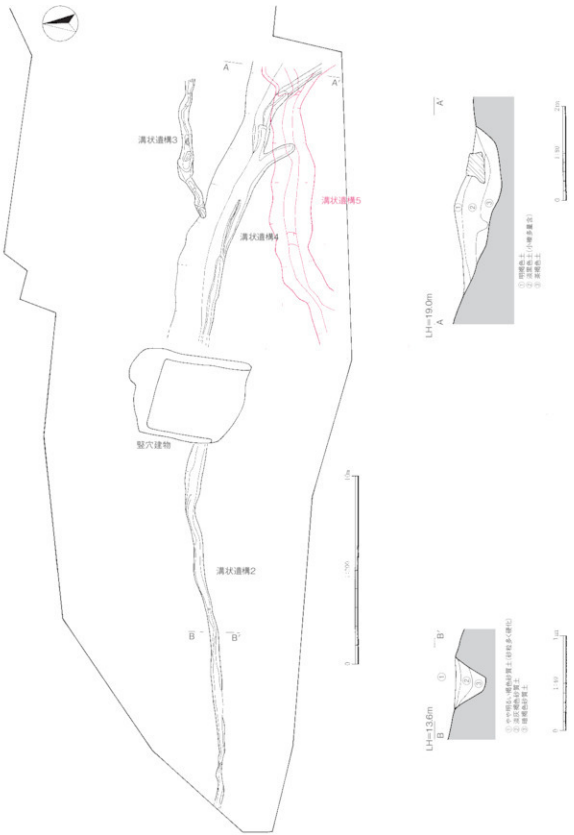
出土遺物（第15図）　土師器の甕の口縁部№11が出土している。

溝状遺構４（第14図）　３区で検出した幅2.2m、深さ約1.0mの溝状遺構で、等高線と平行に東西方向に走り、溝状遺構２に繋がるものと考えられる。

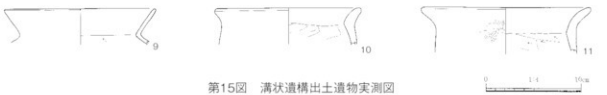
溝状遺構５（第14図）３区で検出した幅1.8～2.2m、深さ0.6～0.8mの溝状遺構で、谷間の中央を縦断するように走ることから、自然流路と考えられる。溝の下流は後世の耕作によって切られているが、



第13図　１・２区溝状遺構１平面図



第14図　3区溝状遺構2～5平面および断面図

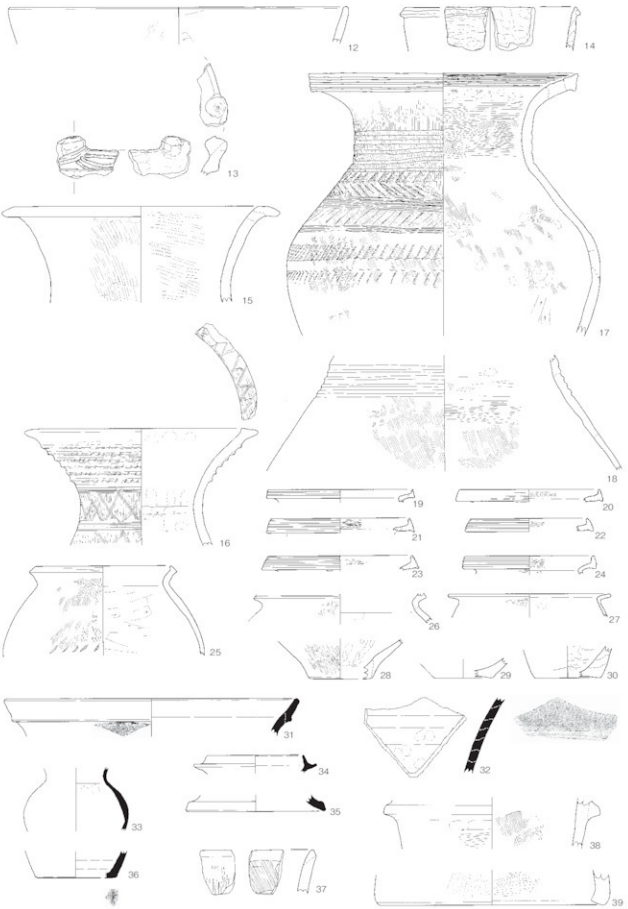


第15図　溝状遺構出土遺物実測図

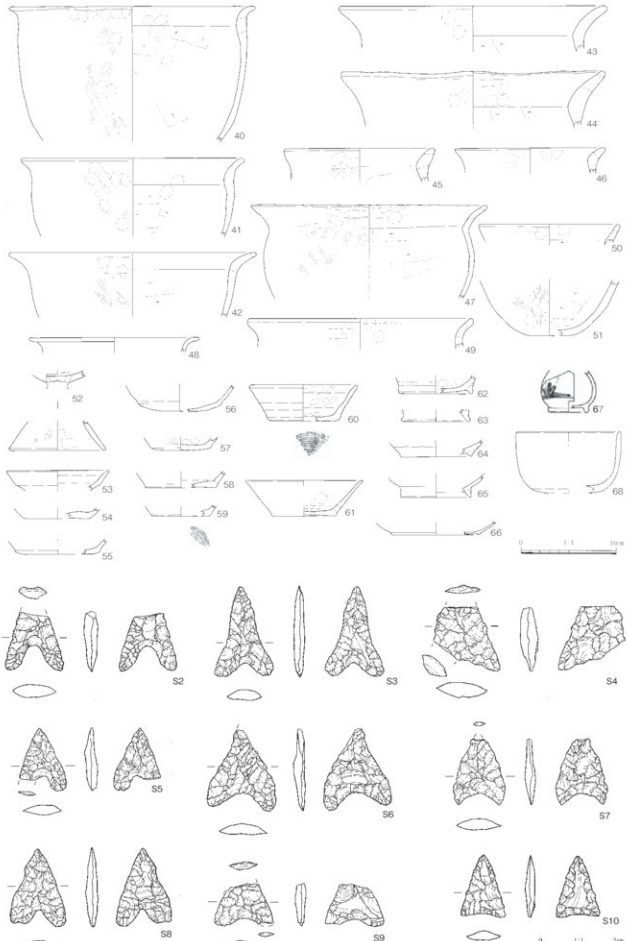
境界部分において集中して土器（第16図№15～17）が出土している。そのほか溝の中からは石器（第18・19図S23・S31・S33）が出土している。これらの遺物は流れ込んだものであるが、時期幅がみられないことから、弥生時代中期以降に一時的に流れ埋まったものであろう。溝状遺構の中では最も古い時期のものと考える。

第４節　谷部の遺構外遺物について（第16図～第20図）

№12～№14は縄文土器で、№12は粗製の浅鉢、№13は口縁部に渦巻きの突起と文様を施した浅鉢、№14は突帯文土器である。№15～№30は弥生土器で、№15～18は壺で、№15は大きく外反して開く壺の口縁部、№16は大きく外反して開く口縁から頸部で、口縁端部には鋸歯文、口縁部に刻目の突帯、頸部には文様を施す。№17は口縁部～胴部で胴部には彩杉文、貝殻による列点文が施される。№18は頸部から肩部で凹線を施される。№19～№27は甕の口縁部で、№19～№26は縁端部に凹線文が施される。№27は「くの字」に屈曲する口縁を呈する。№28～№30は壺あるいは甕の底部である。№31～№32は須恵器で、№31・№32は甕、№33は瓶、№34は坏身、№35は高坏の脚部、№36は回転糸切りの壺の底部である。№37～№39は埴輪である。№40～№51は土師器の甕、№52は土師器の高坏で同一のものと考えられる。№53～№61は土師質の坏、№62～№68は磁器である。S２～S21は石鏃で、S２～S10は黒曜石製、S11～S21はサヌカイト製である。S22～S32は石斧であるが、S29のように転用されたものもみられる。S33～S35は敲石で、S33は被熱の痕跡がみられる。S36は凹皿である。S37・S38は標石と思われる。F１は用途不明の鉄製品、M１～M６は銅銭で、M３は摩耗し明確ではないが、いずれも「寛永通寶」と思われる。M４～M６は、前述したように溝状遺構２に関係する遺物の可能性がある。



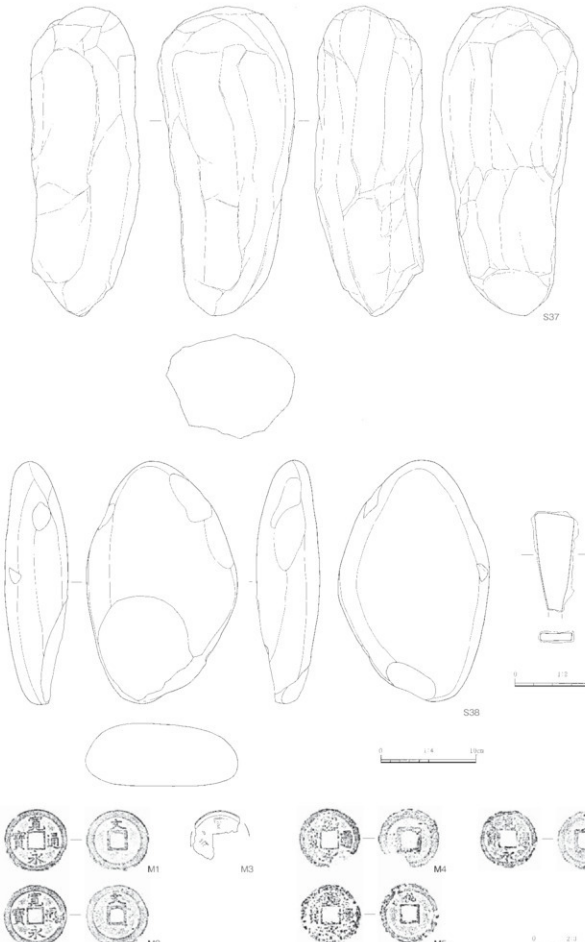
第16図　谷部遺構外出土遺物実測図（1）



第17図　谷部遺構外出土遺物実測図（２）

第18図　谷部遺構外出土遺物実測図（3）

第19図　谷部遺構外出土遺物実測図（４）



第20図　谷部遺構外出土遺物実測図（5）

第４章　観音寺狼谷山遺跡尾根部の調査

第１節　尾根部の調査概要

南北に約240mの細長く延びる尾根で、北側３分の１は標高49.6～56.0m、傾斜角度10°の北側から南側に緩やかに上る。そこからさらに南側に傾斜角度約25～35°で上ると、標高69.0mの尾根のほぼ中央部となる。ここでやや広い平坦地を形成したのち、さらに南に幅約４～５mの尾根筋を傾斜角度15°で約57ｍ上ると、本尾根最頂部標高79.0mとなる。この尾根筋から最頂部の西側斜面は、崩落し抉れた状態であった。最頂部からは傾斜角度26°で一度西南西に下り次の頂に繋がる。尾根部は、あまり堆積土はなく、褐色から茶褐色系の層が深いところで20㎝程堆積していた程度で、大部分が表土を剥ぐとほぼ地山という状態であった。尾根北側部は尾根筋幅が狭く、調査開始当初から尾根筋では遺構の存在は希薄であったが、大塔山横穴墓に続く尾根として横穴墓がある可能性が考えられたので、斜面部も掘下げたが確認されなかった。尾根中央部から南側もそれほど広い尾根幅ではないが、当初から古墳の存在が知られており、また不自然な平坦地もあり、尾根筋を中心に調査を行い、さらに横穴墓の有無の確認のため、斜面部も掘下げ調査を行った。

第２節　尾根部の遺構について

尾根部の遺構は、中央から南側に集中し、北側では全く検出されなかった。遺構は、古墳２基、尾根中央部から尾根南部において中世山城跡の平場、掘立柱建物、土器溜り、中世土坑４基を検出した。

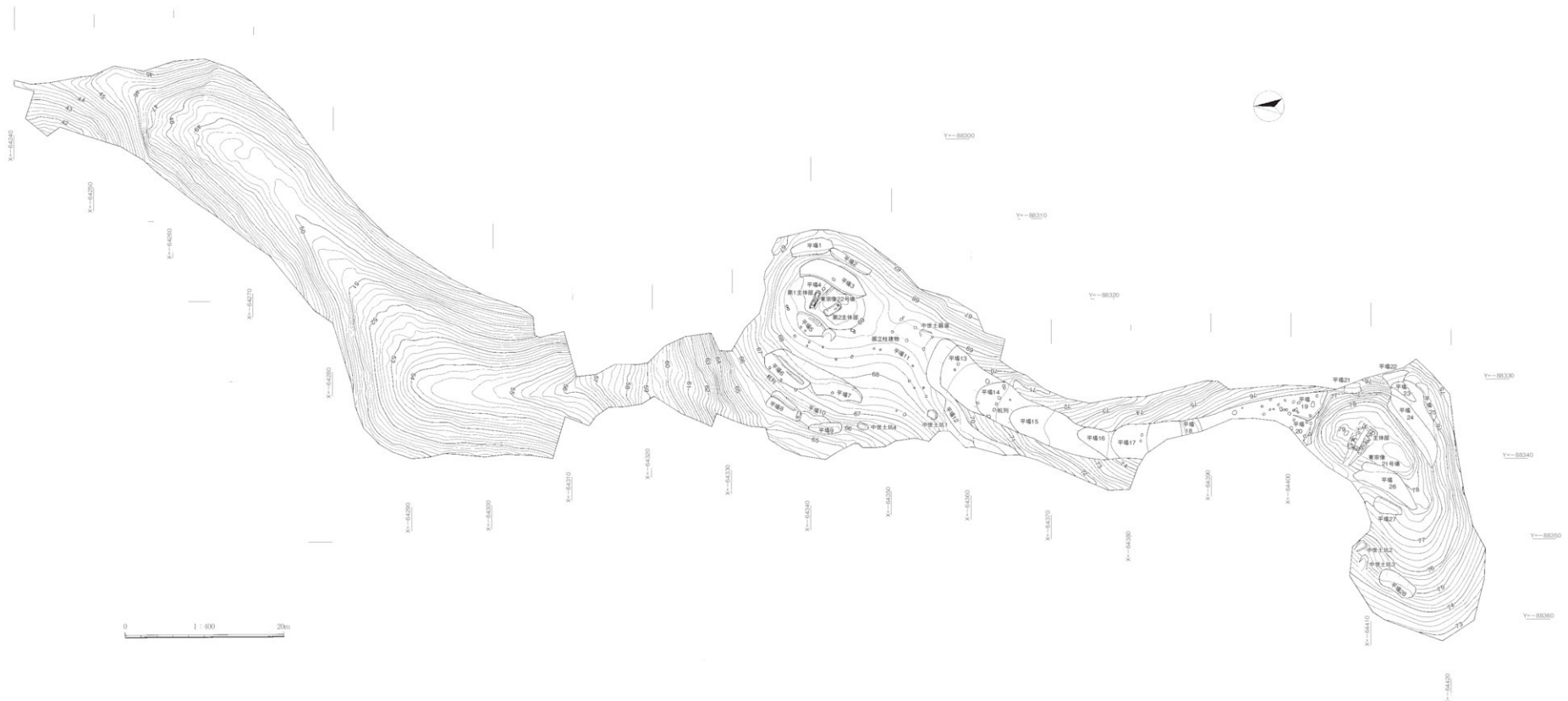
１　古墳時代

東宗像22号墳（第22～27図）　東宗像22号墳は、尾根部のほぼ中央部、尾根が一段高くなった北側先端部の標高69mに位置する。東宗像21号墳の北北東約68mに位置する。墳丘の盛土（第24図）は後世の削平によって、ほとんどなく表土を剥ぐと地山であり、調査開始時点で石棺の蓋石は剥き出しの状態であった。推定現存墳丘高は南西側約８m、北東側約26mであるが、尾根の一段高い位置にあるため高い印象を与える。周溝は確認されず、墳形は中世の山城でかなり削平されてはいるが、径約18mの円墳であったと考えられる。

第１主体部（第25・26図）　墳丘中心よりやや北西にずれていた。掘り形は長さ240㎝、幅55㎝、高さ30㎝の長方形を呈し、この掘り形の中心に、ほとんど隙間がない状態で箱式石棺を据ていた。石棺は内法で長さ170㎝、東小口幅32㎝、西小口幅25㎝、高さ20～25㎝を測り、主軸はN63°Wである。掘り形の底面の両小口部掘り込みに小口石を埋め立て、小口石を挟み込むように南北両側壁３枚ずつの板石を用いて構築されている。両側中央の板石は土圧で内側に傾いていた。側壁板石の上面は面取りを施し、蓋石を載せることを意識しているようである。蓋石は、２枚が残っていたが、いずれも剥離したように薄く、もとはもう少し厚みがあったと思われる。石棺の中には淡茶褐色土と中世の土器片が流入しており、副葬品を始め時期を特定できる遺物は検出されなかった。

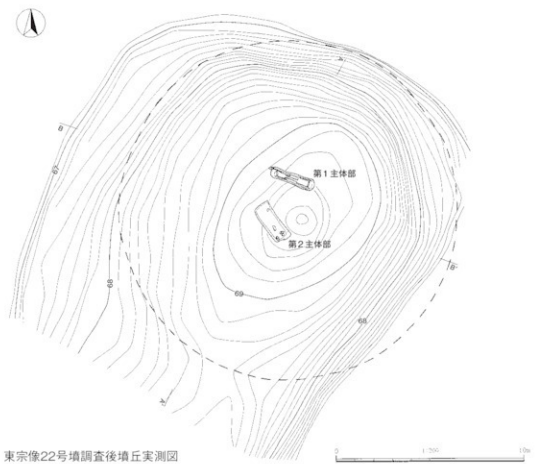
第２主体部（第27図）は、第１主体部の南東の、第１主体部より高い場所に位置する。高い位置にあったため後世の削平によって、主体部はほとんど消滅し、主軸N37°Wの長さ228㎝、幅90㎝、深さ５㎝の掘り形の痕跡を残すのみであった。副葬品を始め時期を特定できる遺物は検出されなかった。

東宗像21号墳（第28～42図）　東宗像21号墳は、尾根部の南側、尾根の最高位の標高79m、東宗像22

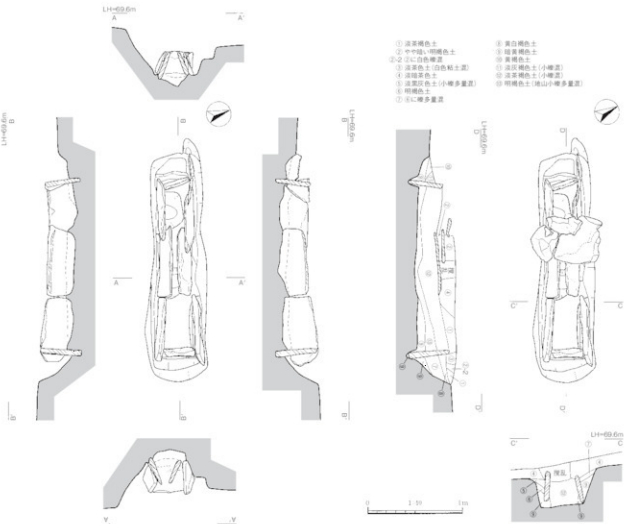


第21図　尾根部遺構配置図

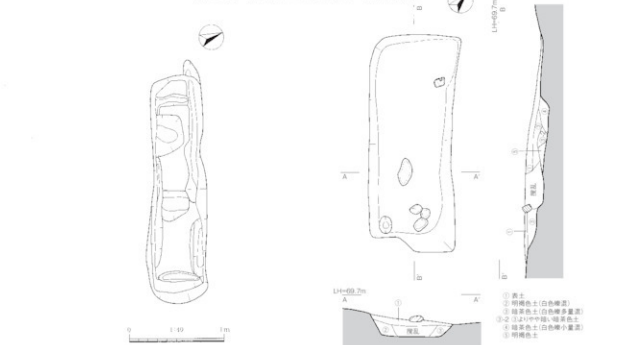
第22図　東宗像22号墳調査前墳丘実測図



第23図　東宗像22号墳調査後墳丘実測図

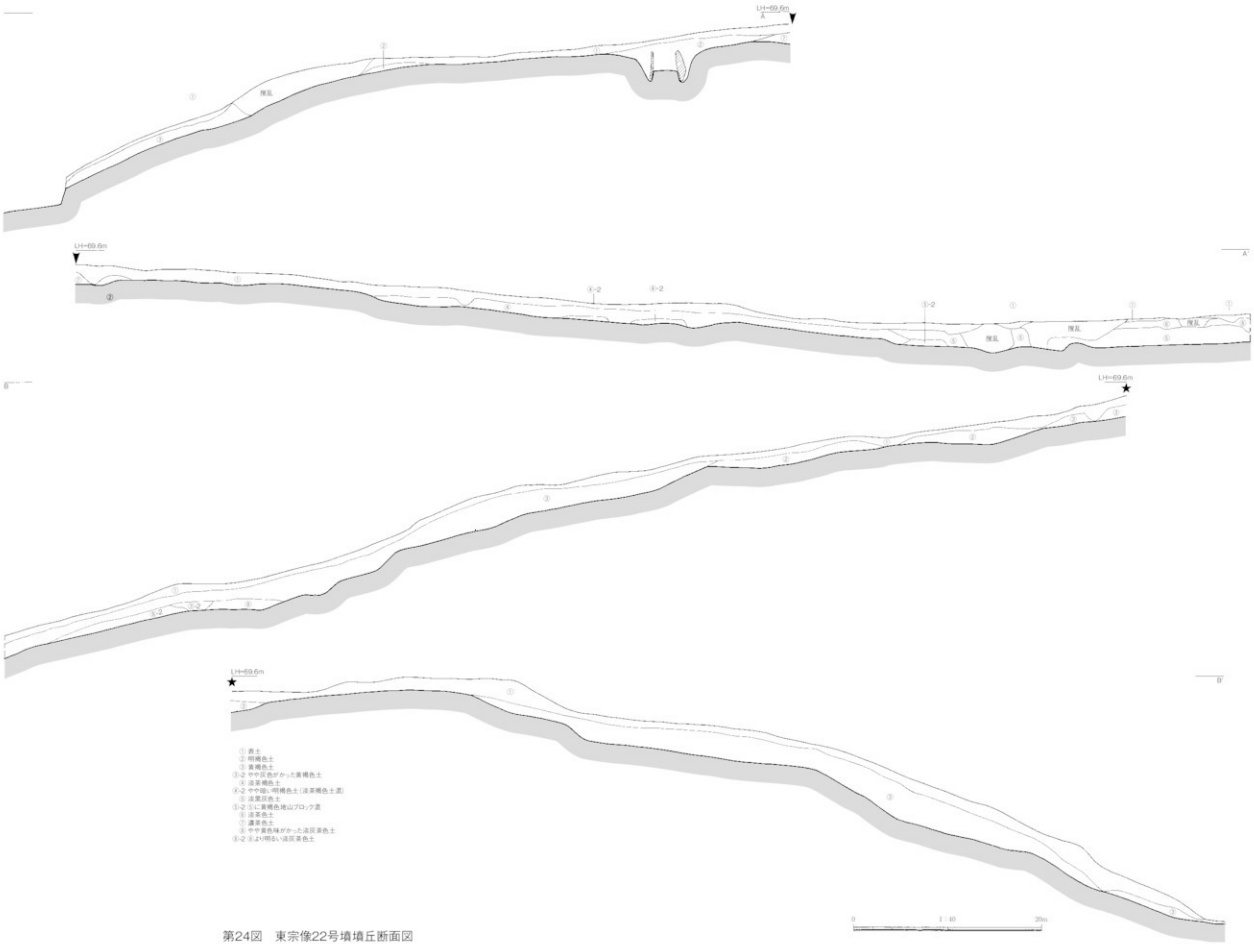


第25図　東宗像22号墳第１主体部実測図



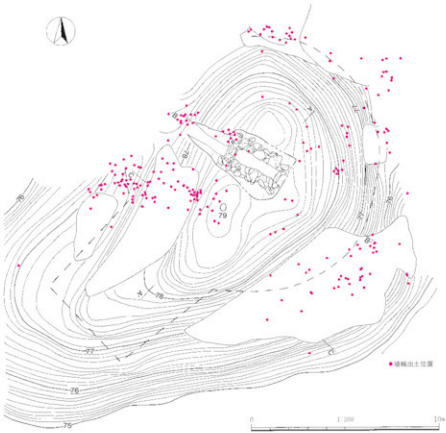
第26図　東宗像22号墳第１主体部掘り形実測図

第27図　東宗像22号墳第２主体部掘り形実測図



第24図　東宗像22号墳墳丘断面図

第28図　東宗像21号墳調査前墳丘実測図



第29図　東宗像21号墳調査後墳丘実測図

号墳の南南西約68mに位置する。現況推定墳丘高は北東側約2.4m、南東側約1.8mで、墳丘の盛土の大半は失われ、遺存状況は芳しくなく、主体部は後世の削平等で天井石が露出した状態であった。現況の地形をみると、後世の削平によってあまり良好ではないが、北東部が広く、南西部が狭い零形を呈していることから、墳丘の形態は長軸９m、短軸６mの帆立貝形の可能性も考えられる。墳丘の築成（第30図）は、ある程度盛土をして墳丘基盤を水平にし、地山まで掘り込み埋葬施設を構築した後、盛土をしたと考えられる。

主体部は墳丘円部のほぼ中央に、長さ3.7㎝（底面3.1m）、幅約2.5㎝（底面1.6m）、深さ1.2～1.3㎝の長方形掘り形内に構築された主体部は、北部九州にみられる「竪穴系横口式石室」に類する横穴式石室で、市内では東宗像６・７号墳、陰田37号墳で確認されている。

玄室規模は内法で奥壁から袖石前端までの長さ286㎝、奥壁側幅56㎝、横口幅（袖石間）50㎝、高さ90㎝を測り、主軸はN57° Wである。石室プランは長方形を呈する両袖形である。小口部の横口構造は、両側壁端に柱石を立て両袖とした横口部に、地山を掘り込んだ羨道が連接する。

羨道は、長さ2.3mが残り、入口幅70㎝、玄室側幅60㎝で、最も狭いところで45㎝である。羨道は、羨道入口部分が崩落しているため、墳丘内で収まっていたか、墳丘端まで至っていたかは不明であるが、玄室に向かって高低差約20㎝で緩やかに下ってはいるが水平に近い。

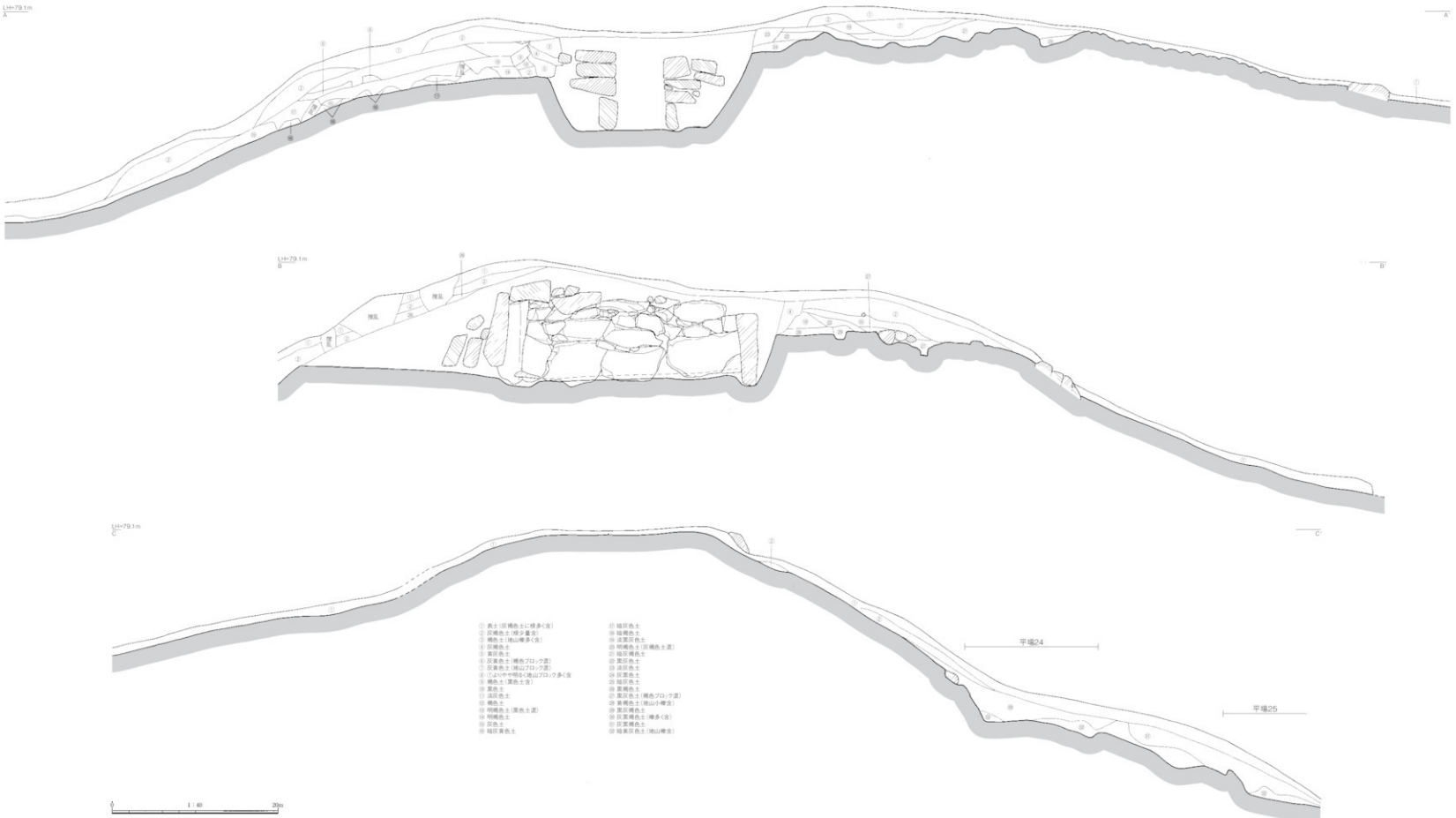
横口部には、袖石に立て掛けるように板状の石によって閉塞され、その外側に大小の塊石が積上げられ、隙間を埋めるように埴輪片を詰めている。石室の構築は掘り形底面の奥壁側に、約10㎝掘り一枚石を埋め立てている。側壁の高さと比べ約10㎝低いので、奥壁の上にも石が１段積んであったと考えられる。奥壁を挟み込むように南北３石ずつ腰石を据えている。

側壁はほぼ垂直で、腰石の上に２段ないし３段に石を積上げて側壁を構築する。北側壁は、腰石上１段目は控えの長い、腰石ほどではないが、やや大きめの石を小口積みにし、その上２段目３段目にやや小ぶりの控えの長い石を積上げる。上面は天井石を乗せることを意識し面をなす。一方西側壁は、東部が一部消滅しているが、北側と同じく２段ないし３段積上げている。腰石上１・２段目は控えが長く小口の幅が狭い小さめの石を使用し、上面は高さを調節するため小ぶりの石を詰込んでいる。北側に比べると粗い造りの印象を受ける。

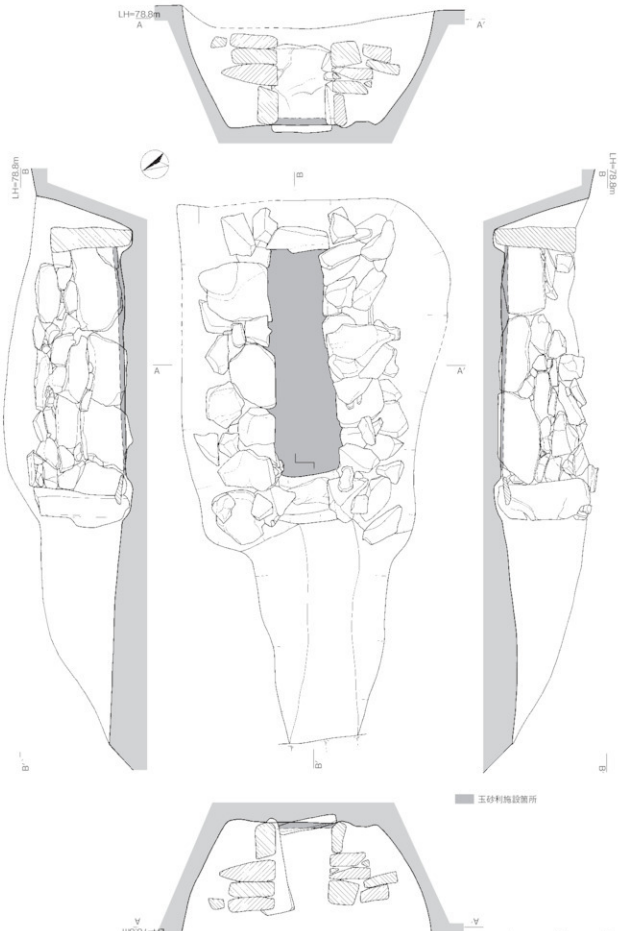
天井石は２枚が残るが、残った天井石の大きさと玄室の規模から推定すると、当初は５～６枚の天井石があったと思われる。玄室内床面には玉砂利が敷詰められ、両袖石の間には踏み石が敷かれていた。

出土遺物（第37～42図）天井石の一部がなく、石室の一部が破損していることから、盗掘にあったと思われ、時期を指標する土器は検出されなかったが、玄室内床面から馬具、鉄鏃、小玉が副葬品として出土した。このうち馬具と鉄鏃は頭部側と思われる南東隅に集中して出土し、小玉は恐らく胸に飾られていたと思われ、玄室中央部で集中して出土した。Ｆ２・Ｆ３は轡部で、鏡板、立聞、鉤金具、銜、引手が遺存する。鏡板は「ｆ字形」を呈し、左が長さ約15.9㎝、立聞を含めた幅8.2㎝、右が長さ約16.0㎝、立聞を含めた幅8.3㎝、周囲にはそれぞれ22、23本の鋲で留めている。鋲の間隔は左が1.0～1.6㎝、右が0.7～1.4㎝である。あまり大型化していないこと、鋲の数も少ないことから、田中編年（田中2004）でみるとＩＢ式に近く、５世紀末～６世紀初頭のものと考えられる。

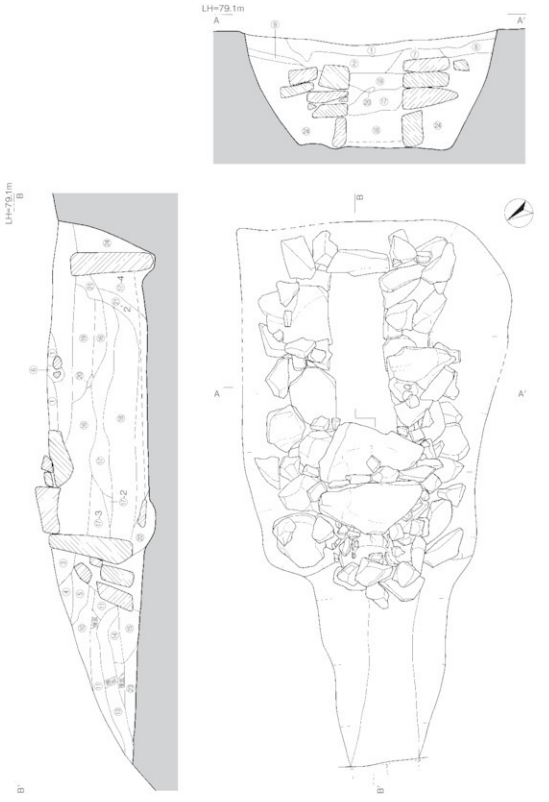
立聞には、面繋と連結する２列の計６本の鋲が残る鉤金具がある。左の鉤金具は長さ5.4㎝、幅1.9㎝、右の鉤金具は長さ7.7㎝、幅1.9㎝である。



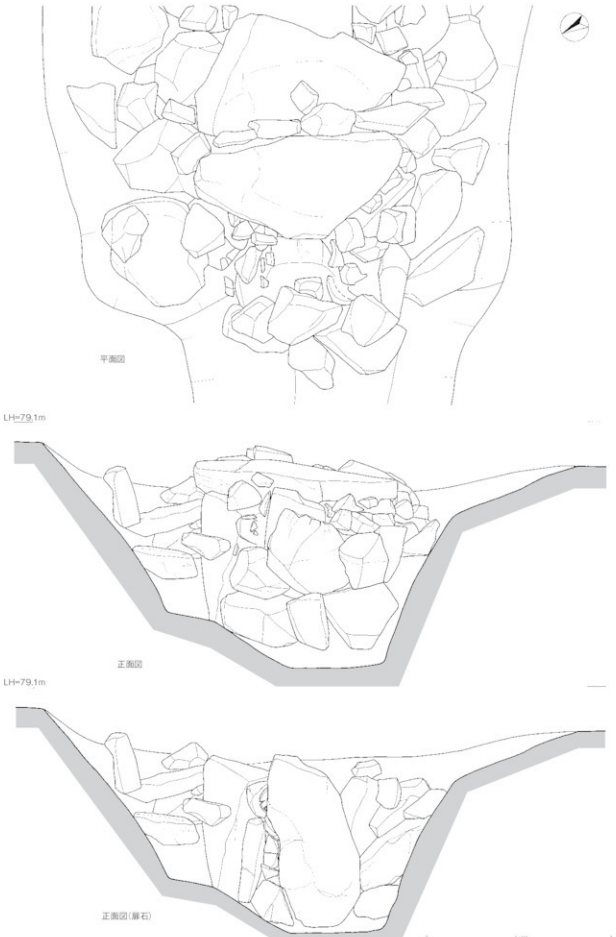
第30図　東宗像21号墳墳丘断面図



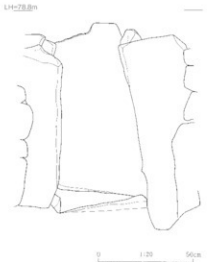
第31図　東宗像21号墳主体部実測図

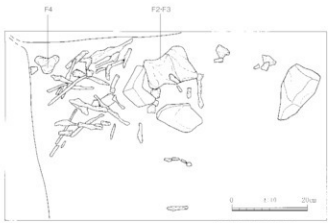


第32図　東宗像21号墳検出状況実測図



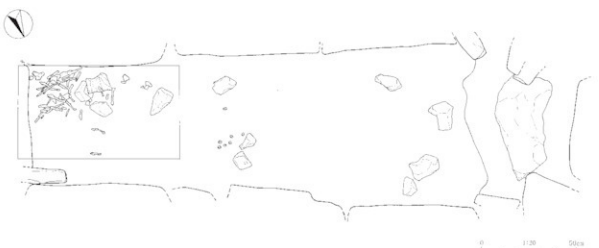
第33図　東宗像21号墳主体部横口部閉塞状況図



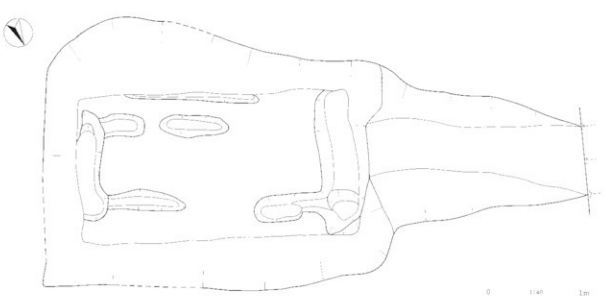


（遺物出土状況拡大図）

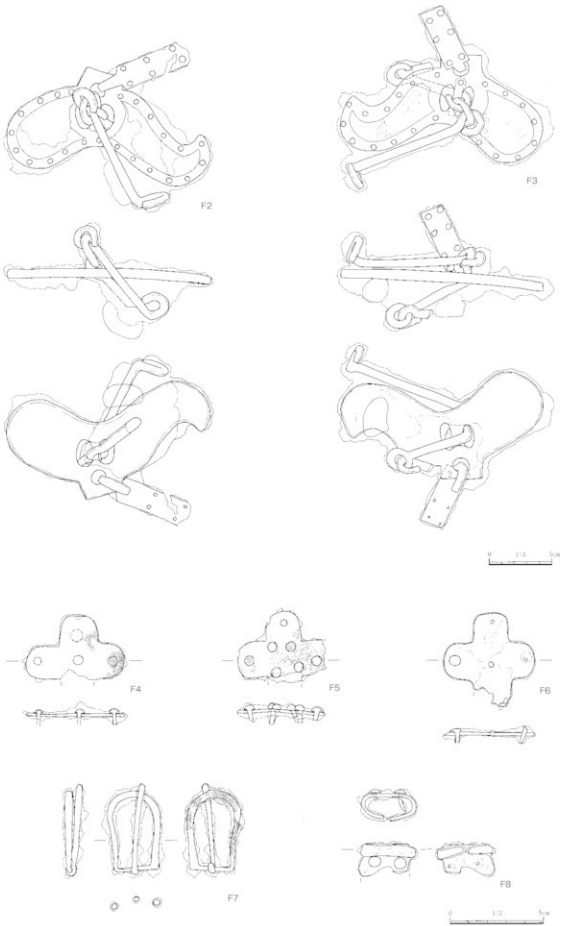
第34図　東宗像21号墳主体部横口部袖石
および扉石状況図（内側）



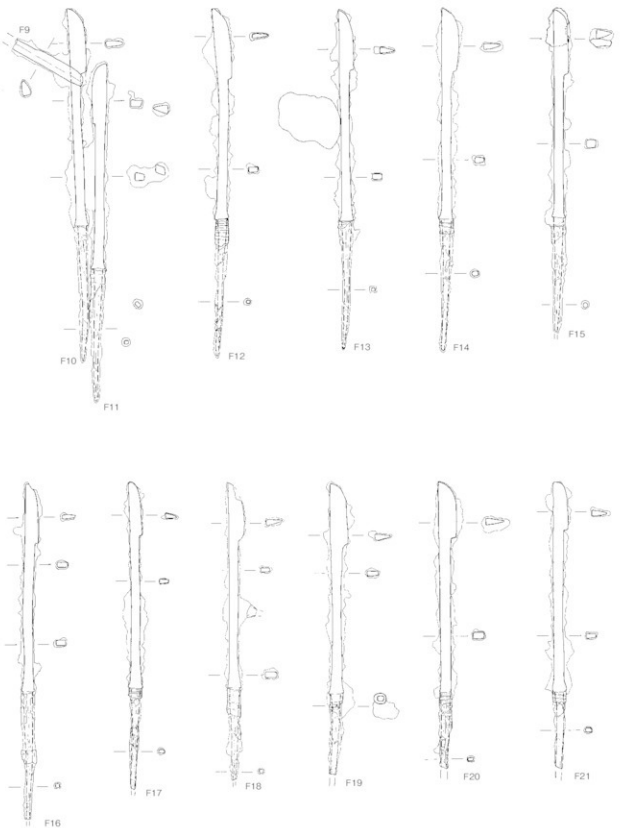
第35図　東宗像21号墳遺物出土状況図



第36図　東宗像21号墳掘り形実測図

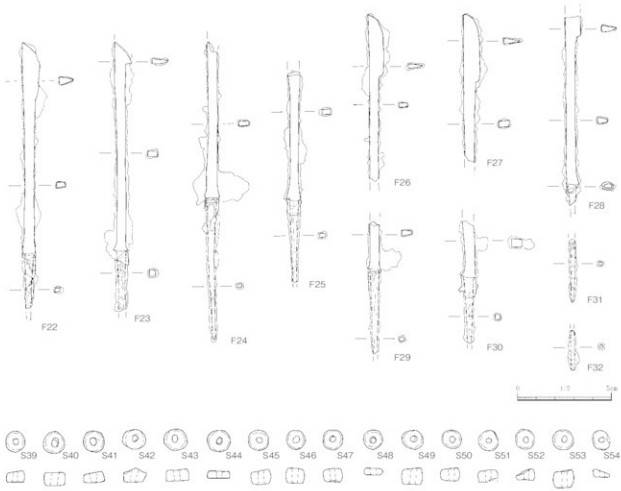


第37図　東宗像21号墳主体部出土遺物実測図（1）



第38図　東宗像21号墳主体部出土遺物実測図（２）

Ｆ４～Ｆ６辻金具、Ｆ７は鉸具、Ｆ８は責金具、Ｆ９～Ｆ32は鉄鏃、Ｓ39～Ｓ54は小玉である。また、玄室以外では墳丘周囲で埴輪片が多く出土している（第29図）。埴輪は取上げ点数で約280点であっ

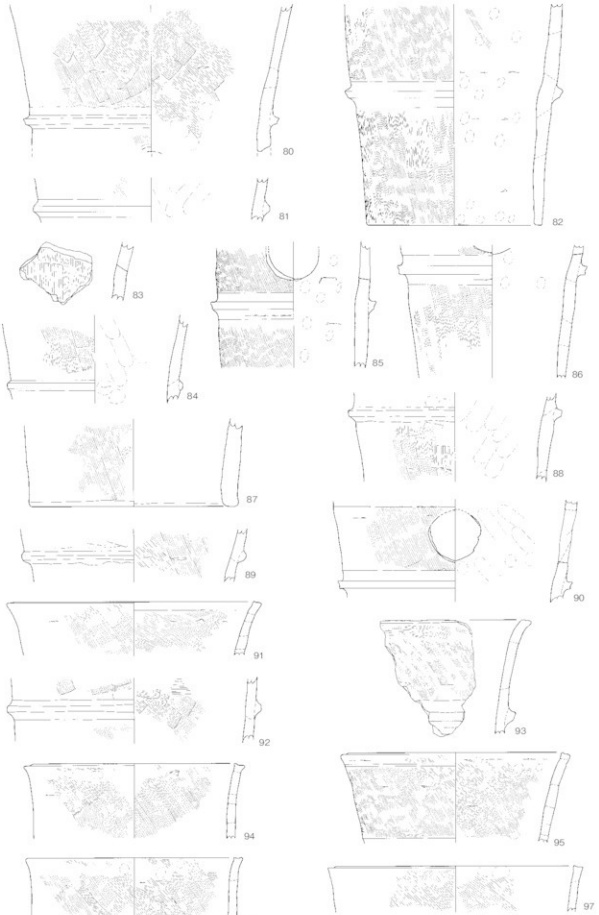


第39図　東宗像21号墳主体部出土遺物実測図（3）

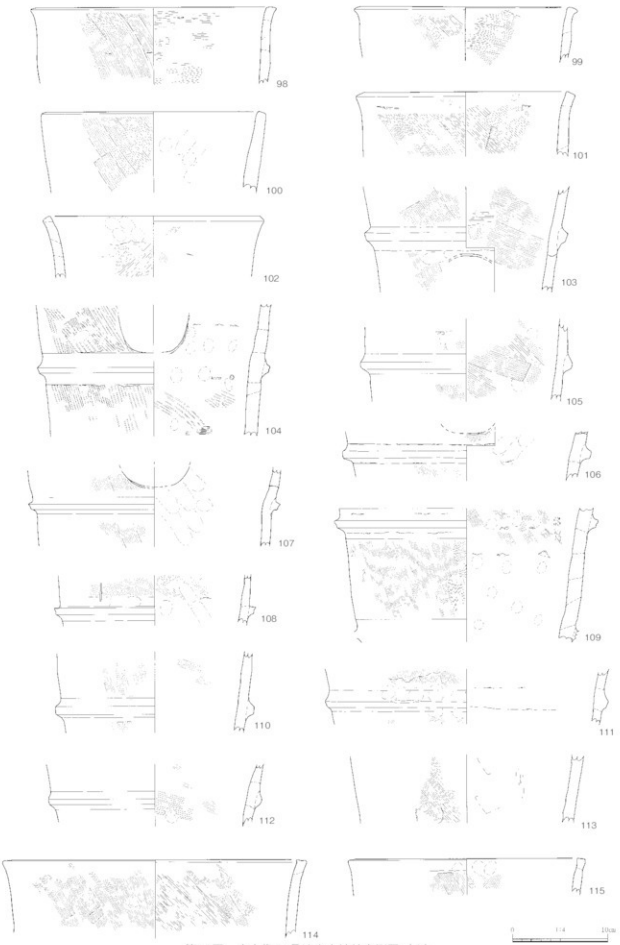
たが、小片が多く図示できたものは№69～№115（第40図～第42図）である。閉塞石と共に詰められていた№69～№82と、21号墳墳丘及び墳裾から出土した№83～№115がある。閉塞部に詰められた埴輪のうち、№69は朝顔形埴輪で、それ以外は普通円筒埴輪である。おそらく最終追葬時に伴う遺物である。ここで注目したいのは、東宗像５号墳の閉塞に使われた埴輪も、同じように朝顔形埴輪１個体のほかは普通円筒埴輪であったことである。東宗像５号墳でもそうであったように、21号墳でも墳丘あるいは周辺からも朝顔形埴輪が出土していない。また、21号墳は墳丘を後世において削平を受けてはいるが、墳丘上で埴輪を埋立てた痕跡は確認されなかった。このことから東宗像５号墳と同様に他の古墳から転用したものと考えられる。墳丘及び墳裾部から出土したものは全体の器形が分かるものはないがすべて普通円筒埴輪と思われ、№83～№89は墳丘南東部、№90～№92は墳丘南西部、№93～№113は墳丘北西部、№113・№114は墳丘北東部裾部側の尾根筋からそれぞれ出土したものである。円筒埴輪の全体の器形が分かるものはないが、２条凸帯３段、第２段に円形透かし孔を穿つ。口縁部はハの字に開き、その端部は平坦面を成す。凸帯は断面梯形で退化はしていない。調整は、外面はナナメハケを施したのち突帯を貼付けヨコナデで密着させる。内面はナナメハケ目を施したものが大半で、№73のようにナナメハケの後ヨコハケをほどこしたもの、№98のようにヨコハケのものもみられる。

時期は、石室の形態から６世紀前葉から中葉と考えられる。石室内から出土した炭化物の自然科学分析（第５章参照）を行ったところ、暦年代AD430～580年という分析結果がでている。

第40図　東宗像21号墳出土埴輪実測図（１）

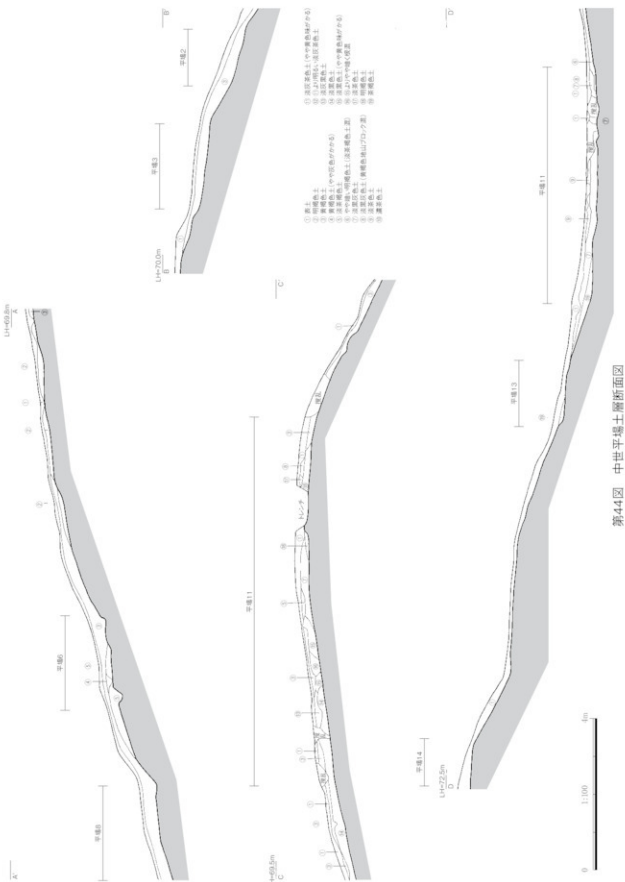


第41図　東宗像21号墳出土埴輪実測図（2）



第42図　東宗像21号墳出土埴輪実測図（３）

第43図　中世平場配置図



第44図　中世平場土層断面図

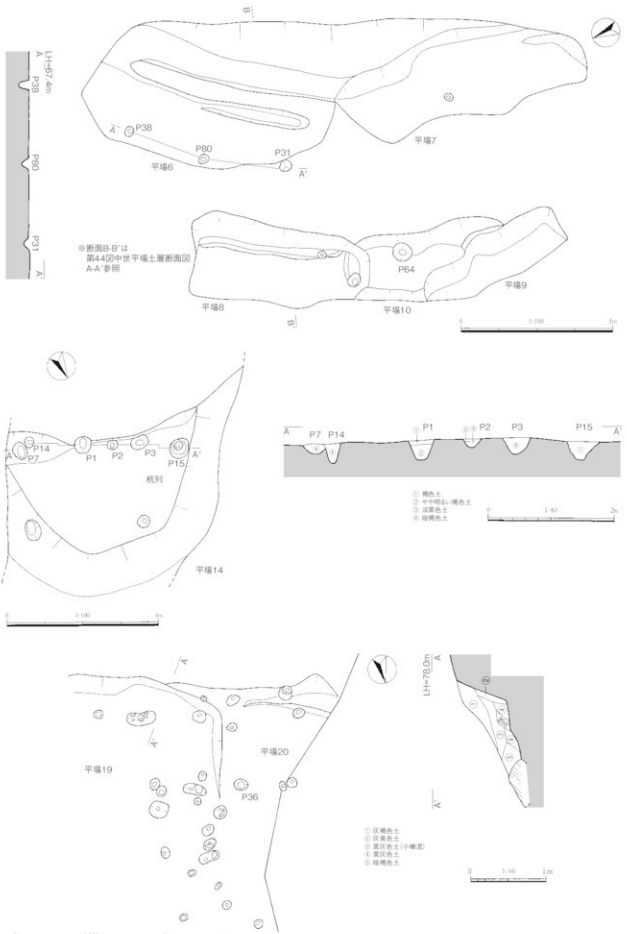
2　中　　世

中世山城跡（第43図）　尾根部中央東宗像22号墳の周辺をA地区、およびそこから南に向い東宗像21号墳裾までの尾根筋をB地区、東宗像21号墳の周辺をC地区とし、各地区において計28個の平場を確認した。各平場の状況を以下の表にまとめた。各平場はそれぞれの地形にあわせて、A・C地区の平場は、鏡状を呈し、古墳の墳丘を囲むように設けられている。B地区の平場は当初はもう少し幅の広い尾根だった可能性はあるが、尾根幅いっぱいに馬蹄形を呈する平場を設ける。平場6、11、14、19、20では柱穴状の穴を確認した。このうちが、平場6、14では柵状に一列に並んだ状態で検出した。しかしながら平場14の杭列は、段直下で検出していることから、柵では意味を為さないことから、土留め等のためのものではないかと考える。もっとも広い平場11においては掘立柱建物を確認

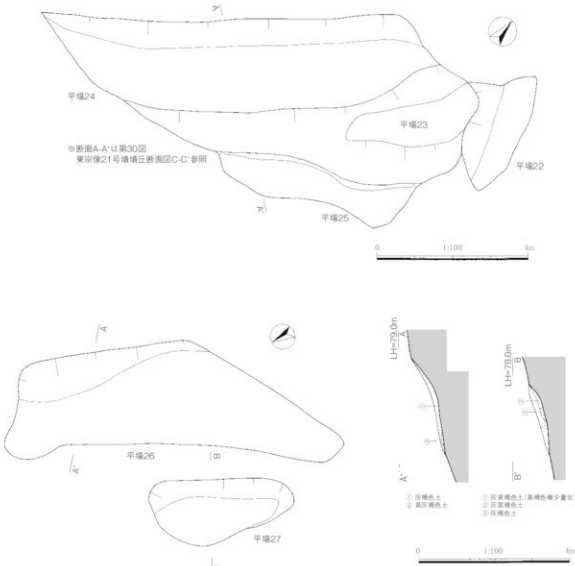
第3表　中世山城跡平場一覧表

	地区	標高（m）	規模（m） （幅×奥行）	面積 （㎡）	備考
平場1	A	67.7	5.5×1.5	6.498	
平場2	A	68.1	5.8×0.8	4.443	
平場3	A	68.9	9×2.4	16.181	
平場4	A	69.1	5×3.6	11.84 ※	
平場5	A	68.9	4.1×2	6.249	
平場6	A	67.3	6.5×2.2	13.147	杭列
平場7	A	67.5	6.6×2	9.423	
平場8	A	65.9	4.4×1.4	6.627	
平場9	A	65.7	4×0.8	2.373	
平場10	A	66	2.5×1	1.972	平場8と9に切られる
平場11	A	68.7	8×6	48.0	掘立柱建物・中世土器溜り
平場12	B	69.2	3×1.1	3.086	
平場13	B	69.3	5×2.2	9.152	
平場14	B	70.8	4.8×2.8	10.45	杭列
平場15	B	72.1	4.3×4.6	22.69	
平場16	B	73.7	3.4×4.1	8.793	
平場17	B	74.6	4.2×4.5	15.158	
平場18	B	75.8	1.7×1.5	2.12	
平場19	B	76.7	3.8×2.5	8.75 ※	杭穴
平場20	B	76.9	2.5×2.4	6.76 ※	杭穴
平場21	C	76.2	2×0.6	1.049	
平場22	C	75.3	3.4×1	2.267	
平場23	C	76.3	3.7×1.3	3.105	
平場24	C	76.7	9.6×1.6	14.55	
平場25	C	75.7	4.9×1	4.544	
平場26	C	77.9	9.2×2.4	15.0	
平場27	C	77.1	3.4×1.1	2.932	
平場28	C	74.9	4.7×1.1	5.568	

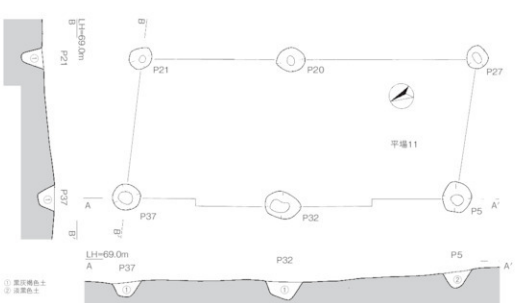
※は、推定値



第45図　中世平場平面および断面図（１）



第46図　中世平場平面および断面図（2）



第47図　掘立柱建物平面および断面図

した（第47図）。平場19、20では、多くの柱穴状のものを確認したが、その性格は不明である。平場20のP36から出土した炭化物の自然科学分析（第５章参照）を行ったところ、暦年代AD1320～1350年、AD1390～1430年という分析結果がでている。

また平場10のP64から出土した炭化物の自然科学分析（第５章参照）を行ったところ、暦年代AD1400～1440年という分析結果がでている。

杭列（第45図）　平場６・14で杭列を検出した。平場６ではほぼ一直線に並ぶ３穴の杭穴を検出した。それぞれの規模は、P38（0.28m×0.26m―0.27m）、P80（0.26m×0.22m―0.21m）、P31（0.34m×0.30m―0.18m）、各杭穴間はP38－P80（2.05m）、P80－P31（2.2m）である。

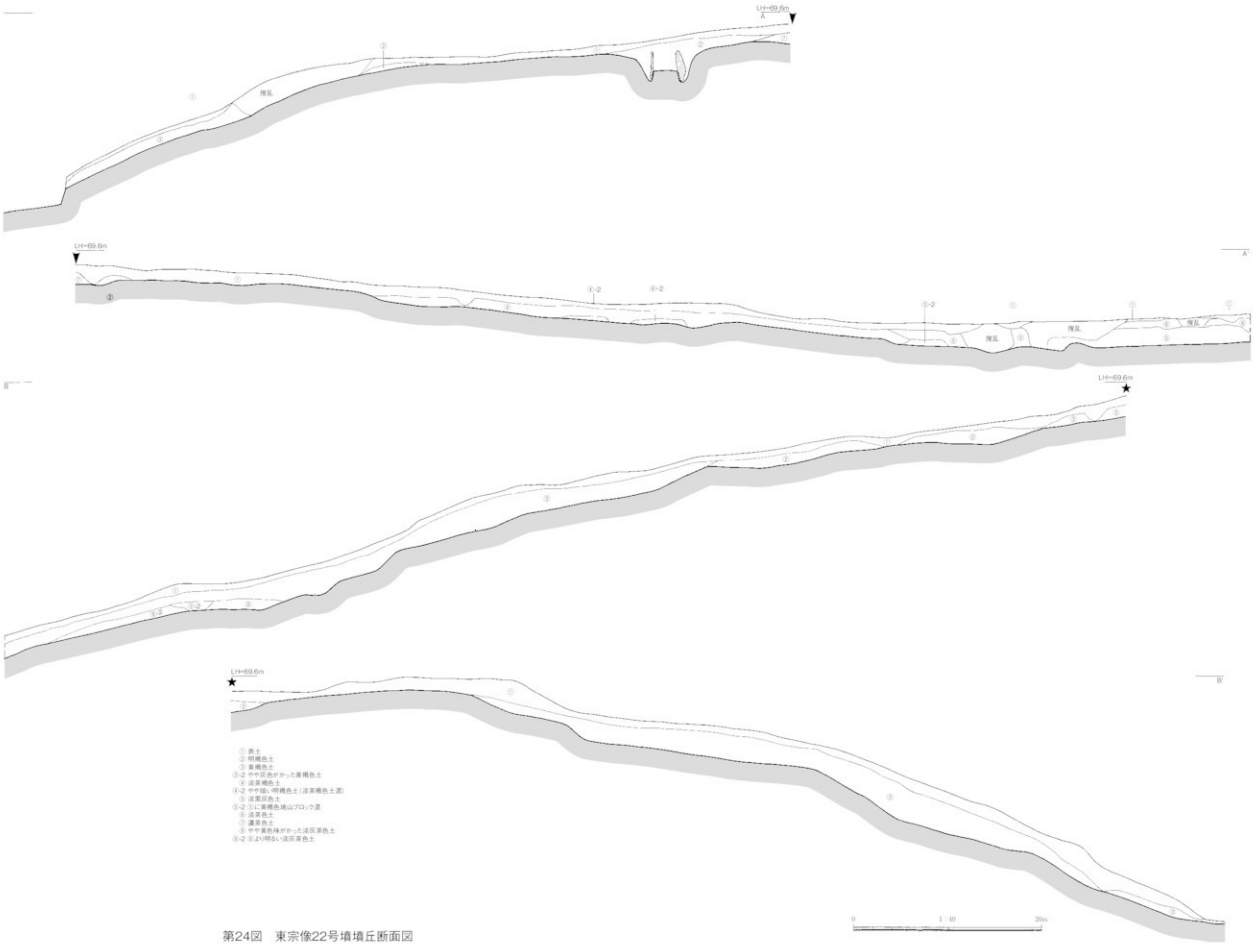
平場14では、８穴の杭穴を検出した。このうちP７・P14・P１・P２・P３・P15は、ほぼ一直線に並び、それぞれの穴の規模はP７（0.47m×0.38m―0.27m）、P14（0.28m×0.26m―0.32m）、P１（0.46m×0.43m―0.32m）、P２（0.31m×0.27m―0.15m）、P３（0.47m×0.35m―0.25m）、P15（0.55m×0.52m―0.3m）、各杭穴間は、P７―P14（０m）、P14―P１（1.4m）、P１―P２（0.8m）、P２―P３（0.7m）、P３―P15（1.0m）である。杭列は、平場を横断するようにほぼ横一列に並んでいるが、柵であるとするとあまり意味がなく、本平場では前述の杭穴以外にP18（0.55m×0.42m―0.24m）・P４（0.35m×0.32m―0.45m）を検出しているが、建物の可能性は低いと考えられることから、土留め等のための杭列と考える。

掘立建物（第47図）　E15標高68.7ｍの東宗像22号墳の南西部の本尾根で最も広い平坦部、平場11で検出した。２間×１間の掘立柱建物で、長辺4.4m×短辺1.9m、主軸はN30° E方向である。柱穴の規模はP21（0.3m×0.28m―0.3m）、P20（0.39m×0.31m―0.18m）、P27（0.31m×0.3m―0.2m）、P5（0.4m×0.4m―0.21m）、P32（0.48m×0.36m―0.24m）、P37（0.4m×0.37m―0.2m）、各柱穴間は、P21―P20（1.9m）、P20―P27（1.95m）、P27―P５（1.95m）、P5―P32（2.3m）、P32―P37（2.05m）、P37―P21（1.85m）である。この建物の南東側の柱間において、土器溜りを検出している。P27から出土した炭化物の自然科学分析（第５章参照）を行ったところ、暦年代AD1410～1450年という分析結果がでている。

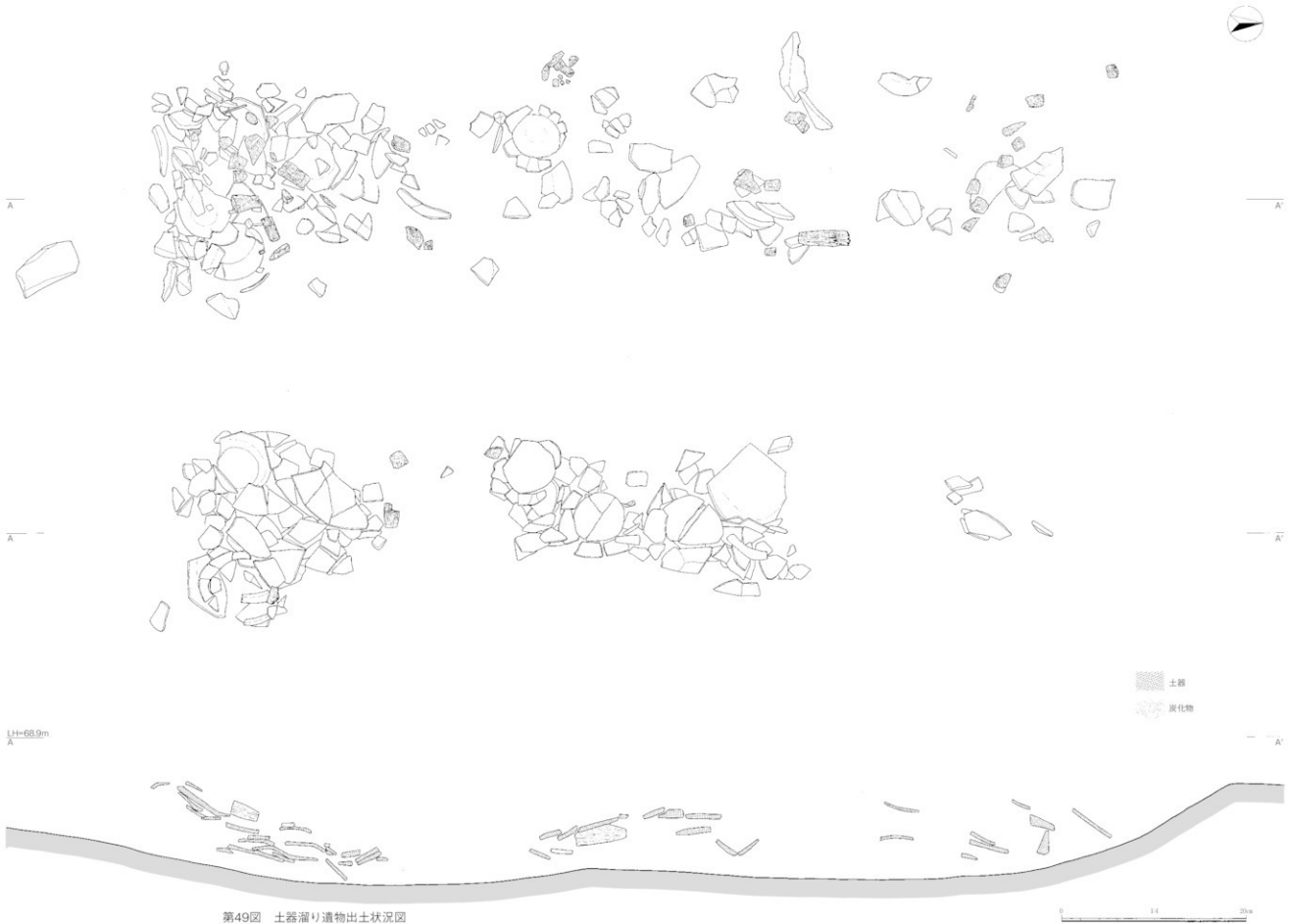
土器溜り（第48・49図）　平場11の標高68.7ｍの掘立柱建物南東側の柱間において検出した。検出時点では、流れ込んだ土器が散乱した状態であると思われた。しかし土器を除去後、精査を行ったところ、上面が削平されていたこともあり、明確な土坑状にはならないが、土坑の北側一部と思われる長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.1mの馬蹄形の落込みをわずかに検出し、これらの土器は土坑内にあったと考えられる。祭祀的意味合いも考えられるが、土器は炭化物と共に重なり合って出土していることから、土器を据えたというよりは、破棄したものと考える。

第48図　土器溜り平面

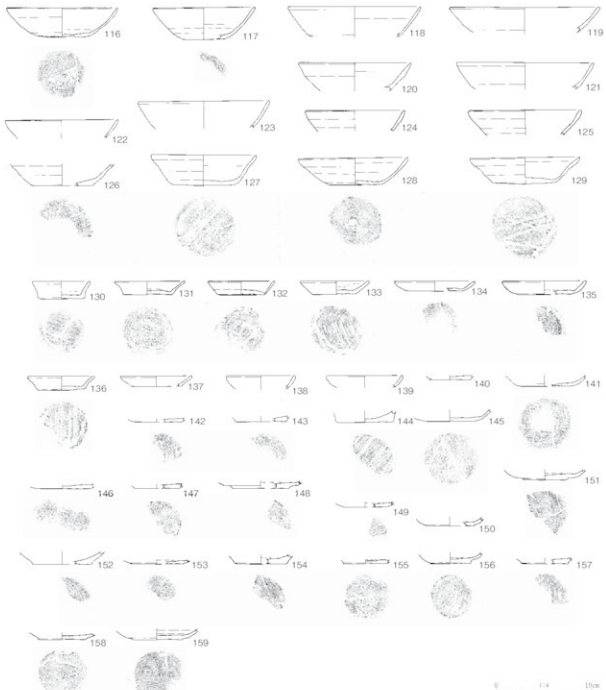
出土遺物（第50図）　すべて土師質土器で、図示したものはNo.116～No.159の44点である



第24図　東宗像22号墳墳丘断面図

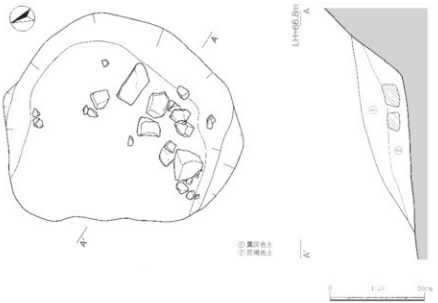


第49図　土器溜り遺物出土状況図

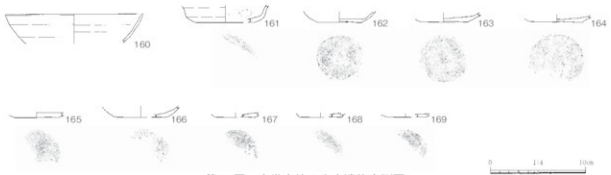


第50図　土器溜り出土遺物実測図

が、器壁が薄く、摩耗したものもあり、同一個体のものを別々に図示している場合があることを断っておく。出土した土師質土器は、全体の器形が分かるものは少ないが、口径が約10cm以上で、器高約３cm以上の大型のもの、口径９cm以下で、器高２cm以下の小型のものの２種類に分類される。前者を坏（№116～№129）、後者を皿（№130～№139）とし、それ以外（№140～№159）は底部のみのため皿として一括掲載した。坏は、№118・119・121・123の口径約14cm以上の比較的大きいものもあるが、中心は11cm台である。器高は３cm程度とあまり高くなく、底径は６cm前後である。皿は、№134・135の口径８cm大のものもあるが、７cm大が中心である。器高は1.5～1.6cmが多く、1.1～1.2cmの低いものもみられる。底径は５cm大が占める。調整は、ほとんどロクロ回転で、底部は№131・



第51図　中世土坑１平面および断面図



第52図　中世土坑１出土遺物実測図

145・146が静止糸切りである以外は回転糸切りである。回転糸切りのうちNo126・127・129・130・132・136・144・154には、板目圧痕がのこる。時期は13世紀～14世紀と考えられ、土師質土器と共に出土した炭化物の自然科学分析（第５章参照）を行ったところ、暦年代AD1290～1410年の分析結果がでている。

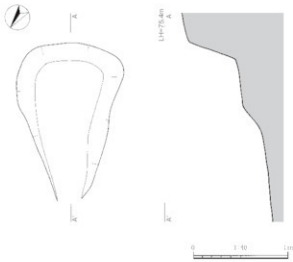
中世土坑　中世山城跡と関連する遺構と考えられるその他の遺構として中世土坑４基を検出した。

中世土坑１（第51図）　F15の標高68.2ｍで検出した。谷側は消滅し馬蹄状を呈する長軸1.22ｍ、短軸1.02ｍ、深さ0.28ｍのやや隅丸方形気味の土坑である。中には土師質土器と15㎝大の石塊が入っていたが、流込みの可能性もある。

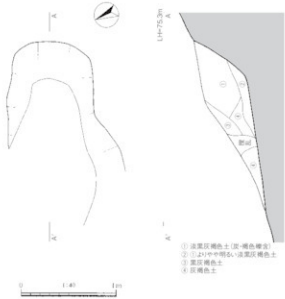
出土遺物（第52図）　土師質土器10点が出土し、うちNo160は口径14.5㎝、器高3.1㎝の坏である。そのほかは、全体の器形がわかるものはないが、13世紀～14世紀頃と思われる。

中世土坑２（第53図）　H20の標高75.2ｍで、中世土坑３の東側で検出した。谷側は消滅し馬蹄状をする長軸0.83ｍ、短軸0.54ｍ深さ0.29ｍの隅丸方形と思われる土坑である。中から何も出土しなかったため正確な時期は不明であるが、中世土坑３と隣接し、同じような形状をしていることから中世土坑３と同時期のものと考えられる。

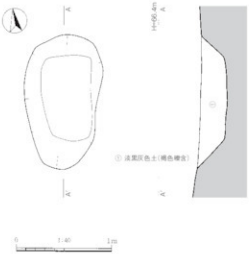
中世土坑３（第54図）　H20の標高75ｍで検出した。谷側は消滅し馬蹄状をする長軸約1.0ｍ、短軸約0.46ｍ、深さ0.28ｍの隅丸方形と思われる土坑である。中に遺物はなかったが炭化物があったため、



第53図　中世土坑２平面および断面図



第54図　中世土坑３平面および断面図

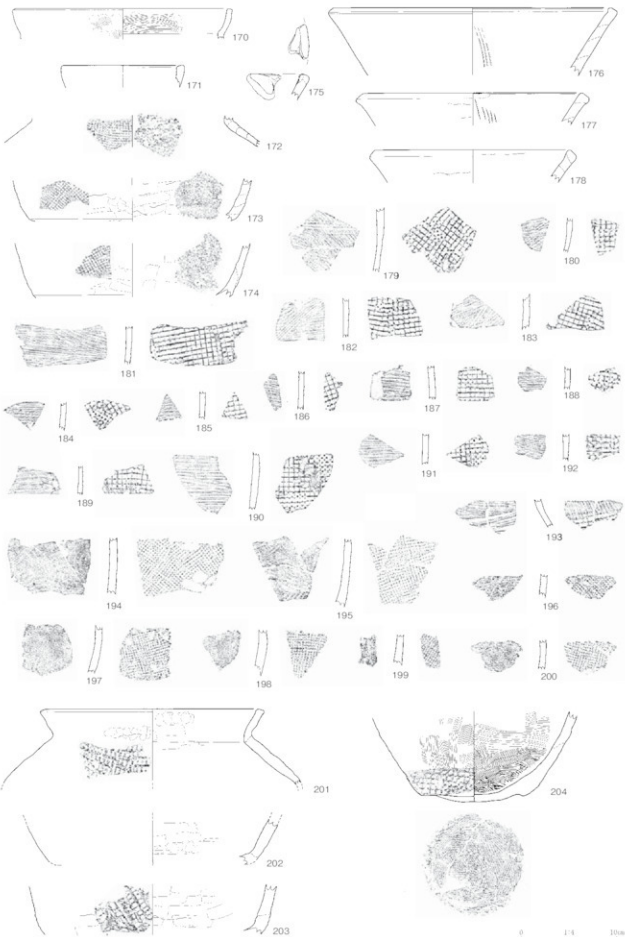


第55図　中世土坑４平面および断面図

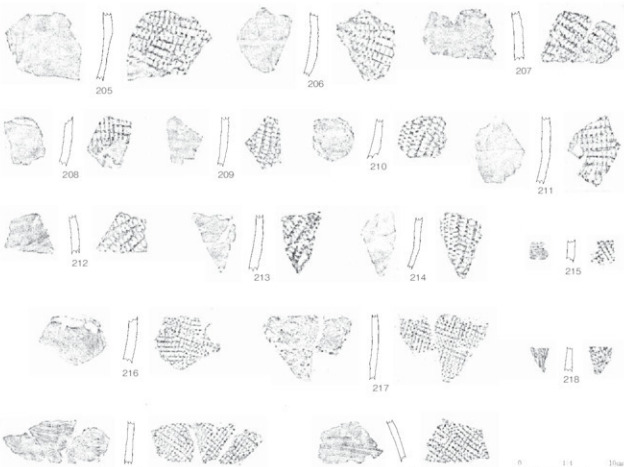
自然科学分析（第５章参照）を行ったところ、暦年代AD1230～1230年、AD1240～1250年、AD1250～1290年の分析結果となり、おおむね13世紀のものと考えられる。

中世土坑４（第55図）Ｆ14の標高66.3ｍで検出した。長軸0.71ｍ、短軸0.42ｍ、深さ0.2ｍの楕円形の土坑である。中から何も出土しなかったので正確な時期は不明であるが、周辺に他の時期の遺構・遺物がないことから中世のものと考えられる。

中世の遺物（第56図～第59図）　中世の遺物はほとんどが遺構外からの出土である。№170～№200、№221～№233、№235～№289、Ｍ７～Ｍ９はＡ地区周辺で出土したもの、M10はB地区で出土したもの、№201～№220、№234、№290、№298、M11はＣ地区周辺で出土したものである。№170～№174、№179～№220はいずれも外面に敲き目の亀山系の甕である。№170～№172・№201は口縁部で、№170・№171は内湾気味に、№201は若干稜が残るが「ハの字」に広がる口縁部である。№172は肩部、№173・№174・№202～№204は底部および底部付近である。小片が多く復元実測できなかった小片については断面および拓本によって図示した。№175～№178は瓦質の擂鉢の口縁部で、いずれも大きく「ハの字」に開く口縁部で、№175～№177は内面にスリメがみられる。№221～№290は土師質土器で、№234・№290がＣ地区で出土した以外はＡ地区で出土したものである。土器溜りで出土した土師器と同様、口径が約10cm以上で、器高約３cm以上の坏、口径９cm以下で、器高２cm以下の皿の２種類に分類される。全体の器形が分かるものは少ないが、№221～№239は坏で、低部のみであっても坏と思われるものを含めた。№240～№290は底部のみで器形が分からないものも含め皿として掲載した。このうち№240～№263は底部から直線的に口縁部が立ち上がるもの、№264～№278は「くの字」に立ち上がるもの、№280～290の丸味を帯びて立ち上がるものと思われる。№298は常滑系の



第56図　尾根部遺構外出土遺物実測図（１）



第57図　尾根部遺構外出土遺物実測図（2）

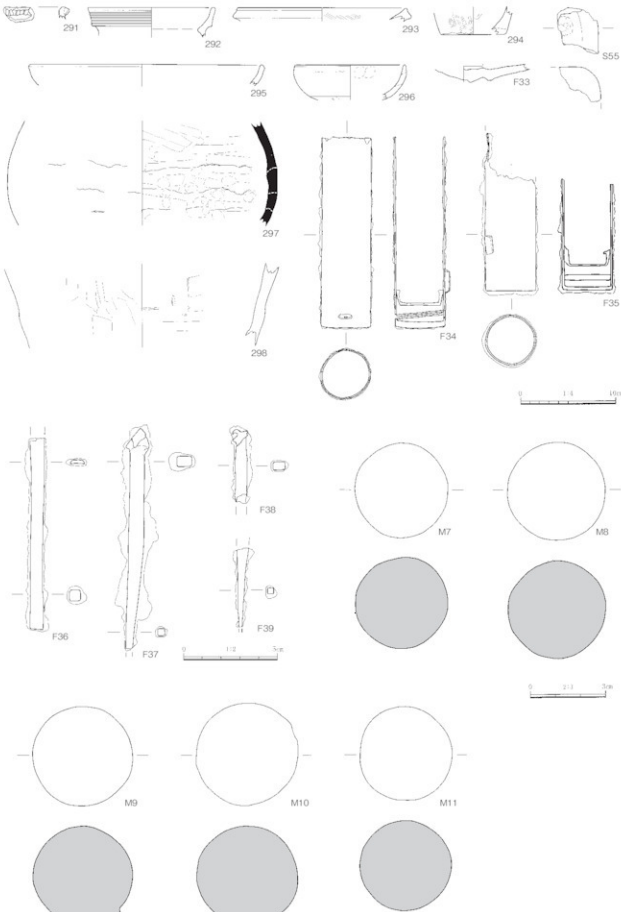
陶器である。M７～M11は鉛の玉で、大筒の玉と思われる。

尾根部では、土器のほか河原石が多く検出されている（第４表）。これらはつぶてとして使用されたと考えられ、石の大きさは大きいものは、20㎝大、重さ4000g以上と片手では投げられないものから、小さいものは５㎝大、重さ75g程度の小ぶりなものと様々な大きさの石を検出している。石の大きさは平均すると、縦11.8㎝、横8.7㎝、重さ1009.4gで、ほとんどは1000g以下と片手で投げられる大きさのものである。

第３節　尾根部の遺構外遺物について（第59図）

尾根部の遺構外からで出土した遺物は、ほとんどが前述した中世のものである。ここでは、中世の遺物以外のものを明記する。№292～№294は弥生土器で、№292・293は甕の口縁部、№294は甕の底部である。№295.296は土師器で、前者は甕の口縁部、後者は坏である。№297は須恵器の甕の胴部である。F33～F39は鉄製品で、F33は鉄鏃、F34･35は薬莢、F36～F 39は釘である。S55は磨石で、東宗像22号墳の主体部内から出土したものであるが、流れ込みの遺物と思われるためここに掲載した。

第58図　尾根部遺構外出土遺物実測図（3）



第59図　尾根部遺構外出土遺物実測図（4）

第４表　観音寺狼谷山遺跡つぶて石一覧表

遺物番号	地区名	縦（cm）	横（cm）	重量（g）
89	J-4	9.4	8.3	640.0
123	K-4	9.8	8.0	540.0
682	C区	10.9	7.4	427.0
870	A区	9.8	7.2	616.1
870	A区	8.7	6.6	438.5
884	C区	9.3	7.5	528.9
903	A区	10.4	6.7	362
904	A区	11.3	7.8	526
905	A区	8.8	7.5	426
906	A区	10.4	7.5	595
907	A区	12.2	6.6	496
908	A区	11.7	6.6	477
909	A区	12.1	11.2	990
910	A区	6.7	5.7	192
911	A区	6.6	5.4	173
912	A区	5.3	4.7	75
913	A区	12.1	5.8	441
914	A区	7.3	4.4	169
915	A区	12.2	9.2	815
916	A区	12.5	10.4	1305
917	A区	13.3	9.2	917
918	A区	10.1	7.7	659
919	A区	15.0	9.4	1279
920	A区	15.9	10.9	1842
921	A区	15.6	10.3	1540
922	A区	12.6	10.4	1328
923	A区	7.2	4.6	153
924	A区	9.1	5.4	206
925	A区	8.9	6.6	503
926	A区	5.7	5.2	143
927	A区	9.2	5.0	167
928	A区	7.2	4.4	133
929	A区	6.0	4.4	110
930	A区	7.3	5.5	181
931	A区	27.6	13.7	2856
932	A区	14.0	10.5	1310
933	A区	14.6	8.1	932
934	A区	12.3	5.9	482
935	A区	14.0	12.5	1606
936	A区	15.8	9.5	1405
937	A区	5.8	3.7	84
938	A区	16.9	12.2	2636
939	A区	14.8	8.8	1424
940	A区	15.0	9.2	1167
941	A区	10.2	7.8	584
942	B区	20.5	13.5	3500
943	B区	12.2	8.8	747
944	B区	13.0	10.2	1013
945	B区	12.8	10.5	986
946	B区	16.0	10.0	1526
947	B区	13.8	10.8	988
948	B区	18.6	10.3	1407
949	B区	10.6	9.0	774
950	B区	11.1	7.9	648
951	B区	12.5	7.6	745
952	C区	12.3	10.7	1372
953	C区	11.2	8.6	748
954	C区	13.2	12.8	2011
955	C区	11.6	9.5	754
956	C区	9.3	8.2	619
957	C区	13.6	11.1	1482
958	C区	10.9	6.2	422
959	C区	11.7	6.4	356
960	C区	6.9	4.5	122
961	C区	5.2	3.7	76
962	C区	15.9	12.7	2637
963	C区	14.6	12.3	1343
964	C区	10.7	9.1	1029
965	C区	12.2	9.2	1025
966	C区	10.3	8.8	677
967	C区	9.0	8.4	572
968	C区	12.3	6.8	292
969	C区	8.2	7.8	306
970	C区	9.8	6.9	348
971	C区	9.5	7.3	438
972	C区	7.8	6.9	310
973	C区	9.1	9.0	837
974	C区	10.4	8.3	424
975	C区	19.5	14.1	3360
976	C区	11.4	6.8	580
977	C区	11.7	10.5	1151
978	C区	11.0	8.0	513
979	C区	6.6	6.5	180
980	C区	6.0	3.5	100
981	C区	13.7	9.5	1192
982	C区	9.9	8.8	853
983	C区	11.7	8.1	598
984	C区	12.0	8.9	930
985	C区	13.4	9.0	1020
986	C区	7.7	5.5	235
987	C区	7.2	6.5	193
988	C区	17.4	10.6	2088
989	C区	17.2	12.8	3200
990	C区	11.2	9.6	957
991	C区	9.7	9.1	876
992	C区	9.4	7.4	450
993	C区	8.5	7.8	392
994	C区	8.7	7.5	533
995	C区	12.8	12.6	1447
996	C区	12.9	8.1	485
997	C区	16.4	12.2	1806
998	C区	11.0	5.2	492
999	C区	12.2	10.5	1267
1000	C区	16.4	12.9	1897
1001	C区	16.9	14.8	2855
1002	C区	11.8	9.2	840
1003	C区	15.8	12.7	2794
1004	C区	16.9	12.1	2741
1005	C区	19.0	10.5	2636
1006	C区	11.2	7.4	802
1007	C区	9.4	7.8	721
1008	C区	8.7	7.7	531
1009	C区	12.6	9.6	1374
1010	C区	14.3	10.0	1098
1011	C区	18.4	14.9	4690
1012	C区	22.0	19.3	4800

第５章　まとめ

今回調査した観音寺狼谷山遺跡は、1983年から1984年に調査がおこなわれた東宗像遺跡、1986年に調査がおこなわれた大塔山横穴墓群とは尾根続きであるため、一連の遺跡と考えられることから、これらの遺跡との関連を知る上で意味のある調査であった。

この一連の遺跡の中で最も古い時代の遺構としては、明確な時期は特定できないが、東宗像遺跡で陥穴が検出されていることから、縄文時代まで遡ることができよう。今回の調査では、遺構の確認はできなかったが、谷部において縄文時代後期の遺物が数点出土していることから、この地では縄文時代から人々の活動が行われていたようである。しかしながら生活の拠点がどこにあったのかは、今のところ不明であり、この後弥生時代中期まで空白時期となる。

弥生時代中期になると東宗像遺跡において竪穴建物が確認される。今回の調査においてはこの時期の集落跡は確認されなかったが、谷裾部においてこの時期の遺物が出土していることから、今回の調査地周辺においてもこの時期の何らかの営みがあったと考えられる。しかし遺物の出土量が少ないことから、生活の拠点は東宗像遺跡のある北西側尾根であったと考えられる。東宗像遺跡では後期まで続くものと思われる。

古墳時代前期の生活の痕跡は現在確認されておらず空白の時期であるが、中期になって東宗像遺跡のある尾根において竪穴建物等生活の痕跡がみられるようになる。今回調査した東宗像22号墳は遺物の出土がないため正確な時期決定はできないが、これらの集団とのつながりが考えられる。この後、後期に入ると、この尾根は生活の拠点から墓域となり、尾根筋に沿って古墳が築造されるようになる。東宗像遺跡の古墳は今回調査を行った東宗像21号墳も含め、おおむね６世紀前葉から中葉の時期の築造される古墳時代後期古墳群である。ここで東宗像古墳群のなかの特徴的な「竪穴系横口式石室」を有する遺存状態の良好な2基の古墳を比較検討してみた。次頁の表はそれぞれの特徴をまとめたものである。

今回調査した東宗像21号墳を、同じ竪穴系横口式石室を有する東宗像６号墳と比較すると、主体部、プラン、閉塞状況などをみるとほぼ同じように見える。しかしながら横口部に段がなく、水平に近い墓道を持つという大きく異なる点が２点ある。これは竪穴系横口式石室の新しい要素であることから、東宗像21号墳は東宗像６号墳より新しいと考えられる。このタイプの竪穴系横口式石室を有する古墳は陰田37号墳にみられる。陰田37号墳が６世紀中葉であることから、東宗像21号墳の築造は、古くても６世紀前葉から中葉であると考えられる。また、閉塞部に朝顔形埴輪と円筒埴輪をセットで詰めるという閉塞状況において、東宗像５号墳との共通点がみられる。閉塞部に埴輪を詰める行為が追葬時における何らかの風習であったとするならば、この２基の古墳は同じ時期まで追葬が行われたと考えられる。このことから東宗像21号墳の最終追葬は６世紀中葉と考えられる。

となると、石室内から出土したｆ字形鏡板の形式が５世紀末～６世紀初頭のものであり、築造時期との時間差が生じてくる。このことは、轡は実際に使用されていたもので、東宗像21号墳の被葬者を埋葬する際に供献されたと考えるならば説明がつくであろう。当時貴重であったと思われる轡をはじめとする馬具を持ち、東宗像古墳群の中で最も好立地に埋葬されていることから、東宗像21号墳の被葬者はかなり位の高い盟主であった可能性が考えられる。

	東宗像21号墳	東宗像６号墳
標　高	79m	34m
墳　形	帆立貝形？	円墳
周　溝	無	有
玄室規模	最大幅85㎝ 長さ　286㎝ 玄室高　80㎝	最大幅54㎝ 長さ　230㎝ 玄室高　80㎝
周壁構造	奥壁　１枚石 両側壁大型の石を横長に据え腰石とした上に三段の割石を積みあげる。	奥壁　１枚石 両側壁大型の石を横長に据え腰石とした上に三段の割石を積みあげる。
袖　石	両側壁横口部に柱石を立てる両袖構造	両側壁横口部に柱石を立てる両袖構造
横口部の段の有無	段は無く、地山を僅かに堀窪めた上に踏み石を置く	墓道と玄室床面に15㎝の地山削り残しの段
閉塞状況	板状の石で閉塞後、外側に塊石を積む。墳輪を詰める。	板状の石で閉塞後、外側に塊石を積む。遺物無。
石室前面	前庭・羨道無。地山を掘り込んだ墓道がやや斜め上方にのびるが、水平に近い。	前庭・羨道無。地山を掘り込んだ墓道が斜め上方にのびる。
石　室設置状況	370㎝×250㎝－130㎝の地山を掘り込んだ掘り形内に据える。	310㎝×200㎝－85㎝の地山を掘り込んだ掘り形内に据える。
時　期	６世紀前葉～６世紀中葉	６世紀前葉

古墳時代終末期になると、大培山と東宗像で横穴墓が構築される。大培山の横穴墓は６世紀後葉～７世紀前葉、東宗像の横穴墓は６世紀後葉から構築され、奈良時代になり８世紀前葉まで追葬がおこなわれていた。奈良時代の観音寺狼谷山遺跡、東宗像遺跡では段状遺構が造られるようになり、再び人々の生活の場となる。

中世になり戦国の時代を迎えると、見晴らしの良い好立地にあるこの地に山城が造られる。今回調査を行った観音寺狼谷山遺跡の尾根続きの北側先端部には、戸上山城の存在が知られていることから、確認された平場等は戸上山城の一部と考えられる。平場は、古墳を削って地形を利用して尾根の全体に造られている。県内では鳥取市の倭文遺跡で同じように、古墳を削って山城が造られている。戸上山城については「伯耆誌」に僅かに記述がみられる程度で、文献も少なく、未調査のため詳細は不明である。ここで出土した遺物から戸上山城の時期について検討してみた。

今回の調査で最も多く出土したこの時期の遺物は、土師質の皿・坏である。鳥取県内出土の中世土師質の皿・坏類については、八峠 興氏、中森 祥氏によって検討が行われているが、ここでは中森 祥氏の形態的な分類による変遷案をもとに検討をおこなった。

まず皿であるが、全体の形態が分かるものは13点である。口径は、最も大きいものは8.8㎝で、6.7～7.5㎝が中心である。器高を見てみると最も高いのは1.9㎝であるが、中心は1.5㎝前後である。口縁形態は、内湾気味のもの４点、外傾および外反するもの９点である。底径は、最も大きいものが6.2

㎝であるが、中心は5.0㎝前後である。

次に坏であるが、全体の形態が分かるものは７点である。口径は11.5前後が中心である。器高は、最も高いものは3.8㎝で、中心は3.0～3.5㎝である。口縁形態は体部から直線的に外傾するもの４点、体部が丸味を持つもの３点、底径６㎝以上のもの4点、5.0㎝前後のもの３点である。

以上の点から、皿は器高が低く古い様相を示すが、錦町第一遺跡、博労町遺跡で出土している土師質皿と比べ、器壁が薄いことから、中森編年Ⅳ期～Ⅴ期まで下ると考えられる。坏については、口径も小さく、やや器高が低く、口縁形態も丸味を持つことから14世紀ごろと考えられる。このことから本社から出土した土師質皿・坏の時期は13世紀～14世紀と考えられる。このことは今回の調査で出土した、亀山系の甕、常滑系の甕、試掘調査の際に出土した青磁片の時期が13世紀～14世紀であることと一致することから、戸上山城の時期は13世紀～14世紀と考えられる。

また、土師質土器の出土量に比べ、この時期の遺物が少なく、住居空間がないことから、土師質土器は、鈴木康之氏が提唱するよう（鈴木2003）に日常的な器ではなく、「かりそめ」の器であったと思われる。この時期西伯耆の要の城は尾高城であったと考えられることから、この戸上山城は出城のような役割を担っていたと思われる。以上のことから、この地は有事の際の場所であり、これらの土師質土器は有事の際の儀礼的な饗宴の器であったと考えられる。

以上、今回の調査では、東宗像古墳群の新たな様相と、未調査であった戸上山城の一部ではあるが、一端を知りうることができた。しかしながら観音寺狼谷山遺跡と東宗像遺跡の間にある東宗像古墳群および観音寺狼谷山遺跡から北にのびる尾根にある観音寺古墳群にはまだ未調査の古墳が多く存在する。また戸上山城についても調査が行われていないため、今回の調査において、まだこの地の全体の様相を知りうることはできない。今後更なるの調査によって新たな事実が解明されることを期待する。

引用・参考文献

園　俊朗ほか　1985『東宗像遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団

中原　斉ほか　1987『大培山横穴墓群』財団法人鳥取県教育文化財団

米子市編　1999『新修米子市史第７巻』米子市

鈴木康之　2003「土師器系土器―中世土器に与えられた意味―」『季刊考古学85』雄山閣

田中由理　2004「ｆ字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究51-2』　考古学研究会

山田真宏　2004『倭文所在城跡・倭文古墳群』財団法人鳥取市文化財団

中森　祥　2005b「中世前期の遺物について」『門前上屋敷遺跡』財団法人鳥取県文化財団

中森　祥　2006「鳥取県における中世後期土師器の展開」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要１』　鳥取県埋蔵文化財センター

瀬野浩美　2011「博労町遺跡出土中世遺物の検討」『博労町遺跡』財団法人米子市教育文化事業団

第６章　理化学的分析

観音寺狼谷山遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の^{14}C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、観音寺狼谷山遺跡で出土した遺構の年代を検討する目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc.，の協力を得た。

２．試料と方法

測定試料は、中世土器溜の遺物№652（試料１）、中世土坑３の遺物№769（試料２）、P27の遺物№808（試料３）、21号墳主体部内の遺物№815（試料４）、P64の遺物№882（試料５）、P41の遺物№885（試料６）、P36の遺物№891（試料７）の計７点の炭化物である。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

１）蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄

２）塩酸（HCl）により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム（NaOH）により二次的に混入した有機酸を除去

３）再び塩酸（HCl）で洗浄後、アルカリによって中和

４）定温乾燥機内で80℃で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、ｎ-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデム加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表１にまとめた。

超音波洗浄、酸－アルカリ－酸洗浄（AAA処理）で調製後、加速器質量分析計を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。試料の詳細、調製データを表１に示す。

表１　測定試料及び処理

試料名	遺物№	出土地点	種類	前処理・調整	測定法
№１	№652	中世土器溜	炭化物	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
№２	№769	中世土坑３	炭化物	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
№３	№808	P27	炭化物	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
№４	№815	21号墳主体部内	炭化物	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
№５	№882	P64	炭化物	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
№６	№885	P41	炭化物	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
№７	№891	P36	炭化物	超音波洗浄、酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

3．結果

年代測定結果を表２に示す。

表２　測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	未補正^{14}C 年代[1] (年BP)	δ^{13}C[2] (‰)	補正^{13}C 年代[3] (年BP)	暦年代（西暦）[4]
No.1	372241	640±30	−27.7	600±30	交点：cal AD 1320, AD 1350, AD 1390 1 σ：cal AD 1300～1360, cal AD 1380～1400 2 σ：cal AD 1290～1410
No.2	372242	740±30	−24.7	740±30	交点：cal AD 1270 1 σ：cal AD 1260～1280 2 σ：cal AD 1230～1230, cal AD 1240～1250, cal AD 1250～1290
No.3	372243	420±30	−22.0	470±30	交点：cal AD 1440 1 σ：cal AD 1430～1440 2 σ：cal AD 1410～1450
No.4	372244	1570±30	−26.2	1550±30	交点：cal AD 540 1 σ：cal AD 440～490, cal AD 510～520, cal AD 530～550 2 σ：cal AD 430～580
No.5	372245	490±30	−24.0	510±30	交点：cal AD 1420 1 σ：cal AD 1410～1430 2 σ：cal AD 1400～1440
No.6	372246	550±30	−25.4	540±30	交点：cal AD 1410 1 σ：cal AD 1400～1420 2 σ：cal AD 1320～1350, cal AD 1390～1430
No.7	372247	560±30	−25.7	550±30	交点：cal AD 1410 1 σ：cal AD 1330～1340, cal AD 1400～1420 2 σ：cal AD 1320～1350, cal AD 1390～1430

BP：Before Physics(Present), AD：紀元

1）未補正^{14}C 年代値

試料の^{14}C/^{12}C 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}C の半減期は国際的慣例によりLibbyの5568年を使用した（実際の半減期は5730年）。

2）δ^{13}C 測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C 比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

$$\delta^{13}\mathrm{C}\ (‰) = \frac{(^{13}\mathrm{C}/^{12}\mathrm{C})\ [\text{試料}] - (^{13}\mathrm{C}/^{12}\mathrm{C})\ [\text{標準}]}{(^{13}\mathrm{C}/^{12}\mathrm{C})\ [\text{標準}]} \times 1000$$

3）補正^{14}C 年代値

試料の炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）を測定して試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}C の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ^{13}C 値を−25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

なお、δ^{13}C 値は加速器質量分析計システムによって自動的に測定され、それにともない補正^{14}C 年代値も自動計算される。

4）暦年代 Calendar Age

^{14}C年代値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正する必要がある。具体的には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、サンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較、湖の縞状堆積物の年代測定により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。^{14}C年代の暦年較正には、Beta Analytic社オリジナルプログラムであるBETACAL09（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）と2σ（95%確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

4．所見

観音寺狼谷山遺跡より出土した炭化物について、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築年代を検討した。その結果、中世土器溜の遺物№652（試料1）は600±30 年BP（2σの暦年代でAD 1290～1410年）、中世土坑3の遺物№769（試料2）は740±30 年BP（2σの暦年代でAD 1230～1230年、AD 1240～1250年、AD 1250～1290年）、P27の遺物№808（試料3）は470±30 年BP（2σの暦年代でAD 1410～1450年）、21号墳主体部内の遺物№815（試料4）は1550±30 年BP（2σの暦年代でAD 430～580年）、P64の遺物№882（試料5）は510±30 年BP（2σの暦年代でAD 1400～1440年）、P41の遺物№885（試料6）は540±30 年BP（2σの暦年代でAD 1320～1350年、AD 1390～1430年）、P36の遺物№891（試料7）は550±30 年BP（2σの暦年代でAD 1320～1350年、AD 1390～1430年）の年代値が得られた。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995)Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2),425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

Heaton TJ, Blackwell PG, Buck CE.(2009) A Bayesian approach to the estimation of radiocarbon calibration curves: the IntCal09 methodology. Radiocarbon, 51(4), 1151-1164.

中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代, 3-20.

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

Reimer PJ, Baillie MGL, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Burr GS, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Hajdas I, Heaton TJ, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, McCormac FG, Manning SW, Reimer RW, Richards DA, Southon JR, Talamo S, Turney CSM, van der Plicht J, Weyhenmeyer CE. (2009) IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon 51(4):1111–50.

Stuiver M, Braziunas TF.(1993)IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon, 35(1),137-189.

第７章　特　　論

第１節　観音寺狼谷山遺跡の中世山城について

観音寺狼谷山遺跡では、郭状平場や柱穴が発見され中世城跡の遺構であることが判明した。本遺跡の尾根続きの山陵には戸上山城跡が所在するため、発掘された遺構は戸上山城跡の一部と考えられるものである。本節では数少ない中世城郭の発掘事例として観音寺狼谷山遺跡の城郭遺構について検討する。

１　西伯耆の中世城跡

西伯耆の中世城館跡は、鳥取県の教育委員会の『鳥取県中世城館分布調査報告書』第２集（鳥取県教委2004）によると県下では504箇所、現米子市域では掲載漏れの城跡が多いが19箇所と報告されている。西伯耆の中世から近世初頭の文献資料は非常に少なく、この頃の城や動向を知ることは難しい状況であり、城の年代や城主などは伯耆民談記や伯耆志、中村記、藩翰譜、出雲私史など、後世に書かれた戦記物や地誌など二次的な史料を根拠に語られるものが多く詳細は定かではない。また、西伯耆の北部では尾高城跡や手間要害跡のように発掘調査された城郭例はわずかであり、城郭の内部構造や遺物などの様相が解るものは少ない。今のところ西伯耆の中世城館跡の大半は戦国期に築城整備されたものが多いと考えられている。

（１）戸上山城跡周辺の城跡概要

戸上山城跡との比較のため、周辺の主な城郭について概観する。

小波城跡　米子市小波に所在する南北朝期の城跡と伝えられている。一部が発掘調査されており、掘立柱建物跡、堀切、土塁や土師器・磁器類が検出され12～13世紀の時期であると確認されている。「群書類従　異本伯耆之巻」には元弘３（1333）佐々木清高が名和長年に敗れ小波城に退くとの記述が見え、また、伯耆誌の小浪村の項に「城址　三輪山の西に在りて字を大名屋敷と呼ぶ元弘の頃大石橋五左座衛門の居城なりしと云ふ　以下略」とある。

尾高城跡　（図１－５　尾高城跡実測図）米子市尾高に所在する西伯耆を代表する中世城館跡である。台地端に８つの郭を連ねた連郭式の城で、各郭は堀切・切岸と土塁で囲われている。一部が発掘調査され13世紀から16世紀の掘立柱建物跡や堀切・土塁・井戸などの遺構や陶磁器類が検出されている。「伯耆民談記」「伯耆誌」などには詳細に城の歴史が記載されている。城主は国人層の行松正盛、尼子氏の吉田光倫、毛利氏の杉原盛重などの名が見え、最後に中村氏が一時在城した後、慶長６（1601）に米子城へ移り、尾高城は廃城となったと伝えている。吉川元春書状（山田家文書）や毛利元就書状写し（閥閲録）など一次史料に尾高の名が見られ、河岡城とともに戦国期の西伯耆の要の城であった。

河岡城跡　尾高城とともに戦国期の西伯耆の尼子氏と毛利氏の覇権争いの拠点的城郭であるが城郭遺構は不明である。毛利元就・吉川元春・小早川隆景連署状（小寺家文書）毛利元就書状写し（閥閲録）などの一次史料に河岡の名が見られる。城主は伯耆の国人層の河岡氏、片山平左衛門のほか毛利の小寺元武、末近宗久、境経俊、山田氏満重などが在番したとされる。

岸本要害　（図１－２　岸本要害略測図）伯耆町岸本に所在する城跡で、台地端に堀切・切岸と土塁で囲われた２つの郭からなる。また郭間は土橋でつながれている。城主は別所氏と伝えるが城の時期等は不明。伯耆誌の岸本村の項に「城址　村の東五丁許り梢高き地にて其上は平原なり何人の古跡なるにや」との記録がある。

米子城跡　「出雲私史」に文明２年（1470）、尼子清定が伯耆に進入し山名側と戦い「名和、羽衣石、南條、小鴨等むかい戦いて敗れ、退いて米子城を保つ」とあり、この頃には米子城の存在が知られる。この中世「米子城」は、飯山にあり飯山砦であったと言われている。近世米子城の築城により中世の城の郭等の痕跡は今の所は見られないが、内膳丸山下の久米第１遺跡の発掘調査で中世末の遺構・遺物が検出されており、中世「米子城」は湊山や丸山にも築かれていたと推察される。

橋本七尾城跡　米子市橋本に所在する標高108ｍの宝石山山頂と尾根筋に郭を連ねた連郭式の山城である。「伯耆誌」の橋本村の項に「城址　上に云ふ宝石山なり行吉行松源太兵衛と云ふ武士の居城七尾城と云ふ　北方に井あり石垣の形あり一山五輪塔多し又彼の行松氏の霊なりとて八幡の社あり按するに尾高城に在りし行松氏の族なるべし」との記載があり城主が行松氏と伝えるが、時期は不明である。

石井要害（図１－１）米子市石井に所在する城跡で、楕円形の標高29ｍの独立丘稜を堀で囲い、３段に加工した丘稜に郭を配する。橋本七尾城の館とも言われる。伯耆誌の橋本村の項に「要害　村の東北田中の山なり八幡の小祠あり片山小四郎といふ人の城なりと云へり伝詳かならず」とあり、城主は伯耆国人層の片山氏、毛利市の古曳氏と伝える、時期は不明である。

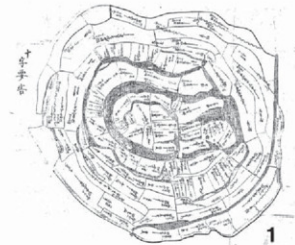
新山（安田）要害跡（安田要害山城跡縄張図）米子市新山と安来市安田の出雲・伯耆国境に築かれた長台寺城と呼ばれる山城である。標高281ｍの山頂から東西と北尾根筋に郭が連なる。主郭部は15の平場が段状に連なる郭となっている。また、陶磁器などの遺物がかなり拾われており、16世紀の戦国時代後半に属するとされている（1992 安田要害山城跡調査団）。「伯耆誌」の新山村の項には「城跡　要害と呼ぶ山上出雲の境にて上がること十二なり丁許す其所に小祠あり出雲人の祀るところなり尼子勝久山中鹿之助藤永禄元亀中これに拠りて毛利方と戦ひし事陰徳太平記等の書に見えたり今焦米出ることありと云へり自国の事にあらざればこれを略す」との記載がみえる。小早川隆景書状（山田家文書）などの一次史料には永禄六年、尼子・毛利氏の覇権争いの中で河岡城の片山平左衛門らがこの城を攻撃した記録が見られる。城主は福山肥後守と伝える。

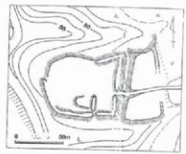
手間要害跡　（図１－３手間要害跡縄張図）　南部町手間の標高329ｍの山頂から尾根に築かれた城で、山頂の主郭は11の郭を連ねる。主郭の南北に連なる尾根上にも竪堀や多数の郭群が配置された大規模な山城である。主郭の一部が発掘調査され、掘立柱建物跡、土坑、柵列や陶磁器類が検出され、15～16世紀の時期の城とされている。吉川元春書状（山田家文書）、毛利元就書状（山田家文書）などの一次史料に「天満固屋」の名が見え、尾高城の杉原盛重が城攻めを行っている。城主は日野孫左衛門と伝える。戦国期の代表的な山城のひとつである。

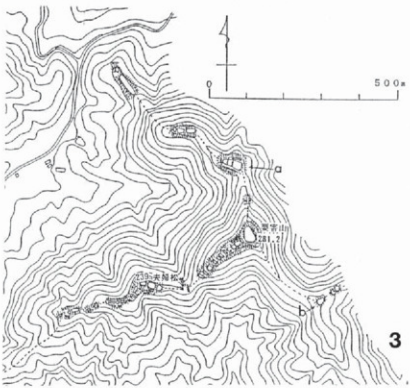
２　戸上山城跡について

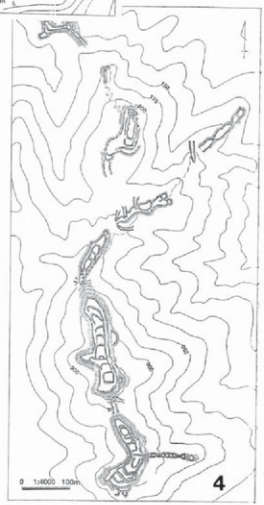
（１）位置と地形

戸上山城跡は米子平野の西側に位置し、東宗像山塊の北へ派生する標高63ｍを最高点とする尾根筋上にある。尾根は細尾根で北へ向かって、ゆっくりと下る。南へは標高34ｍ地点まで下り、ふたたび観音寺狼谷山遺跡のある尾根に向かって登っている。尾根の東側は急峻な斜面となり、米川の開削時の土取りや石採りで削られ、その後の崩落もあり急な崖となっている。また東側山裾の直下には法勝寺川が流れ、西側山裾には細長い谷が入り込み水田となっている。尾根頂部の一部は国道９号線米子バイパスが貫通し切断されている。観音寺狼谷山遺跡がある尾根は戸上山城へ向かう尾根と長砂へ向かう尾根の東西二つに分かれている。









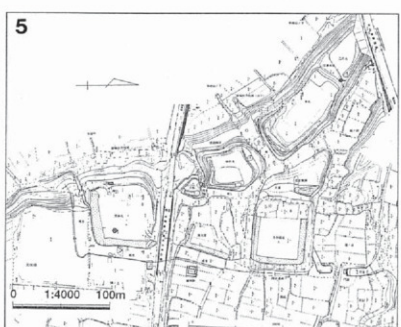


図1　戸上山城跡周辺の城跡

戸上山山頂からの眺望は、北は日本海、東は箕蚊屋平野、南は日野方面を一望でき、山頂からは尾高城、河岡城、岸本城などの城跡を遠望することが出来る。

（2）城の歴史

文献上の戸上山城の記録は、「伯耆誌」の観音寺村の項に「城址　村の東南戸上山と呼ぶ上る事二丁許山上に壹反許の平地ありしか年々石を切取るか故に今其形を失ふ　往々古剣の類を出す事ありといふ　天文の頃迄久代氏在城せしといへり　天正中吉川氏当郡領主の時古曳長門守在城せしか後米子に転す」とあり、また古城図（図１－６）がある。古曳氏は「陰徳太平記」に「古曳氏は赤松氏に従い播州より当国へ来りこの地に住む数代後長門守吉種その女を以って進氏に妻す、当時吉川の将として観音寺村戸上城に在番す・・云々」とある。久代氏は室町中期の国人層で、古曳長門守は毛利氏の家臣である。城の詳細については、ほとんど知られていない。城下町は四日市と伝承されており、米子城築城時に米子へ移されて、現在の四日市町と伝える。城跡東の観音寺集落内に、室町中期の十一面観音坐像を祀る「慈眼庵」があり、元は観音寺という寺院であったが杉原盛重が尾高へ移したと伝えられている。

（3）縄張り（図２　戸上山城郭縄張図）

観音寺狼谷山遺跡以外は踏査による表面観察であることを前提に、戸上山城跡と考えられる区域の縄張りを見てみる。城跡の郭跡とみられる平場は、従来から戸上山城跡と言われていた北に延びる尾根上と、観音寺狼谷山遺跡の尾根上と、その間を繋ぐ尾根上、観音寺狼谷山遺跡から西へ延びる尾根の４か所に観察される。

従来の戸上山城では尾根東側の崩落がひどいが、尾根上に堀切らしき凹地が４か所と平場が６か所観察され、単純な連郭式の縄張りとみられる。戸上山城跡と観音寺狼谷山遺跡を繋ぐ尾根上には、堀切らしき凹地が１か所と平場が９か所観察される。観音寺狼谷山遺跡の尾根には堀切は無く、やや広い平場１か所と、狭く小さい平場27か所が観察される。また、観音寺狼谷山遺跡から西へ延びる尾根では平場が４か所観察される。

この状況から、戸上山城は法勝川沿いの山稜上に、北、南、東を見張る様に郭を連ねた山城であったと考えられる。

３　小結

（1）観音寺狼谷山遺跡の城郭遺構

発掘調査で発見された城郭遺構は、尾根上に段状の小さい平場を連ねたものである。また平場には柱穴が確認され、建物や柵、土留杭等の構造物が構築されていたと考えられる。土塁や横堀、縦堀は検出されていない。

郭状平場　平場は岩質の多い山地の尾根頂部や斜面を段状に加工した狭く小さいものが多く、主要な平場を守るように段差をつけて造られている。

掘立柱建物跡　掘立柱建物跡は北尾根の鞍部の東側のやや平坦な場所に建てられている１間×２間の小規模なもので、建物と言うよりは小屋掛け的なものと考えられる。時期は不明だが隣接して13～14世紀の土器溜りが発見されているので、その時期と考えられるものである。

土器溜り・土坑　土器溜りは、掘立柱建物跡の東脇に位置しており、この建物から廃棄された土師皿が集積した土坑と考えられた。また中世土坑１は平場12の下部に位置し土師皿が検出されているので、土坑１と同様な廃棄土坑と考えられる。土師皿の時期は13～14世紀のものと考えられる。

図２　戸上山城縄張り略図

柱穴跡　平場14で検出された柱穴列は、段差直下の位置であるため柵の意味がなくなるため、平場の構築に関係する土留杭等の構造物と考えられる。
以上のような遺構からは、戦時の見張所的な郭の性格が推察される。

（2）発掘調査に見る城の時期

中世の遺物として、叩き目痕片、焼締陶器片、青磁片、土師皿、鉛弾、つぶて石などが検出されている。確実に遺構に伴うものは土師皿のみで、他は表土下から点々と検出されている。叩き目痕片、焼締陶器片、青磁片は、13～14世紀の時期と考えられるものである。また、中世山城としては古くなるため、城郭とは別の遺構であった可能性も考慮される。遺物の存在は、城郭内に居住していた証であるが、全体的に遺物が少ないことから、一時的であったことを物語っている。

（3）総括

今回発掘された遺構は中世城郭の戸上山城の一部であると考えられることから、これまでの戸上山城の範囲が、戸上山～観音寺狼谷山の尾根上にまで広がっているとことが判明した。また、観音寺狼谷山の尾根から西へ続いている東宗像の尾根上にも、郭状平坦面が若干観察されることから、さらに西に広がる可能性も考えられる。

また観音寺狼谷山の郭のある最高地点は、東宗像から観音寺にかけての尾根の中で79ｍと最も高い。そしての既存の戸上山城跡の最高点63ｍよりも高く、南西側の眺望もよく戸上山山頂からは見えない手間要害や新山要害や法勝寺平野を望むことができる。このことから戸上山城の南を防御するとともに、南方面を見張る郭群であったと考えられる。戸上山城は、前述した周辺の城跡と比較しても単純な連郭式で郭の規模も小さく、文献にもほとんど城の名は見えない。以上のことから戸上山城は中世～戦国期の戦時に、箕蚊屋平野を見張ること、法勝寺川の水運を抑えること、法勝平野の動向を見張ることなどの役目を持っ山城であったと推察される。

参考・引用文献

「鳥取県中世城館分布調査報告書」第２集　2004 鳥取県教育委員会

「小波城跡」 1997　淀江町教育委員会

「尾高城址Ⅰ」 1975　米子市教育委員会

「尾高城址Ⅱ」 1979　米子市教育委員会

「手間要害発掘調査報告書Ⅰ」 1994　会見町教育委員会

「鳥取県史ブックレット４」 2010　鳥取県

「新修米子市史第１巻」2003 米子市

「新修米子市史第２巻」2004 米子市

「新修米子市史第12巻」1997 米子市

「新修米子市史第12巻」1997 米子市

「久米第１遺跡」1989　米子市教育委員会

淀江町誌　1985 淀江町

「郷土の史跡めぐり」西伯耆編　1980　鳥取県立米子図書館

「松江考古」第８号　1992　松江考古学談話会

伯耆誌・伯耆古城図・伯耆民諺記・伯路紀草稿・伯耆民諺記・出雲私史

※城郭縄張図等は参考・引用文献に掲載された図を引用した。

第２節　観音寺狼谷山遺跡出土馬具について

島根県古代文化センター
主任研究員　松尾充晶

（１）馬具の出土状況と構成

石室内から出土した馬具は、ｆ字形鏡板付轡１個体分（Ｆ２、Ｆ３）、辻金具３点（Ｆ４、Ｆ５、Ｆ６）、鉸具１点（Ｆ７）、責金具１点（Ｆ８）である。これらは東宗像21号墳石室内の奥壁寄り地点にまとまった状態で出土した。石室自体は盗掘等の改変が加わった可能性が高いが、出土した馬具については石室床面に直接接している状態で、埋葬時の副葬状況を基本的に保っているものと判断される。

出土状況と品目、点数からみて、これらの馬具（Ｆ２～８）は１組の面繋セットを構成するものとみて矛盾なく、副葬時にはそれぞれが繋がったまま、使用可能な状態でまとめ置かれたものと考えられる。轡は左右の鏡板が正立し、吊り金具が立った状態で銹化固結している。これは副葬時の姿勢を反映すると見て良く、丁寧に置かれていたことがうかがえる。

この轡と組み合う杏葉ほか、胸繋、尻繋の装具、また鞍や鐙に関わる金属製品は出土していない。後事的に失われた可能性は否定しきれないが、面繋のみの副葬とみるべきだろう。

（２）ｆ字形鏡板付轡

１．轡の構造と残存状態

１個体分が欠くところなく残存している。出土時には実測図に示したように銜の部分で破断しており、右側鏡板（Ｆ２）と左側鏡板（Ｆ３）に分かれて出土したが、両者は接合する。またＦ２の吊り金具上半とＦ３の引手壺は折損した状態で出土し、その後現況のように接合している。

轡の基本的構造は、銜が二連で、銜先環に通した別造りの連結軸を鏡板の表側で鋲留めし固定する。銜先環には鏡板の外側で遊環を通し、これに引手先環が連結されている。遊環を介した、いわゆる外側連結の構造である。引手は棒状で、引手壺は円環をくの字形に折り曲げたもの。兵庫鎖や別造りの引手壺は用いられていない。

２．ｆ字形鏡板

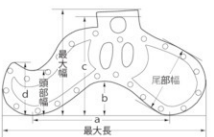
厚く付着した土砂と鉄サビに覆われており肉眼では観察が困難であるが、X線透過写真、CT画像を参照しながら以下叙述する。

素材　鉄地板に縁金を乗せ、疎らな間隔で鋲留めする。表面は金銅板あるいは銀板が被せられている。本報告書作成は保存処理と併行して実施しており、今後、所見を変更する可能性があるが、処理前の外観観察では鍍金の痕跡および銅に由来するサビが認められないことから、被せられているのは銀板、すなわち鉄地銀装の鏡板である可能性が高い。地板と縁金それぞれに別の銀板を被せる別被せか、縁金の段に板を沿わせる一体被せかについては断定できないが、CT画像を観察する限りでは一体被せの可能性がある。

平面形　全体的に小振りで幅が細く、頭部の屈曲が弱い点で古相のｆ字形鏡板の特徴を示す。法量およびプロポーションを数値化した田中由里氏の指標に依拠すれば、次表のように示すことができる。

表１　ｆ字形鏡板の法量およびプロポーション

計測項目（単位：㎜）	右側鏡板（Ｆ２）	左側鏡板（Ｆ３）
最大長	163	161
最大幅	84／80	83
頸部幅	33	35
尾部幅	53	52
a	112	111
b	24	27
c	73	77
d	42	42
プロポーション		
屈曲度　(b/a×100)	21.4	24.3
抉　り　(b/c×100)	32.8	35.0
頸部上昇度 (d/c×100)	57.5	55.8



鋲　鏡板の縁板に打たれた鉄鋲は間隔が疎ら（鋲芯間隔15～20㎜）で、鋲の数はＦ２が23個、Ｆ３が22個である（衝の連結軸に打たれた物を含む）。鋲頭は径４㎜前後と小振りで、縁金・地板と同様に鉄地銀被せの可能性が高い。

立聞／吊り金具　立聞孔は形状が円形に近い。ここに吊り金具先端の鈎部が懸かった状態で錆着している。吊り金具本体は長方形で、幅20㎜、長さ６㎝ほど（鈎部含まず）。均等に２箇所ずつ３段、計６箇所打たれた鋲は鋲身が金具裏面に抜け、帯をかしめ留めている。金具本体は、鉄地銀被せの可能性が高い。

衝／引手　ともに一条で、断面円形、断面径約６㎜の捩りの無い鉄棒を素材とし、両端に環部を作る。環部は鉄棒の先端を曲げて成形されており、曲げた端部は環基部に鍛接されることなく隙間を残す。引手壺の環部は直角～わずかにくの字に折り曲げられる。

（３）辻金具・鉸具・責金具

１．辻金具

形状　ほぼ同形で同大のものが３点ある（Ｆ４、Ｆ５、Ｆ６）。鉄製板状四脚辻金具である。薄く平滑な鉄板を切り抜いただけのもので、責金具を伴わない。脚の方向（固定されるべき槽の方向）は十字形に直交しており、意図的なX字形の偏りは認められない。

脚　残存する脚は全て、ややいびつな円形脚で、方形脚はない。脚中央には鋲が１つずつ打たれ、多くは金具裏面に鋲身が突出した状態で残存する。鋲は鏡板に使用されているものと同巧で、鋲頭は銀被せと推定される。

交差部の鋲　脚交差部に特段の構造はなく、脚のものと同様の鋲が打たれるのみである。鋲はＦ４とＦ６が中央に１箇所、Ｆ５は４箇所打たれている。

法量　脚先端同士の差し渡し長さはＦ４が53㎜、Ｆ６が48㎜でやや差異がある。このように法量にばらつきがあり、かつ平面形も重なるところがないため、３点は（型などなく）それぞれ個別に鉄板から切り出されたとみられる。

脚の幅もやはり17～20㎜と多少ばらつきが認められるが、18㎜のものが多い。この脚の幅は、辻金具が装着された（面繋と想定される）帯の幅と近い数値とみることができる。

付着物　辻金具の表面には有機物の付着が認められる。F４の一部には平織の粗い布が、F５には表全面にやや細かい布が付着している。またF６の茶褐色～黒色を呈する付着物は漆皮膜とみられる。

表面に付着した有機物は面繋などの帯に由来する可能性もあるが、本来の装着状況とは無関係の位置関係に付着している。副葬時、別の布などで包まれていた可能性もある。

２．鈹具

形状　鉄製の鈹具が１点（F７）出土している。刺金はT字形ではなく棒状で、一連に作られた縁金の基部に端部を巻き付けたもの。縁金の幅29㎜、長さ42㎜、刺金の全長48㎜と小振りの鈹具である。縁金基部の、もっとも幅が狭くなる部分の内法は17㎜で、これが鈹具を装着した帯の幅と対応するものと考えられる。

用途　鈹具の基本的機能は帯の長さ調整であり、装身具（帯金具）や武具（矢盛具）などにも使用されるが、本例の場合は状況からみて馬具に伴うものとみて良い。馬具としての鈹具の使用部位は、鐙を吊り下げる鐙靼（みずお）の先端、あるいは尻繋を装着するため鞍後輪の居木先に付ける鞍、障泥の吊り金具、などが代表的である。これらは２点を１組として用いるものであるが、本例は１点のみの出土であることと、加えて小振りで華奢な造りであることなどから、用途はそのいずれにも当てはまらないと考えられる。

装着された帯の幅が17㎜程度と想定され、これが辻金具の脚の大きさから想定された帯幅とほぼ同値であることから、辻金具と共に面繋に使用された鈹具の可能性が最も高い。辻金具表面と同様の布が付着している点もこのことを示唆している。

３．責金具

形状　責金具が１点だけ出土している（F８）。幅約４㎜の細い金具で、鉄地に銀被せと推定される。X線写真では１方向の刻み目が入れられているようにも見えるが、明確ではない。この金具によって挟み込まれていた帯にあたる空隙部分は幅23㎜、厚さ９㎜。辻金具や鈹具から想定される帯幅（18㎜程度）よりもやや広い。

この責金具によってごく薄い鉄板がかしめられており、そこに鋲が２つ打たれている。鋲は鏡板、辻金具と同巧のものとみられる。

用途　辻金具から離脱した形跡はなく、１点のみの出土であることから無脚雲珠に用いられるような用途を想定しにくい。金具が挟んでいる帯に比較的厚みがあることに注目すれば、折り返した帯２条分を挟んで留めるような、帯端部の処理に使用された可能性が考えられる（帯の交差部がずれないように装着される雲珠・辻金具では、責金具がかしめるのは帯１条分の厚さ）。具体的な装着位置についてこれ以上の手がかりはないが、鈹具（F７）と責金具がともに１点だけであることを重視すれば、鈹具で帯を折り返し、折り返した端部を固定するために用いられたものとみることもできる。

（４）馬装の復元

個別資料の特徴と構成から、馬具（F２～８）はすべて面繋に使用されたものと考えて矛盾ない。鉄地銀装のｆ字形鏡板付轡と、辻金具３点、鈹具１点（責金具含む）からなる組み合わせである。辻金具３点から構成される面繋の事例は比較的多く、埴輪馬の表現から第１図-aのような面繋構造に復

元しうる。単条で辻金具のうち１点が額革中央に配置される構造である。鋲具の用途については、ここでは類例からＴ字形に帯が交差する箇所に配置して復元的に示した。

上記とは別に、帯の交点には必ず辻金具を配し、辻金具の全ての脚から帯が伸びる（帯が止まる脚はない）と仮定すると、複条構造の面繋として以下の２通りが考えられる。

第１図-bは、辻金具が本来は４点あったが１点が失われたと想定する復元。第１図-cは、鋲具の縁金を利用して帯の交差部が構築されていたと想定する復元である。３案とも可能性があるが、断定する根拠を欠くため、案として併記しておく。

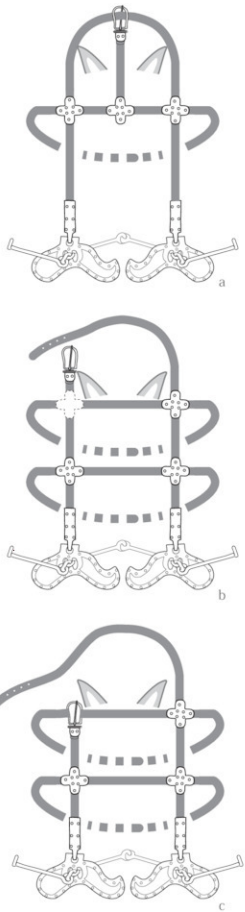
（５）馬具の年代と性格

ｆ字形鏡板付轡の位置づけ　ｆ字形鏡板付轡は５世紀後葉から６世紀後葉にかけて使用される。初期には朝鮮半島で製作されたものが輸入されるが、６世紀前葉以降は国産化し、規格的、定型的な生産がなされ資料数が増加する。こうした馬具の生産活動は王権中枢で集約的におこなわれ、製品は列島内の首長層を中心に配与される。同時に甲冑が副葬される事例が多く、王権による地方での軍事組織の編成に関わる被葬者像が説かれることが多い。

ｆ字形鏡板付轡が用いられる期間は比較的長く、編年的研究によって鏡板が小さいものから幅広で大型なものへ、ｆ字の屈曲が激しいものから緩やかなものへ、鋲が疎らなものから密なものへ、引手を外側で連結するものから内側へ連結するものへ、といった変化の過程が明らかになっている。

ここで本遺跡例を位置づけると、全長が16㎝と小さく、鋲の間隔や数などの特徴から、ｆ字型鏡板付轡の国産量産化以前のものと位置づけられる。法量やプロポーションの要素は、熊本県塚坊主古墳、埼玉県稲荷山古墳などの例が近い。

辻金具の位置づけ　鉄板を十字形に裁断し、すべてを一体に成形する板状辻金具はTK208～TK10型式併行期に用いられる。類例が少ないが、本例のように小型で、同



第１図　面繋構造の復元案

様の鋲の配置をとるものはTK23～TK47型式併行期にみられるようである。

馬具の年代　以上の轡と辻金具の編年上の位置づけから、本例は最古段階ではないが古相のｆ字形鏡板付轡を用いた面繋と評価され、その年代はTK23～TK47型式併行期を中心とした時期で、５世紀末～６世紀初頭のものと考えられる。

【主要参考文献】

宮代栄一「５・６世紀における馬具の「セット」について」『九州考古学』第68号、九州考古学会、1993年

宮代栄一「古墳時代の面繋構造の復元－X字脚辻金具はどこにつけられたか－」『HOMINIDS』Vol.001、CRA、1997年

田中由里「ｆ字形鏡板付轡の規格性とその背景」『考古学研究』第51巻第2号（通巻202号）、考古学研究会、2004年

第５表　遺物観察表１（土器）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量(cm) 口径	残存高	胴径	底径	焼成	色調	胎土	調整	備考
1	第10図	甕	土師器	SS01	＊24.0	17.9	＊23.2		良好	橙褐色	密　1～2㎜大砂粒含	外面:ハケ目、指頭圧痕 内面:ケズリ後ナデ	
2	第10図	甕	土師器	SS01	＊16.6	3.4			良好	淡灰褐色	密　1㎜大砂粒含	外面:ナデ、ハケ目、指頭圧痕 内面:ナデ、ケズリ	
3	第10図	甕	土師器	SS01	＊21.6	12.2			良好	灰褐色	密　1～3㎜大砂粒含	外面:ナデ 内面:ケズリ	
4	第10図	鉢	土師器	SS01	＊25.5	9.7			良好	橙褐色	密　1～3㎜大砂粒含	外面:ナデ、ハケ目、指頭圧痕 内面:ケズリ後ナデ	
5	第10図	甕	土師器	SS01	＊22.5	4.1			良好	褐色	密　1㎜大砂粒含	外面:ナデ、ハケ目 内面:ケズリ後ナデ	
6	第10図	坏	土師器	SS01	＊12.5	3.5＊		＊7.4	良好	橙褐色	密	内外面共ナデ	赤彩
7	第10図	坏	須恵器	SS01	10.6	3.8＊			良好	灰褐色	密	外面:ナデ、ケズリ 内面:ナデ	煤　転用土器
8	第12図	壺	須恵器	SS02	＊30.2	7.4			良	暗灰色	密　白砂粒含	内外面共ナデ	2条平行沈線、櫛描波状文
9	第15図	甕	土師器	SD01	＊15.7	3.8			良好	褐色	密　1㎜以下砂粒含	外面:ナデ 内面:ナデ、ケズリ	
10	第15図	甕	土師器	SD02	＊14.9	3.9			良好	橙褐色	密　1㎜以下砂粒含	外面:ナデ 内面:ナデ、ケズリ	煤
11	第15図	甕	土師器	SD03	＊17.5	4.9			良好	灰褐色	密　1㎜以下砂粒含	外面:ナデ 内面:ナデ、ケズリ	煤
12	第16図	深鉢	縄文土器	G-3	＊35.4	3.9			良好	暗褐色	密　雲母・石英・角閃石含	外面:工具調整後ナデ 内面:ケズリ後ナデ 口縁端部:ナデ	
13	第16図	深鉢	縄文土器	G-4		4.2			良	褐色	密　白色粒、最大3㎜の石英含	内外面:工具によるナデ 外面:ヘラ描紋 口縁端部:竹管紋	
14	第16図	甕	縄文土器	H-4	＊18.2	4.6			良好	外面:橙褐色 内面:褐色	密　白色粒・石英含	外面:工具によるナデ後指押え 内面:ケズリ後指押え	貼付突帯
15	第16図	壺	弥生土器	K-4	＊26.5	10.1			良	褐色	密　白色粒含	内外:面共ハケ目 口縁部:ナデ、指押え	
16	第16図	壺	弥生土器	K-4	＊21.3	12.3			良好	橙褐色	密　1㎜大砂粒含	外面:ハケ目 内面:ナデ、ケズリ	口縁端部鋸歯文、口縁部6条刻目突帯文、頸部櫛描沈線文・鋸歯文
17	第16図	壺	弥生土器	K-4	＊28.9	27.7	＊33.0		良	褐色	密　白色粒含	外面:ハケ目 内面:ハケ目、ナデ、指押え	頸部5条凹線文 肩部5条・3条櫛描沈線文、刺突文
18	第16図	甕	弥生土器	I-3		12.2			良	外面:褐色 内面:橙褐色	密　白色粒・石英・雲母含	外面:ハケ目 内面:ハケ目、指押え	肩部5条凹線文
19	第16図	甕	弥生土器	J-3	＊15.3	1.4			良	褐色	密　白色粒・石英含	内外面共調整不明	口縁部2条凹線文
20	第16図	甕	弥生土器	J-3	＊14.6	1.3			良	褐色	密　白色粒・石英含	内外面共磨き	口縁部3条以上凹線文
21	第16図	甕	弥生土器	J-4	＊14.6	1.5			良	褐色	密　白色粒含	内外面共磨き	口縁部4条凹線文
22	第16図	甕	弥生土器	K-4	＊12.3	1.4			良	褐色	密　白色粒・石英含	内外面共磨き	口縁部4条凹線文・黒斑
23	第16図	甕	弥生土器	K-4	＊15.2	1.6			良	褐色	密　白色粒・石英含	内外面共磨き	口縁部4条凹線文
24	第16図	甕	弥生土器	K-4	＊13.5	2.0			良	褐色	密　微白色粒含	外面:磨き 内面:磨き、ケズリ	口縁部3条凹線文・黒斑・煤
25	第16図	甕	弥生土器	K-4	＊14.2	9.5	＊21.3		良	褐色	密　白色粒・石英含	外面:ハケ目、連続刺突紋 内面:ケズリ後指押え	口縁部3条凹線文・黒斑・煤
26	第16図	甕	弥生土器	F-4		3.1			良	褐色	密　白色粒・石英含	外面:ナデ後ハケ目 内面:ナデ、ケズリ	口縁部1条凹線文
27	第16図	甕	弥生土器	K-4	＊16.9	2.5			良	褐色	密　白色粒・石英含	外面:ハケ目 内面:指押え	黒斑
28	第16図	壺	弥生土器	K-3		4.2		＊6.2	良	褐色	密　白色粒・石英含	外面:ハケ目後磨き 内面:ケズリ後指押え	黒斑
29	第16図	壺	弥生土器	F-4		2.0		＊6.0	やや良	暗褐色	密　白色粒・石英含	内外面共調整不明	
30	第16図	甕	弥生土器	I-3		3.3		＊7.0	良	暗褐色	密　白色粒・石英・角閃石含	外面:調整不明 内面:ケズリ　指押え	
31	第16図	壺	須恵器	H-4	＊30.6	4.0			良	外面:黒灰色 内面:暗灰色	密	内外面共ナデ	櫛描波状文
32	第16図	壺	須恵器	J-3		8.0			良	外面:黒灰色 内面:暗灰色	密　白砂粒、石英、角閃石含	内外面共ナデ	2条平行沈線、櫛描波状文
33	第16図	はそう	須恵器	F-4		6.6	＊11.1		良好	灰褐色	密　1㎜以下の砂粒含	内外面共回転ナデ	
34	第16図	坏	須恵器	H-2	＊10.1	1.9			良	灰色	密　白砂粒含	内外面共ナデ	
35	第16図	高坏	須恵器	H-3		1.7		＊14.5	良	灰色	密　白砂粒含	内外面共ナデ	
36	第16図	坏	須恵器	F-4		2.8		＊8.6	良	暗灰色	密　白砂粒含	外面:回転ヘラケズリ後ナデ 内面:回転ナデ 底部:回転糸切り	
37	第16図	埴輪		H-2		4.7			良	黄灰色	密　砂粒含	内外面共ハケ目、ナデ	
38	第16図	埴輪		F-4		5.5			良好	外面:橙褐色 内面:灰褐色	密　砂粒含	内外面共ハケ目、ナデ 内面:指頭圧痕	
39	第16図	埴輪		K-3	＊24.2	3.3			良好	褐色	密　雲母・石英・0.5～2㎜砂粒含	内外面共ハケ目	
40	第17図	甕	土師器	I-3	＊25.6	14.2			良好	橙褐色	密　砂粒・石英・雲母含	外面:ハケ目、ナデ、指頭圧痕 内面:ケズリ後ナデ、指頭圧痕	
41	第17図	甕	土師器	I-3	＊23.0	8.4			良好	外面:黒茶色 内面:橙褐色	密　石英・0.5～3㎜白色粒含	外面:ナデ、ハケ目 内面:ケズリ	煤
42	第17図	甕	土師器	I-3	＊25.6	6.9			良好	暗褐色	密　雲母・石英含	外面:ナデ、ハケ目 内面:ケズリ	
43	第17図	甕	土師器	I-3	＊27.8	4.9			良好	暗褐色	密	外面:ナデ 内面:ナデ、ケズリ	
44	第17図	甕	土師器	I-3	＊27.6	6.0			良好	灰褐色	密　雲母・石英・砂粒含	外面:ナデ 内面:ナデ、ケズリ	
45	第17図	甕	土師器	I-3	＊15.4	3.6			良好	外面:黒茶色 内面:暗褐色	密　雲母・石英・0.5～4㎜砂粒含	外面:ナデ、ハケ目 内面:ケズリ	
46	第17図	甕	土師器	K-3	＊15.4	2.2			良好	外面:黒茶色 内面:褐色	密　雲母・石英含	外面:ナデ 内面:ナデ、ケズリ	
47	第17図	甕	土師器	J-3	＊24.6	9.9	＊22.2		良好	暗褐色	密　雲母・石英・0.5～3㎜砂粒含	外面:ナデ、ハケ目 内面:ナデ、ケズリ	
48	第17図	壺	土師器	H-4	＊17.6				良好	褐色	密	内外面共ナデ	
49	第17図	甕	土師器	J-3	＊23.4	3.2			良好	外面:黒茶色 内面:褐色	密	内外面共ナデ	
50	第17図	甕	土師器	J-3	＊14.6	2.3			良好	黒茶色	密	外面:ナデ 内面:ナデ、ケズリ	

口径・胴径・底径の＊印は復元、残存高の＊印は器高

第6表　遺物観察表2（土器）

遺物番号	掲図番号	器種	種別	地区	法量(cm) 口径	残存高	胴径	底径	焼成	色調	胎土	調整	備考
51	第17図	甕	土師器	J-3		5.9		＊ 4.4	良好	黒茶色	密　雲母・白英・0.5～1.5mm砂粒含	外面:ハケ目, ケズリ 内面:ケズリ	煤
52	第17図	器台	土師器	F-4		1.4			良	褐色	密　白色粒, 雲母含	外面:調整不明 内面:ハケ目	
		器台	土師器	F-4		3.1		＊ 9.8				外面:ハケ目 内面:ケズリ	
53	第17図	皿	土師器	I-4	＊ 10.6	2.2			良	橙褐色	密	内外面 共回転ナデ	
54	第17図	坏	土師器	J-3		1.2		＊ 6.8	良好	褐色	密　雲母・白英・砂粒含	内外面 共ナデ	底部回転糸切り
55	第17図	坏	土師器	I-3		1.7			良好	橙褐色	密	内外面 共ナデ	
56	第17図	坏	土師器	I-3		2.8			良好	外面:橙褐色 内面:黒茶色	密	外面:調整不明 内面:ナデ	黒斑
57	第17図	坏	土師器	I-3		1.5			良好	外面:灰褐色 内面:暗褐色	密　石英・雲母含	外面:ハケ目 内面:ナデ	
58	第17図	坏	土師器	I-3		1.8		＊ 7.6	良好	灰褐色	密	内外面 共ナデ	底部回転糸切り
59	第17図	皿	土師器	E-4		1.2		＊ 6.0	良	褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:器土ナデ 底部:回転糸切り	
60	第17図	坏	土師器	I-3	＊ 11.0	3.8		＊ 6.9	良	褐色	密　白砂粒含	内外面 共回転ナデ 底部:回転糸切り	
61	第17図	坏	土師器	I-3	＊ 12.2	3.8″		＊ 6.8	良好	褐色	密　石英・白色粒含	内外面 共ナデ	底部回転糸切り
62	第17図	台付甕 台付坏	土師器	K-3		2.1		＊ 7.6	良好	橙褐色	密　雲母・石英・砂粒含	内外面 共ナデ	
63	第17図	坏	土師器	I-3		1.3		＊ 7.0	良好	褐色	密	内外面 共ナデ	
64	第17図	台付甕 台付坏	土師器	K-4		1.8		＊ 7.4	良好	橙褐色	密	内外面 共ナデ	
65	第17図	台付甕 台付坏	土師器	I-3		2.6		＊ 7.4	良好	外面:橙褐色 内面:黒色	密	内外面 共ナデ	
66	第17図	台付甕 台付坏	土師器	I-3		1.4		＊ 9.2	良好	外面:橙褐色 内面:黒色	密　雲母含	内外面 共ナデ	
67	第17図	勝利	須恵	I-3		4.4	＊ 5.8	＊ 3.5	良好	透明	密　淡灰白色	外面:施釉 内面:露胎	
68	第17図	碗	陶器	M-3	＊ 10.8	6.6			良好	暗緑色～緑灰色	密	内外面 共施釉	
69	第40図	竪穴		間東南 北	＊ 41.7	9.3			やや良	黄橙褐色	密　砂粒, 雲母含	内外面 共ハケ目, ナデ	炉面形
70	第40図	竪穴		間東北	＊ 31.0	28.3			良	淡橙褐色	密　砂粒, 雲母含	外面:ハケ目 内面:ハケ目, ナデ, 指頭圧痕	
71	第40図	竪穴		間東南北	＊ 27.2	19.0			良	橙灰褐色	密　砂粒, 雲母含	外面:ハケ目, ナデ 内面:ハケ目, ナデ, 指頭圧痕	
72	第40図	竪穴		間東南	＊ 27.4	15.7			やや不良	黄橙褐色	密　砂粒含	外面:ハケ目, ナデ 内面:ハケ目, ナデ, 指頭圧痕	
73	第40図	竪穴		間東北	＊ 27.6	14.7			やや不良	黄灰褐色	密　砂粒含	外面:ハケ目, ナデ 内面:ハケ目, ナデ, 指頭圧痕	
74	第40図	竪穴		間東北 柱穴	＊ 28.8	14.2			やや不良	黄橙色	密　砂粒含	内外面 共ハケ目, ナデ	
75	第40図	竪穴		間東北	＊ 26.0	20.4			やや不良	黄橙褐色	密　砂粒含	外面:ハケ目, ナデ 内面:ハケ目	
76	第40図	竪穴		間南北 北		13.2			良好	赤茶褐色	密　砂粒, 石英, 雲母含	外面:ハケ目, ナデ 内面:指頭ナデ	
77	第40図	竪穴		間東南		8.0			良	橙灰褐色	密　砂粒, 雲母含	外面:ハケ目, ナデ 内面:ハケ目, ナデ, 指頭圧痕	
78	第40図	竪穴		間東南北 F-20		14.4			良	黄橙褐色	密　砂粒含	外面:ハケ目, ナデ 内面:ナデ, 指頭圧痕	
79	第40図	竪穴		間東北		8.6			良	橙褐色	密　砂粒含	内外面 共ハケ目, ナデ 内面:指頭圧痕	
80	第41図	竪穴		間東		15.5			良好	褐色	密　砂粒, 雲母, 角閃石含	外面:ハケ目, ナデ 内面:ハケ目, 指頭圧痕	
81	第41図	竪穴		間東北		4.7			良好	褐色	密	外面:ハケ目, ナデ 内面:ハケ目, 指頭ナデ	
82	第41図	竪穴		間東南 F-20		23.2		＊ 18.4	良	橙褐色	密　雲母, 砂粒含	内外面 共ハケ目, ナデ 内面:指頭圧痕	
83	第41図	竪穴		21号 F体部上層		6.3			良好	灰褐色	密　砂粒, 雲母含	外面:ハケ目 内面:指頭ナデ	
84	第41図	竪穴		F-20		9.4			良好	灰褐色	密　砂粒, 石英含	外面:ハケ目, ナデ 内面:指頭ナデ	
85	第41図	竪穴		21号埴 F-20		13.3			良	黄橙褐色	密　砂粒, 雲母含	外面:ハケ目, ナデ 内面:ナデ, 指頭圧痕	
86	第41図	竪穴		F-20		14.0			良	黄橙褐色	密　砂粒含	外面:ハケ目, ナデ 内面:調整不明	
87	第41図	竪穴		F-20		9.3		＊ 22.0	良好	褐色	密　砂粒, 雲母含	外面:ハケ目, ナデ 内面:調整不明	
88	第41図	竪穴		21号 東西ベルト		9.4			良好	黄褐色	密　砂粒, 雲母含	外面:ハケ目, ナデ 内面:指頭ナデ	
89	第41図	竪穴		21号 遺構石面東		5.6			良好	橙褐色	密　砂粒, 石英含	外面:調整不明 内面:ハケ目, 指頭圧痕	
90	第41図	竪穴		F-20 -21		10.8			良	黄灰褐色	密　砂粒含	外面:ハケ目, ナデ 内面:指頭圧痕, ナデ	
91	第41図	竪穴		F-20	＊ 27.0	5.7			良	黄褐色	密　砂粒含	内外面 共ハケ目, ナデ	
92	第41図	竪穴		F-18-20		6.9			良好	橙褐色	密	外面:ハケ目, ナデ 内面:ハケ目	
93	第41図	竪穴		F-20		12.0			良	黄橙色	密　砂粒含	外面:ハケ目, ナデ 内面:調整不明	
94	第41図	竪穴		G-20	＊ 23.4	7.9			良	黄橙褐色	密　雲母, 砂粒含	内外面 共ハケ目, ナデ	
95	第41図	竪穴		G-20	＊ 24.3	9.5			良	黄橙褐色	密　雲母, 砂粒含	内外面 共ハケ目, ナデ 内面:指頭圧痕	
96	第41図	竪穴		G-20	＊ 23.0	7.0			良	黄橙褐色	密　砂粒含	内外面 共ハケ目, ナデ	
97	第41図	竪穴		G-21	＊ 27.0	4.9			良好	褐色	密	内外面 共ハケ目, ナデ	
98	第42図	竪穴		G-20	＊ 26.0	8.1			良	暗橙褐色	密　雲母, 砂粒含	内外面 共ハケ目, ナデ	
99	第42図	竪穴		G-20	＊ 23.6	5.9			良好	橙褐色	密	内外面 共ハケ目, ナデ	
100	第42図	竪穴		21号西中央	＊ 23.7	8.6			良好	橙褐色	密　砂粒, 石英, 雲母含	外面:ハケ目 内面:指頭ナデ	
101	第42図	竪穴		G-21	＊ 23.2	6.8			良	橙褐色	密　雲母, 砂粒含	内外面 共ハケ目, ナデ	
102	第42図	竪穴		G-21	＊ 22.2	6.5			良好	外面:褐色 内面:暗褐色	密	内外面 共ハケ目, ナデ 内面:指頭圧痕	

口径・胴径・底径の＊印は復元, 残存高の＊印は器高

第７表　遺物観察表３（土器）

遺物番号	掲図番号	器種	種別	地区	法量(cm) 口径	残存高	胴径	底径	焼成	色調	胎土	調整	備考
103	第42図	埴輪		G-20		9.7			良好	橙褐色	密	外面:ハケ目、ナデ 内面:ハケ目、指頭圧痕	
104	第42図	埴輪		F-20		14.9			良	橙褐色	密　雲母、砂粒含	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ、指頭圧痕、ハケ目	
105	第42図	埴輪		G-20		8.7			良好	橙褐色	密	外面:ハケ目、ナデ 内面:ハケ目、指頭圧痕	
106	第42図	埴輪		G-20		5.2			良好	黄灰色	密	外面:ハケ目 内面:ナデ	
107	第42図	埴輪		G-21		8.3			良好	褐色	密	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ	
108	第42図	埴輪		G-20		5.4			良好	褐色	密	内外面共ハケ目、ナデ	
109	第42図	埴輪		G-20		14.1			良	暗橙褐色	密　雲母、砂粒含	外面:ハケ目、ナデ 内面:指頭圧痕	
110	第42図	埴輪		G-21		8.7			良好	橙褐色	密	内外面共ハケ目	
111	第42図	埴輪		G-21		5.9			良好	黄灰色	密	外面:ハケ目、ナデ 内面:調整不明	
112	第42図	埴輪		G-21		6.6			良好	橙褐色	密	外面:調整不明 内面:ハケ目、指頭圧痕	
113	第42図	埴輪		G-20		7.2			良好	黄灰色	密	外面:ハケ目 内面:調整不明	
114	第42図	埴輪		F-19	＊32.2	8.3			良	黄橙褐色	密　砂粒含	内外面共ハケ目、ナデ	
115	第42図	埴輪		F-19	＊15.0	3.9			良好	黄橙褐色	密	内外面共ハケ目、ナデ、指頭圧痕	
116	第50図	坏	土師質土器	上器面	11.6	3.2＊		5.2	良	淡橙褐色	密　角閃石、雲母含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
117	第50図	坏	土師質土器	上器面	＊10.8	3.5＊	＊4.6		良	淡灰褐色	密　白色粒、雲母、角閃石含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
118	第50図	坏	土師質土器	上器面	＊14.0	3.3			良	灰褐色	密　白色粒、石英、雲母、角閃石含	内外面共回転ナデ	
119	第50図	坏	土師質土器	上器面	＊15.8	2.8			良	淡灰褐色	密　白色粒、石英、雲母、角閃石含	内外面共回転ナデ	
120	第50図	坏	土師質土器	上器面	＊11.8	3.0			良	灰褐色	密　白色粒、角閃石、雲母含	内外面共回転ナデ	
121	第50図	坏	土師質土器	上器面	＊14.4	2.9			良	淡灰褐色	密　白色粒、雲母、角閃石含	内外面共回転ナデ	
122	第50図	坏	土師質土器	上器面	＊11.9	2.0			良	淡灰褐色	密　白色粒、雲母含	内外面共回転ナデ	
123	第50図	坏	土師質土器	上器面	＊13.7	2.9			良	淡灰褐色	密　石英、角閃石含	内外面共回転ナデ	
124	第50図	坏	土師質土器	上器面	＊10.4	2.2			良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ	
125	第50図	坏	土師質土器	上器面	＊11.8	2.7			良	灰褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ	
126	第50図	坏	土師質土器	上器面		2.4		＊6.7	良	淡灰褐色	密　石英、雲母含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り、板目圧痕	
127	第50図	坏	土師質土器	上器面	＊11.0	3.2 ※	＊6.3		良	淡灰褐色	密　白色粒、石英、雲母、角閃石含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り、板目圧痕	
128	第50図	坏	土師質土器	上器面	11.5	3.0 ※		5.6	良	淡灰褐色	密　白色粒、石英、雲母、角閃石含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:静止糸切り	
129	第50図	坏	土師質土器	上器面	＊11.5	2.8 ※		6.6	良	淡灰褐色	密　白色粒、石英、雲母、角閃石含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り、板目圧痕	
130	第50図	坏	土師質土器	上器面	＊6.0	1.9 ※	＊5.0		良	淡灰褐色	密　白色粒、石英、雲母、角閃石含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り、板目圧痕	
131	第50図	皿	土師質土器	上器面	7.3	1.5＊		5.0	良	灰褐色	密	内外面共回転ナデ 底部:静止糸切り	
132	第50図	皿	土師質土器	上器面	＊6.8	1.5＊	＊5.2		良	灰褐色	密　石英、角閃石、雲母含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り、板目圧痕	
133	第50図	皿	土師質土器	上器面	7.1	1.5＊		4.8	良	淡灰褐色	密　白色粒、石英、雲母含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
134	第50図	皿	土師質土器	上器面	＊8.4	1.1＊	＊5.8		良	灰褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
135	第50図	皿	土師質土器	上器面	＊8.8	1.4＊	＊5.6		良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
136	第50図	皿	土師質土器	上器面	＊6.9	1.5＊		5.1	良	灰褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り、板目圧痕	
137	第50図	皿	土師質土器	上器面	＊7.4	1.2＊	＊5.3		良	灰褐色	密	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
138	第50図	皿	土師質土器	上器面	＊7.2	1.5			良	淡灰褐色	密　白色粒、石英、角閃石含	内外面共回転ナデ	
139	第50図	皿	土師質土器	上器面	＊7.9	1.3			良	灰褐色	密　白色粒、雲母、角閃石含	内外面共回転ナデ	
140	第50図	皿	土師質土器	上器面		0.5	＊4.5	やや良	淡灰褐色	密　白色粒、石英、角閃石含		内外面:回転ナデ 内面:静止ナデ	
141	第50図	皿	土師質土器	上器面		1.2	＊5.3	良	淡橙褐色	密　石英、角閃石含		外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
142	第50図	皿	土師質土器	上器面		0.5	＊5.4	良	淡灰褐色	密　白色粒、石英、雲母、角閃石含		外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り	
143	第50図	皿	土師質土器	上器面		0.6	＊5.4	良	淡灰褐色	密　白色粒、石英、雲母、角閃石含		外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り	
144	第50図	皿	土師質土器	上器面		1.2	＊6.0	良	淡灰褐色	密　白色粒、雲母含		外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り、板目圧痕	
145	第50図	皿	土師質土器	上器面		1.3	5.4	良	淡灰褐色	密		外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:静止糸切り	
146	第50図	皿	土師質土器	上器面		0.6	＊5.7	良	淡灰褐色	密		外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:静止糸切り	

口径・胴径・底径の＊印は復元、残存高の＊印は器高

第8表　遺物観察表4（土器）

遺物番号	掲図番号	器種	種別	地区	法量(cm) 口径	残存高	胴径	底径	焼成	色調	胎土	調整	備考
147	第50図	皿	土師皿土器	土器溜		0.5		＊ 4.8	良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
148	第50図	皿	土師皿土器	土器溜		0.8		＊ 5.9	良	灰褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
149	第50図	皿	土師皿土器	土器溜		0.6		＊ 4.8	良	褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
150	第50図	皿	土師皿土器	土器溜		0.9		＊ 5.2	良	褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ	
151	第50図	皿	土師皿土器	土器溜		1.1		＊ 2.8	良	灰褐色	密　白色粒、石英含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
152	第50図	皿	土師皿土器	土器溜		1.4		＊ 6.3	良	淡灰褐色	密　白色粒、石英、雲母、角閃石含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
153	第50図	皿	土師皿土器	土器溜		0.5		＊ 5.5	良	褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
154	第50図	皿	土師皿土器	土器溜		1.0		＊ 5.4	良	褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り、板目圧痕	
155	第50図	皿	土師皿土器	土器溜		0.4		4.6	良	淡褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
156	第50図	皿	土師皿土器	土器溜		1.2		＊ 4.3	良	淡橙褐色	密　白色粒、雲母含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
157	第50図	皿	土師皿土器	土器溜		0.7		＊ 4.8	良	灰褐色	密　白色粒、雲母含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
158	第50図	皿	土師皿土器	土器溜		0.7		5.1	良	淡褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
159	第50図	皿	土師皿土器	土器溜		1.2		＊ 5.1	良	灰褐色	密　白色粒、角閃石含	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り	
160	第52図	坏	土師皿土器	中世土坑	＊ 14.5	3.1			良	淡灰褐色	密　白色粒、石英含	内外面共回転ナデ	
161	第52図	皿	土師皿土器	中世土坑		1.9		＊ 6.6	良	淡灰褐色	密　白色粒、石英、雲母含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
162	第52図	皿	土師皿土器	中世土坑		1.2		4.2	やや良	外面:灰褐色 内面:淡橙色	密	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
163	第52図	皿	土師皿土器	中世土坑		1.1		5.2	良	淡灰褐色	密	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
164	第52図	皿	土師皿土器	中世土坑		0.8		5.6	良	淡灰褐色	密	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
165	第52図	皿	土師皿土器	中世土坑		0.6		＊ 5.0	良	淡褐色	密　白色粒、石英含	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り	
166	第52図	皿	土師皿土器	中世土坑		1.2		＊ 5.8	良	淡橙褐色	密　石英、雲母含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
167	第52図	皿	土師皿土器	中世土坑		0.5		＊ 4.6	良	淡橙褐色	密	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り	
168	第52図	皿	土師皿土器	中世土坑		0.5		＊ 4.8	良	淡灰褐色	密　白色粒、石英含	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り	
169	第52図	皿	土師皿土器	中世土坑		0.4		＊ 4.3	良	淡灰褐色	密	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り	
170	第56図	甕	中世土器	22号土体部	＊ 23.2	3.2			良好	茶褐色	密	内外面共ハケ	
171	第56図	甕	中世土器	D-14	＊ 2.8	2.3			良好	褐色	密	内外面共ナデ	
172	第56図	甕	中世土器	E-14		3.4			良	褐色	密　白砂粒、石英、角閃石含	外面ナデ、明瞭 内面:調整不明	
173	第56図	鍋	中世土器	D-14		4.5			良	褐色	密　白砂粒含	外面ナデ、明瞭 内面ナデ	
174	第56図	鍋	中世土器	22号竈東		5.7			良	褐色	密　白砂粒、石英含	外面ナデ、明瞭 内面ケズリ後ナデ	
175	第56図	擂鉢	瓦質土器	E-14		2.7			良	外面:明灰色 内面:褐色	密　白砂粒含	内外面共ナデ	
176	第56図	擂鉢	瓦質土器	F-15	＊ 29.2	7.2			不良	外面:明灰色 内面:淡褐色	密	内外面共ナデ	
177	第56図	擂鉢	瓦質土器	E-14	＊ 23.0	3.4			良	外面:明灰褐色 内面:淡灰褐色	密	内外面共ナデ	
178	第56図	擂鉢	瓦質土器	E-14	＊ 20.6	3.5			良	褐色	密　白砂粒含	内外面共ナデ	
179	第56図	甕	中世土器	D-14		6.7			良好	褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:叩打　　内面:ハケメ	
180	第56図	甕	中世土器	22号竈東		3.6			良好	茶褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:叩打　　内面:ハケメ	
181	第56図	甕	中世土器	D-14		4.0			良好	褐色	密	外面:叩打　　内面:ハケメ	
182	第56図	甕	中世土器	E-13		4.1			良好	褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:叩打　　内面:ハケメ	
183	第56図	甕	中世土器	E-13		3.4			良好	淡褐色	密	外面:叩打　　内面:ハケメ	
184	第56図	甕	中世土器	D-13		3.0			良好	褐色	密	外面:叩打　　内面:ハケメ	
185	第56図	甕	中世土器	D-14		2.7			良好	褐色	密	外面:叩打　　内面:ハケメ	
186	第56図	甕	中世土器	D-14		3.9			良好	褐色	密	外面:叩打　　内面:ハケメ	
187	第56図	甕	中世土器	D-14		3.5			良好	褐色	密	外面:叩打　　内面:ハケメ	
188	第56図	甕	中世土器	E-13		2.2			良好	褐色	密	外面:叩打　　内面:ハケメ	
189	第56図	甕	中世土器	E-13		2.9			良好	茶褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:叩打　　内面:ハケメ	
190	第56図	甕	中世土器	F-14		6.0			良好	褐色	密	外面:叩打　　内面:ハケメ	
191	第56図	甕	中世土器	E-13		3.2			良好	茶褐色	密	外面:叩打　　内面:ハケメ	
192	第56図	甕	中世土器	D-14		2.8			良好	褐色	密	外面:叩打　　内面:ハケメ	
193	第56図	甕	中世土器	D-13		2.7			良好	褐色	密	外面:叩打　　内面:ハケメ	
194	第56図	甕	中世土器	D-14		5.7			良好	灰褐色	密	外面:叩打　　内面:ナデ	
195	第56図	甕	中世土器	E-15		7.2			良好	灰褐色	密	外面:叩打　　内面:ナデ	
196	第56図	甕	中世土器	D-14		2.3			良好	茶褐色	密	外面:叩打　　内面:ナデ	
197	第56図	甕	中世土器	D-14		5.1			良好	茶褐色	密	外面:叩打　　内面:ナデ	

口径・胴径・底径の＊印は復元、残存高の＊印は器高

第９表　遺物観察表５（土器）

遺物番号	補図番号	器種	種別	地区	法量(cm) 口径	現存高	胴径	底径	焼成	色調	胎土	調整	備考
198	第56図	甕	中世土器	D-14		4.8			良好	茶褐色	密	外面:明主目　内面:ナデ	
199	第56図	甕	中世土器	D-13		3.2			良好	褐色	密	外面:明主目　内面:ナデ	
200	第56図	甕	中世土器	D-14		3.0			良好	褐色	密	外面:明主目　内面:ナデ	
201	第56図	鍋	瓦質土器	F-21	＊22.4	7.9			良	外面:褐灰色 内面:褐色	密　白砂粒,角閃石含	外面:ナデ,明主目 内面:ナデ	
202	第56図	鍋	瓦質土器	F-21		4.8			良	外面:褐灰色 内面:褐色	密　白砂粒,角閃石含	外面:ナデ,明主目 内面:ナデ	
203	第56図	鍋	中世土器	F-20		5.3			良	褐色	密　白砂粒含	外面:ナデ,明主目 内面:ナデ	
204	第56図	鍋	中世土器	F-19		9.5			良	褐色	密	外面:ハケ目,明主目 内面:ハケ目	
205	第57図	甕	中世土器	F-20		7.2			良好	茶褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:明主目　内面:ナデ	
206	第57図	甕	中世土器	F-20		6.7			良好	茶褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:明主目　内面:ナデ	
207	第57図	甕	中世土器	F-20		5.3			良好	茶褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:明主目　内面:ナデ	
208	第57図	甕	中世土器	F-20		5.2			良好	茶褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:明主目　内面:ナデ	
209	第57図	甕	中世土器	F-20		5.2			良好	茶褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:明主目　内面:ナデ	
210	第57図	甕	中世土器	F-20		4.2			良好	茶褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:明主目　内面:ナデ	
211	第57図	甕	中世土器	F-20		7.2			良好	茶褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:明主目　内面:ナデ	
212	第57図	甕	中世土器	F-20		4.2			良好	茶褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:明主目　内面:ナデ	
213	第57図	甕	中世土器	F-21		5.9			良好	茶褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:明主目　内面:ナデ	
214	第57図	甕	中世土器	F-21		5.3			良好	茶褐色	密　1mm以下の砂粒含	外面:明主目　内面:ナデ	
215	第57図	甕	中世土器	G-21		2.4			良好	茶褐色	密	外面:明主目　内面:ハケメ	
216	第57図	甕	中世土器	G-21		4.7			良好	茶褐色	密	外面:明主目　内面:ナデ	
217	第57図	甕	中世土器	G-21		6.8			良好	茶褐色	密	外面:明主目　内面:ナデ	
218	第57図	甕	中世土器	G-21		2.5			良好	褐色	密	外面:明主目　内面:ハケメ	
219	第57図	甕	中世土器	G-21		4.3			良好	茶褐色	密	外面:明主目　内面:ナデ	
220	第57図	甕	中世土器	G-21		4.3			良好	褐色	密	外面:明主目　内面:ナデ	
221	第58図	坏	土師質土器	E-13	＊11.8	3.8	＊6.3		良	灰褐色	密　白色粒,石英含	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り	
222	第58図	坏	土師質土器	F-15	＊10.0	3.5	＊6.0		良	灰褐色	密　白色粒,雲母含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
223	第58図	坏	土師質土器	F-13	＊11.5	3.2			良	淡褐色	密　白色粒,石英,雲母含	内外面共回転ナデ	
224	第58図	坏	土師質土器	F-16	＊12.0	2.9			良	灰褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ	
225	第58図	坏	土師質土器	F-14	＊11.5	2.5			良	灰褐色	密　白色粒,石英含	内外面共回転ナデ	煤
226	第58図	坏	土師質土器	F-15		1.4	＊6.2		良	橙褐色	密　白色粒含	外面:調整不明 内面:回転ナデ 底部:回転糸切り	
227	第58図	坏	土師質土器	E-15		1.9	＊5.6		良	灰褐色	密　白色粒含	内面:回転ナデ 外面:調整不明	
228	第58図	坏	土師質土器	E-14		1.1	＊5.0		良	橙褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	煤
229	第58図	坏	土師質土器	F-15		1.0	＊5.0		良	褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
230	第58図	坏	土師質土器	F-13		1.3	＊5.8		良	褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
231	第58図	坏	土師質土器	E-15		1.6	＊7.4		良	褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
232	第58図	坏	土師質土器	F-13		1.7	＊6.5		良	淡褐色	密　白色粒,石英含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ,静止ナデ 底部:回転糸切り	
233	第58図	坏	土師質土器	F-15		0.7	＊5.7		良	淡橙褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
234	第58図	坏	土師質土器	G-21		1.1	＊6.6		良	橙褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り,板目圧痕	煤
235	第58図	坏	土師質土器	F-15		0.8	＊5.8		良	橙褐色	密　白色粒含	内外面共調整不明 底部:回転糸切り	
236	第58図	坏	土師質土器	F-15		1.7	＊6.4		良	灰褐色	密　白色粒,雲母含	内外面共回転ナデ	煤
237	第58図	坏	土師質土器	E-13		1.8	＊5.3		良	灰褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ,静止ナデ 底部:回転糸切り	
238	第58図	坏	土師質土器	F-15		1.2	＊5.6		良	褐色	密　白色粒,石英含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
239	第58図	坏	土師質土器	E-14		0.8	＊6.1		良	褐色	密　白色粒,石英含	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り	
240	第58図	皿	土師質土器	トレンチ	＊7.5	1.2	＊4.8		良	橙褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	羊羽部レンチ
241	第58図	皿	土師質土器	F-15	＊6.7	1.4	＊4.8		良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り,板目圧痕	
242	第58図	皿	土師質土器	トレンチ	＊7.5	1.6	＊4.4		良	橙褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
243	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.0	＊5.6		良	外面:灰褐色 内面:淡橙褐色	密　白色粒,石英含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
244	第58図	皿	土師質土器	F-15	＊5.3	1.5	＊5.2		良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
245	第58図	皿	土師質土器	E-14		1.4	＊6.5		良	暗褐色	密　白色粒含	内面:調整不明 外面:ナデ 底部:回転糸切り	煤
246	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.6	＊6.3		良	灰褐色	密　白色粒,雲母含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
247	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.2	＊6.2		良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
248	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.5	＊5.9		良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り,板目圧痕	
249	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.0	＊5.9		良	淡褐色	密　白色粒,角閃石含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
250	第58図	皿	土師質土器	E-15		1.6	＊5.6		良	灰褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
251	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.1	＊5.8		良	淡橙褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	

口径・胴径・底径の＊印は復元、現存高の＊印は器高

第10表　遺物観察表６（土器）

遺物番号	挿図番号	器種	種別	地区	法量(cm) 口径	残存高	胴径	底径	焼成	色調	胎土	調整	備考
252	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.8		＊ 5.8	良	褐色	密　白色粒、雲母含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
253	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.2		＊ 5.4	良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
254	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.9		＊ 5.3	良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
255	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.9		＊ 4.9	良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ	
256	第58図	皿	土師質土器	E-15		1.0		＊ 5.7	良	褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ	
257	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.8		＊ 5.5	良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り、板目圧痕	
258	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.2		＊ 5.5	良	灰褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
259	第58図	皿	土師質土器	F-14		1.1		＊ 4.7	良	灰褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ	
260	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.9		＊ 5.5	良	灰褐色	密　白色粒、雲母含	内外面共回転ナデ	
261	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.6		＊ 5.5	良	淡褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り	
262	第58図	皿	土師質土器	E-15		0.5		＊ 5.2	良	灰褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
263	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.6		＊ 5.0	良	淡褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ 底部:回転糸切り	
264	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.9		＊ 5.5	良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
265	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.2		＊ 6.5	良	褐色	密　白色粒、雲母含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
266	第58図	皿	土師質土器	F-14		0.9		＊ 5.7	良	灰褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
267	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.1		＊ 5.6	良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
268	第58図	皿	土師質土器	E-15		1.2		＊ 5.1	良	褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
269	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.6		＊ 5.0	良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
270	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.6		＊ 5.9	良	淡褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
271	第58図	皿	土師質土器	F-14		0.6		＊ 5.1	良	褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り	
272	第58図	皿	土師質土器	F-14		1.3		＊ 5.0	良	橙褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ	
273	第58図	皿	土師質土器	E-14		0.7		＊ 5.5	良	褐色	密　白色粒含	内外面共調整不明	
274	第58図	皿	土師質土器	F-13		0.8		＊ 5.2	良	灰褐色	密　白色粒、雲母含	内外面共回転ナデ	
275	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.6		＊ 5.0	良	淡橙褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
276	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.5		＊ 5.4	良	淡橙褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
277	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.6		＊ 5.0	良	褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り	
278	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.9		＊ 4.9	良	灰褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
279	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.4		＊ 4.9	良	灰褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
280	第58図	皿	土師質土器	F-16	＊ 8.4	1.2		＊ 6.2	良	褐色	密　白色粒、角閃石含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
281	第58図	皿	土師質土器	F-13		1.1		＊ 6.6	良	橙褐色	密　白色粒、雲母含	内外面共回転ナデ	
282	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.2		＊ 5.8	良	褐色	密　白色粒、雲母含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
283	第58図	皿	土師質土器	E-14		1.8		＊ 5.4	良	灰褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:板目圧痕	
284	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.0		＊ 5.5	良	淡橙褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り、板目圧痕	
285	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.3		＊ 5.0	良	灰褐色	密　白色粒、石英含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
286	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.3		＊ 6.0	良	淡褐色	密　白色粒、雲母含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
287	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.4		＊ 4.2	良	灰褐色	密　白色粒含	内外面共ナデ 底部:板目圧痕	
288	第58図	皿	土師質土器	F-15		1.0		＊ 5.1	良	灰褐色	密　白色粒含	内外面共回転ナデ	
289	第58図	皿	土師質土器	F-15		0.6		＊ 5.2	良	灰褐色	密　白色粒、雲母含	内外面共回転ナデ 底部:回転糸切り	
290	第58図	皿	土師質土器	G-21		0.7		＊ 7.2	良	褐色	密　白色粒含	外面:回転ナデ 内面:静止ナデ 底部:回転糸切り	
291	第59図	甕	弥生	F-17		1.3			良	褐色	密　微白色粒含	内外面共ナデ	頸部貼付突帯
292	第59図	甕	弥生	F-16	＊ 13.2	3.2			良好	暗褐色	密　雲母・砂粒含	内外面共ナデ	6条櫛描沈線
293	第59図	甕	弥生	G-20	＊ 17.7	1.4			良	褐色	密　白色粒含	外面:ナデ 内面:ハケ目	
294	第59図	甕	弥生	E-15		2.9		＊ 6.6	良	褐色	密　白色粒・石英含	外面:ハケ目 内面:ケズリ	
295	第59図	甕	土師器	D-13	＊ 25.4	2.3			良好	暗褐色	密	内外面共ナデ	
296	第59図	坏	土師器	F-21	＊ 11.5	1.6			良好	橙褐色	密	内外面共ナデ	
297	第59図	壺	須恵器	G-20		11.0	＊ 28.4		良	灰色	密　白砂粒含	外面:回転ナデ 内面:ナデ	
298	第59図	甕	陶器	F-20		8.7			良好	外面:茶色 内面:淡灰褐色	密	内外面共ナデ	常滑系

口径・胴径・底径の＊印は復元、残存高の＊印は器高

第11表　遺物観察表７（石製品）

遺物番号	挿図番号	種別	地区	法量				石材
				長さ（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	重量（g）	
S1	第10図	石鏃	SS01	2.5	1.7	0.3	1.3	サヌカイト
S2	第17図	石鏃	E-4	1.6	1.6	0.4	0.7	黒曜石
S3	第17図	石鏃	I-3	2.4	1.6	0.3	0.8	黒曜石
S4	第17図	石鏃	F-4	1.7	1.8	0.5	1.0	黒曜石
S5	第17図	石鏃	K-3	1.7	0.7	0.3	0.4	黒曜石
S6	第17図	石鏃	G-3	2.2	1.8	0.3	0.8	黒曜石
S7	第17図	石鏃	K-4	1.8	1.4	0.3	0.5	黒曜石
S8	第17図	石鏃	J-3	2.1	1.5	0.3	0.7	黒曜石
S9	第17図	石鏃	F-4	1.2	1.6	0.3	0.4	黒曜石
S10	第17図	石鏃	F-4	1.7	1.2	0.3	0.4	黒曜石
S11	第18図	石鏃	H-4	2.15	1.4	0.3	0.6	サヌカイト
S12	第18図	石鏃	I-4	1.9	1.3	0.2	0.4	サヌカイト
S13	第18図	石鏃	J-3	1.85	1.8	0.35	0.9	サヌカイト
S14	第18図	石鏃	I-3	2.0	1.6	0.3	0.9	サヌカイト
S15	第18図	石鏃	J-3	1.8	1.3	0.3	0.5	サヌカイト
S16	第18図	石鏃	H-4	2.1	1.55	0.4	1.1.	サヌカイト
S17	第18図	石鏃	E-4	1.85	1.5	0.3	0.7	サヌカイト
S18	第18図	石鏃	SD-4	1.6	1.2	0.25	0.5	サヌカイト
S19	第18図	石鏃	F-4	2.5	1.5	0.3	1.0	サヌカイト
S20	第18図	石鏃	K-3	3.05	1.7	0.5	2.5	サヌカイト
S21	第18図	石鏃	F-5	3.3	2.0	0.45	2.5	サヌカイト
S22	第18図	磨製石斧	F-4	14.8	7.0	6.4	682.9	デイサイト
S23	第18図	磨製石斧	K-4	8.2	6.0	3.9	284.3	安山岩
S24	第18図	磨製石斧	L-3	8.4	6.5	4.4	78.9	閃緑岩
S25	第18図	磨製石斧	K-4	7.4	6.4	4.2	270.8	デイサイト
S26	第19図	磨製石斧	I-3	4.2	5.6	2.8	78.9	砂岩
S27	第19図	磨製石斧	H-3	5.8	6.0	3.0	110.9	閃緑岩
S28	第19図	磨製石斧	K-4	5.1	5.2	1.1	35.2	粘板岩
S29	第19図	磨製石斧	H-4	11.3	7.6	3.9	622.8	粘板岩
S30	第19図	磨製石斧	F-4	9.9	7.4	2.9	331.9	粘板岩
S31	第19図	磨製石斧	J-4	11.3	5.8	3.3	309.8	蛇紋岩
S32	第19図	磨製石斧	J-3	12.3	6.7	5.0	642.4	閃緑岩
S33	第19図	敲石	J-4	14.2	6.0	5.7	674.1	玄武岩
S34	第19図	敲石	F-4	10.0	6.0	4.4	363.7	安山岩
S35	第19図	敲石	M-3	9.1	8.2	4.4	391.0	安山岩
S36	第19図	凹皿	I-3	11.8	9.2	4.7	689.2	安山岩
S37	第20図	標石	J-3	32.5	14.5	11.0	7320.0	凝灰角礫岩
S38	第20図	標石	L-3	25.5	15.8	6.6	3420.0	デイサイト
S39	第39図	小玉	21号墳主体部	5.5	5.0	3.0	0.1	
S40	第39図	小玉	21号墳主体部	6.0	5.5	3.5	0.1	
S41	第39図	小玉	21号墳主体部	5.5	5.5	3.0	0.1	
S42	第39図	小玉	21号墳主体部	5.5	6.0	3.5	0.1	
S43	第39図	小玉	21号墳主体部	6.0	6.0	3.0	0.2	
S44	第39図	小玉	21号墳主体部	5.5	6.0	2.0	0.1	
S45	第39図	小玉	21号墳主体部	5.0	5.0	4.0	0.1	
S46	第39図	小玉	21号墳主体部	5.0	5.0	4.0	0.1	
S47	第39図	小玉	21号墳主体部	5.5	5.5	3.5	0.1	
S48	第39図	小玉	21号墳主体部	5.0	5.0	2.0	0.1	
S49	第39図	小玉	21号墳主体部	5.5	5.0	4.5	0.2	
S50	第39図	小玉	21号墳主体部	5.0	5.0	3.5	0.1	
S51	第39図	小玉	21号墳主体部	5.5	5.0	3.5	0.1	
S52	第39図	小玉	21号墳主体部	5.0	5.0	3.0	0.1	
S53	第39図	小玉	21号墳主体部	5.0	5.5	5.0	0.2	
S54	第39図	小玉	21号墳主体部	5.0	4.5	2.5	0.1	
S55	第59図	磨石	22号墳主体部	4.0	4.3	2.5	78.2	デイサイト

第12表　遺物観察表８（鉄製品）

遺物番号	挿図番号	種別	地区	法量				備考
				長さ（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	重量（g）	
F1	第20図	不明	K-3	5.2	2.1	0.65	16.5	
F2	第37図	鏡板	21号墳	16.0	7.7	0.7	379.4	頭部幅：3.3cm 尾部幅：5.2cm
F3	第37図	鏡板	21号墳	15.9	8.2	0.8	430.7	頭部幅：3.5cm 尾部幅：5.2cm
F4	第37図	辻金具	21号墳	4.7	3.8	0.15	10.0	
F5	第37図	辻金具	21号墳	5.2	3.5	0.2	9.2	
F6	第37図	辻金具	21号墳	5.0	4.8	0.2	8.3	
F7	第37図	鋲具	21号墳	1.7	2.9	0.2	4.1	
F8	第37図	責金具	21号墳	4.7	2.8	1.0	9.4	
F9	第38図	鉄鏃	21号墳	17.7	0.8	0.4		
F10	第38図	鉄鏃	21号墳	18.5	0.9	0.4	40.9	
F11	第38図	鉄鏃	21号墳	4.1	0.7	0.4		
F12	第38図	鉄鏃	21号墳	18.5	0.9	0.3	16.5	
F13	第38図	鉄鏃	21号墳	17.9	0.75	0.3	48.5	
F14	第38図	鉄鏃	21号墳	15.0	0.9	0.3	16.1	
F15	第38図	鉄鏃	21号墳	17.1	0.8	0.45	15.1	
F16	第38図	鉄鏃	21号墳	17.7	0.7	0.3	13.5	
F17	第38図	鉄鏃	21号墳	16.2	0.65	0.3	12.8	
F18	第38図	鉄鏃	21号墳	15.7	0.8	0.3	12.1	
F19	第38図	鉄鏃	21号墳	15.3	0.9	0.3	16.2	
F20	第38図	鉄鏃	21号墳	15.2	0.9	0.35	15.9	
F21	第38図	鉄鏃	21号墳	15.0	0.8	0.3	13.6	
F22	第39図	鉄鏃	21号墳	14.0	0.9	0.4	13.1	
F23	第39図	鉄鏃	21号墳	8.7	0.8	0.3	7.1	
F24	第39図	鉄鏃	21号墳	7.8	0.9	0.35	8.8	
F25	第39図	鉄鏃	21号墳	14.0	0.9	0.3	11.9	
F26	第39図	鉄鏃	21号墳	15.8	0.8	0.3	13.7	
F27	第39図	鉄鏃	21号墳	10.0	0.8	0.35	7.5	
F28	第39図	鉄鏃	21号墳	11.1	0.7	0.3	8.7	
F29	第39図	鉄鏃	21号墳	6.5	0.7	0.4	5.0	
F30	第39図	鉄鏃	21号墳	6.8	0.7	0.3	5.0	
F31	第39図	鉄鏃	21号墳	3.2	0.3	0.2	0.7	
F32	第39図	鉄鏃	21号墳	2.1	0.2	0.2	0.5	
F33	第59図	鍋	E-14	1.9	10.0		224	
F34	第59図	辇荚	F-19	20.4	5.3		367	
F35	第59図	辇荚	F-21	16.7	5.4	5.3	253.1	
F36	第59図	槍鉋	D-14	10.1	0.75	0.6	16.6	
F37	第59図	釘	F-21	11.6	1.2	0.6	29.3	
F38	第59図	釘	F-21	3.9	0.6	0.4	3.7	
F39	第59図	釘	E-14	4.2	0.6	0.3	2.1	

第13表　遺物観察表９（金属製品）

遺物番号	挿図番号	種別	地区	法量				備考
				外径（mm）	穿径（mm）	厚み（mm）	重量（g）	
M1	第20図	銅銭	G-3	25.0	6.0	1.0	2.4	寛永通寶
M2	第20図	銅銭	G-3	25.0	5.0	1.0	2.4	寛永通寶
M3	第20図	銅銭	H-3	19.0	6.0	1.0	0.7	寛永通寶
M4	第20図	銅銭	L-3	24.0	6.5	1.0	1.3	寛永通寶
M5	第20図	銅銭	L-3	24.0	6.0	1.0	2.2	寛永通寶
M6	第20図	銅銭	M-3	23.0	6.0	1.0	2.3	寛永通寶
M7	第59図	鉛玉	F-15	37.0	37.0	36.0	280.0	
M8	第59図	鉛玉	E-13	39.0	39.0	39.0	320.0	
M9	第59図	鉛玉	E-14	39.0	40.0	38.0	348.0	
M10	第59図	鉛玉	F-18	41.0	41.0	40.0	363.0	
M11	第59図	鉛玉	G-20	37.0	37.0	36.0	282.8	

写真図版

調査前状況

調査前状況（伐採後）

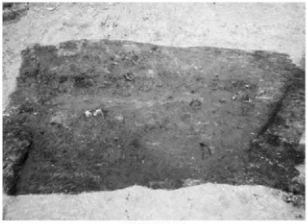
調査前状況（谷部遠景）

調査前状況（谷部東側より）

調査前状況（谷部西側より）

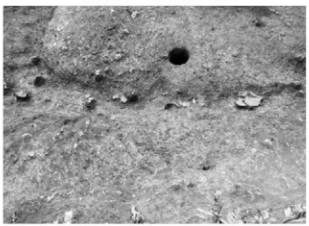
竪穴建物

竪穴建物（遠景）


段状遺構２

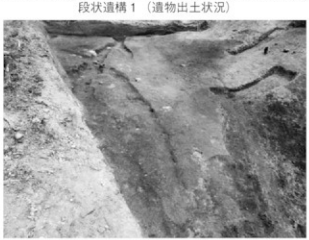
段状遺構１（南東側より）

段状遺構１（東側より）


段状遺構１（遺物出土状況）

段状遺構１（遺物出土状況）

溝状遺構１


溝状遺構１

溝状遺構１

谷部遺物出土状況

溝状遺構１

溝状遺構１

溝状遺構５

溝状遺構２

溝状遺構３・４

作業状況

谷部調査後状況（西側より）

図版4

谷部調査後状況（東側より）

作業状況

尾根部北側調査後状況

尾根部北側調査後状況

尾根部中央部調査前状況

尾根部中央部調査前状況

尾根部中央部調査前状況

尾根部中央部調査前状況

東宗像22号墳第1主体部検出状況

東宗像22号墳第1主体部蓋石検出状況

東宗像22号墳第1主体部蓋石除去状況

東宗像22号墳第1主体部石棺検出状況

東宗像22号墳第1主体部掘り形検出状況

東宗像22号墳第1主体部石除去完掘状況

東宗像22号墳第2主体部完掘状況

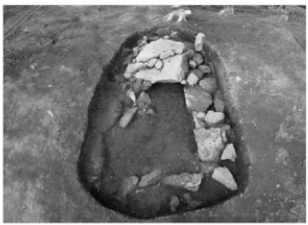
図版6

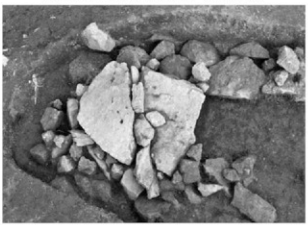
東宗像21号墳調査前状況

東宗像21号墳盖石検出状況

東宗像21号墳盖石検出状況

東宗像21号墳石室検出状況（南側より）


東宗像21号墳石室検出状況（東側より）


東宗像21号墳盖石及び閉塞検出状況

東宗像21号墳盖石除去状況

東宗像21号墳盖石除去作業状況

東宗像21号墳蓋石除去状況（北側より）

東宗像21号墳蓋石除去状況（東側より）

東宗像21号墳閉塞部墳輪出土状況

東宗像21号墳閉塞部墳輪出土状況

東宗像21号墳石室検出状況（西側から）

東宗像21号墳石室検出状況（東側から）

東宗像21号墳閉塞状況（正面）

東宗像21号墳閉塞状況（上部）

東宗像21号墳石室内状況（扉石）

東宗像21号墳石室内状況（奥壁）

東宗像21号墳石室内状況（南壁）

東宗像21号墳石室内状況（北壁）

東宗像21号墳作業状況

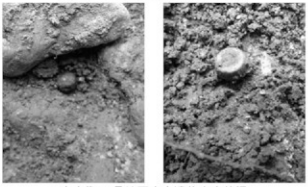
東宗像21号墳石室内遺物出土状況

東宗像21号墳石室内状況（床面）

東宗像21号墳石室内遺物出土状況

東宗像21号墳石室内遺物出土状況

東宗像21号墳石室内遺物出土状況


東宗像21号墳石室内遺物出土状況

東宗像21号墳石室扉石検出状況

東宗像21号墳石室扉石検出状況

東宗像21号墳石室扉石墳輪出土状況

東宗像21号墳石室扉石墳輪出土状況

東宗像21号墳羨石除去後状況（西側から）

東宗像21号墳羨石除去後状況（南側から）

東宗像21号墳羨石除去後状況（北側から）

東宗像21号墳羨石除去後状況（内側から）

東宗像21号墳羨石除去後状況（東側から）

東宗像21号墳羨石除去後状況（墓道側から）

東宗像21号墳北側積石状況

東宗像21号墳腰石検出状況（西側から）

東宗像21号墳腰石検出状況（南側から）

東宗像21号墳腰石撤去作業状況

東宗像21号墳石除去完掘状況（西側から）

東宗像21号墳石除去完掘状況（南側から）

東宗像21号墳石除去完掘状況（西側から）

東宗像21号墳石除去完掘状況（内部から西側を望む）

中世平場検出状況（東宗像22号墳周辺）

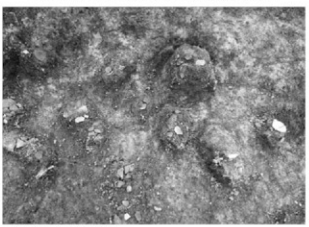
中世平場検出状況（東宗像22号墳周辺）

作業状況

中世平場検出状況（東宗像22号墳周辺）

中世平場検出状況（東宗像22号墳周辺）

中世平場遺物出土状況（東宗像22号墳周辺）


中世平場遺物出土状況（東宗像22号墳周辺）

中世平場検出状況（東宗像21号墳周辺）

中世平場検出状況（東宗像21号墳周辺）

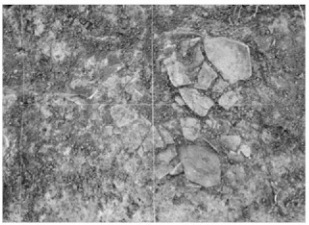
中世平場検出状況（東宗像21号墳周辺）

中世平場遺物出土状況（東宗像21号墳周辺）

中世平場遺物出土状況（東宗像21号墳周辺）

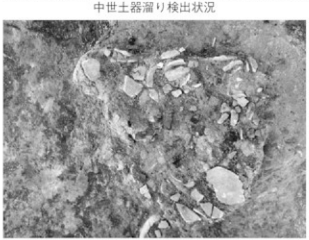
中世平場遺物出土状況（東宗像21号墳周辺）

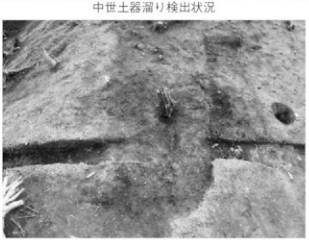
中世土器溜り検出状況

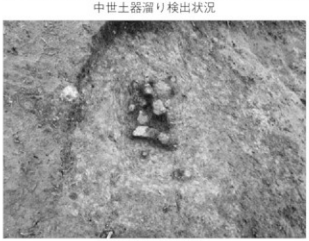

中世土器溜り検出状況

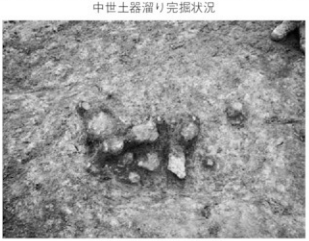
中世土器溜り検出状況

中世土器溜り検出状況

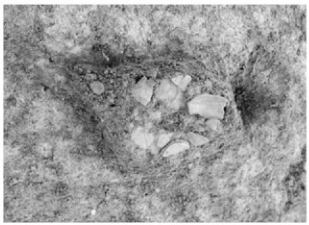

中世土器溜り検出状況


中世土器溜り完掘状況


中世土坑 1 検出状況


中世土坑 1 遺物出土状況

中世土坑１遺物出土状況


中世土坑１遺物出土状況

中世土坑１完掘状況

中世土坑２・３完掘状況

調査後遠景

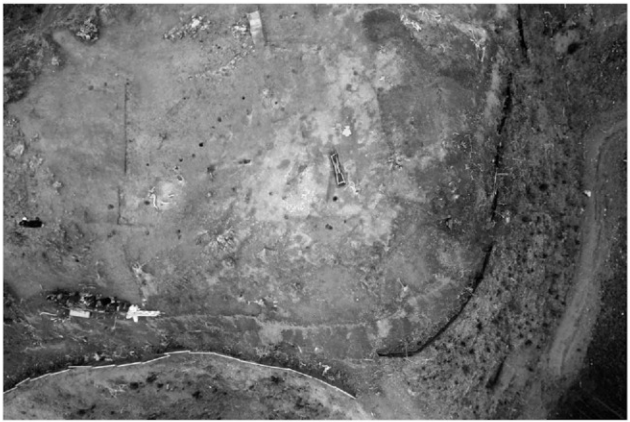
中世土坑４完掘状況

現地説明会状況

調査値全景（南側より）

尾根部全景（東側より）

尾根部南側全景



東宗像22号墳周辺

図版18

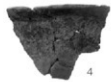
東宗像21号墳

東宗像21号墳周辺

1

2

3


4

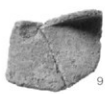
5

6

7

S1

8


9

10

11

12

14

13

図版20

17

16

15

18

19 20

21 22

23 24

25

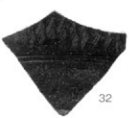
26 27

28

29

30

31


32

33

36

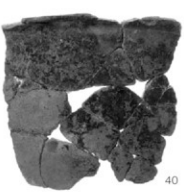
34

35

37

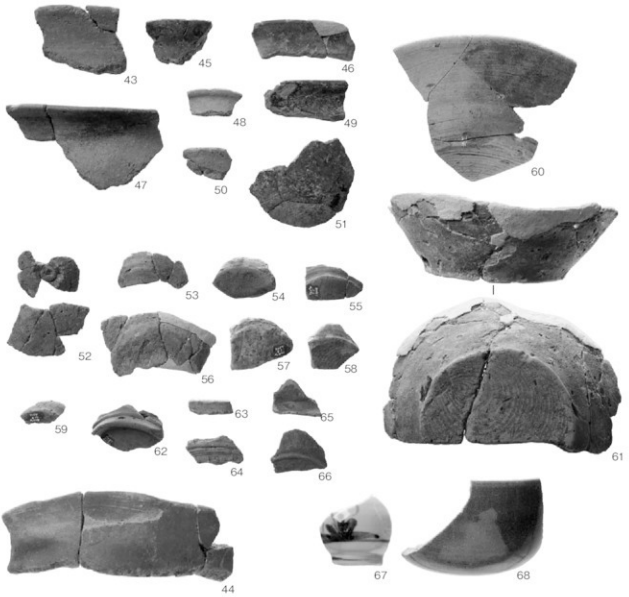
38

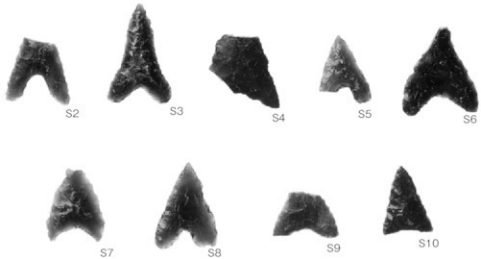
39


40

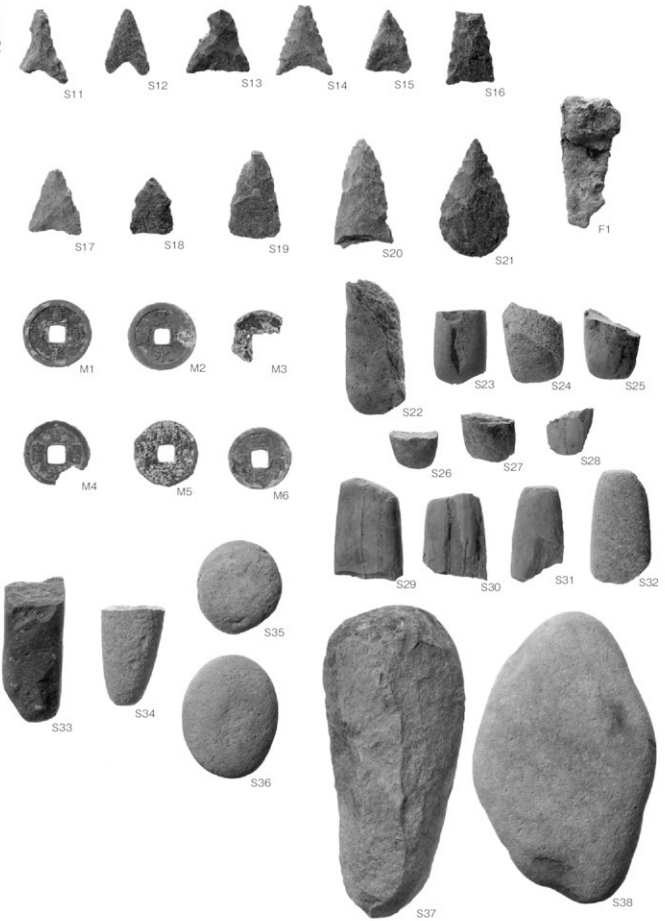
41

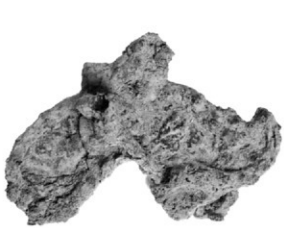
42


43
45
46
48
49
47
50
51
60
1
53
54
55
52
56
57
58
61
59
63
65
62
64
66
44
67
68


S2
S3
S4
S5
S6
S7
S8
S9
S10

図版22


S11
S12
S13
S14
S15
S16
S17
S18
S19
S20
S21
F1
M1
M2
M3
S22
S23
S24
S25
M4
M5
M6
S26
S27
S28
S29
S30
S31
S32
S33
S34
S35
S36
S37
S38



I

I

F2

F3

F4

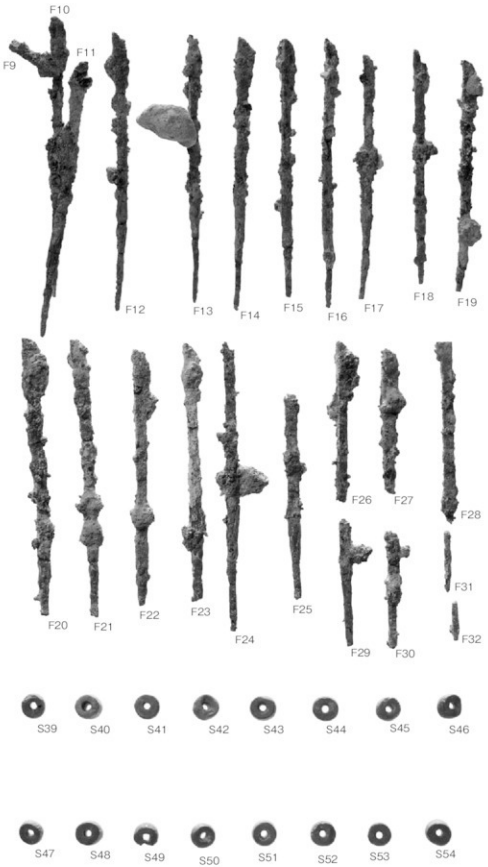
F5

F6

F7

F8

図版24


F9
F10
F11
F12
F13
F14
F15
F16
F17
F18
F19
F20
F21
F22
F23
F24
F25
F26
F27
F28
F29
F30
F31
F32
S39
S40
S41
S42
S43
S44
S45
S46
S47
S48
S49
S50
S51
S52
S53
S54

69

71

70

72

73

74

75

80

81

76

77

82

78

79

図版26

83

84

87

85

88

89

86

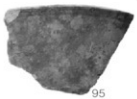
90

91

92

93

94


95

99

100

101

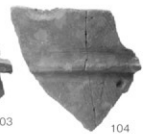
96

97

98

102

103


104

105

106

107

109

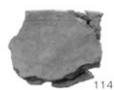
112

113

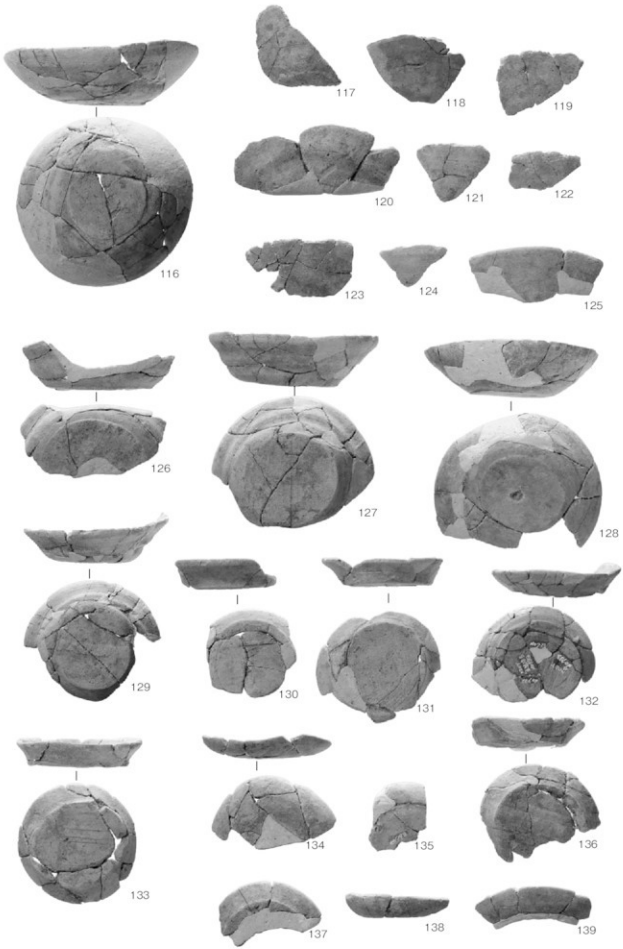
108

110

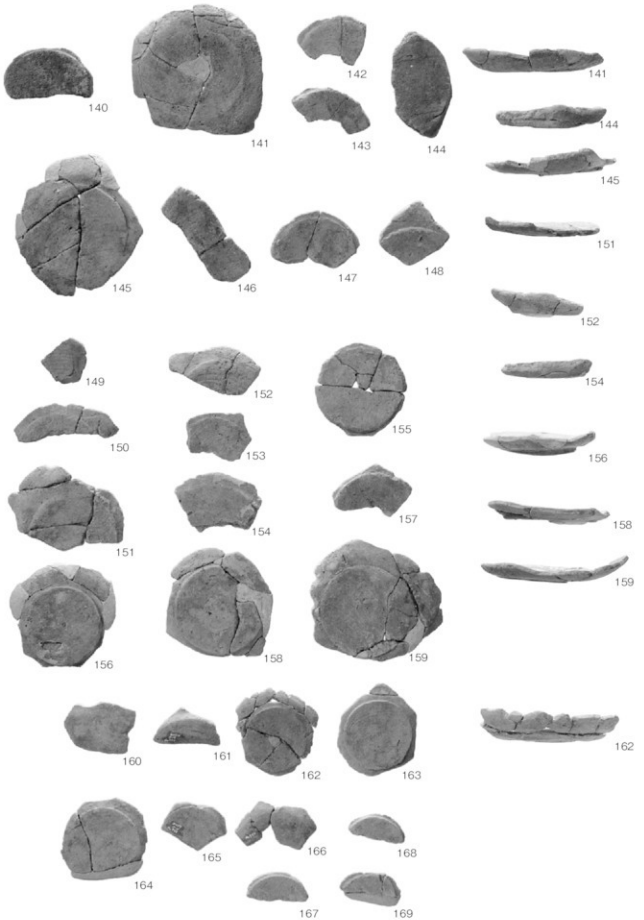
111

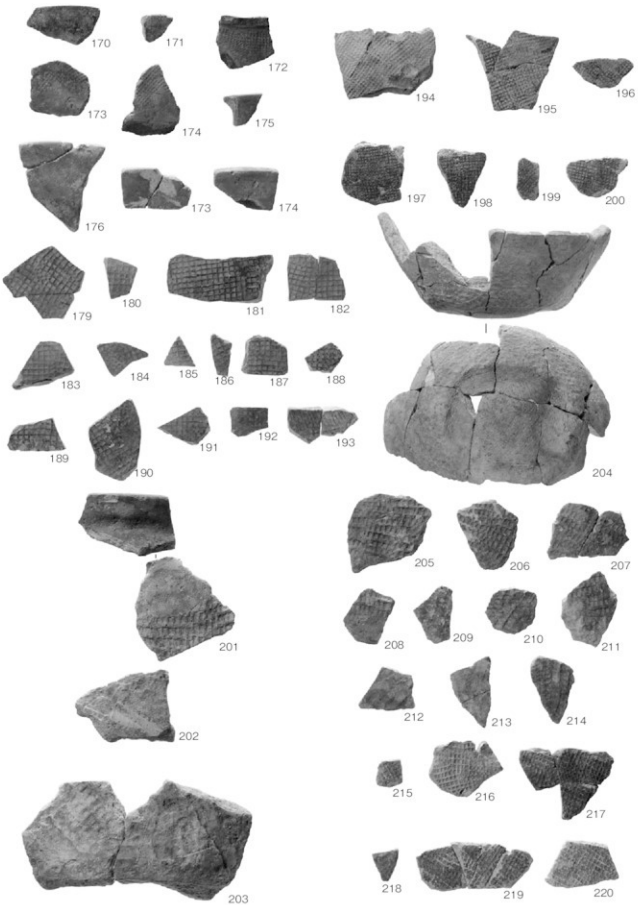

114

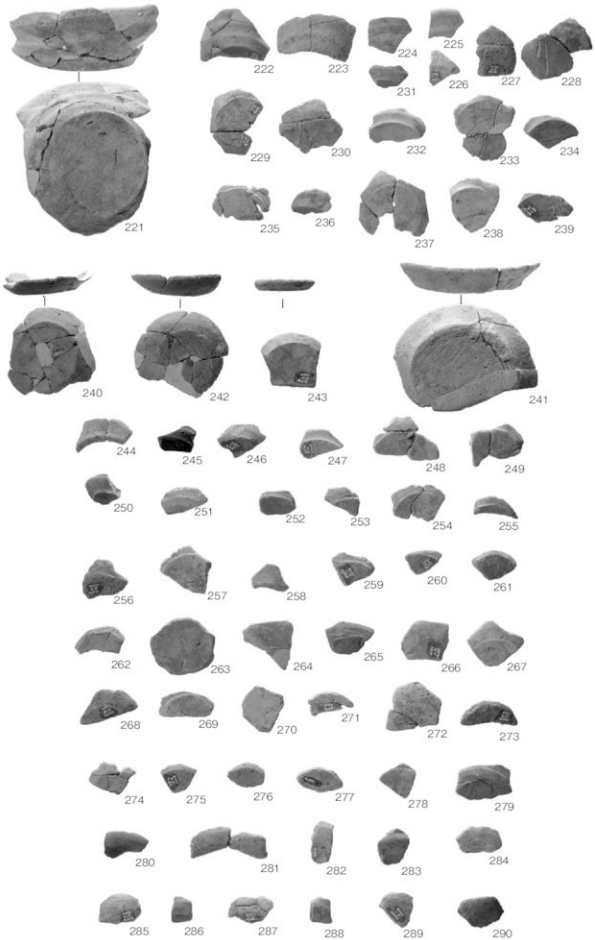
115

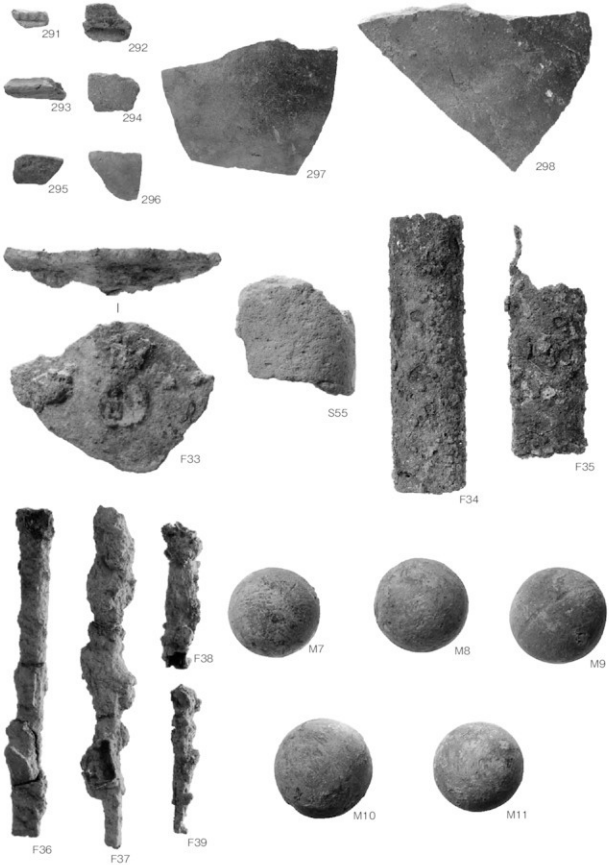

116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139

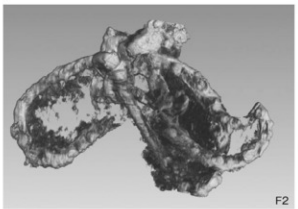
図版28

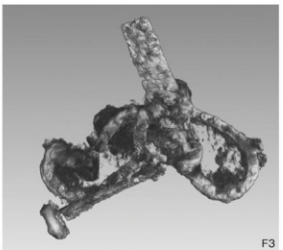

140
141
142
143
144
141
144
145
145
146
147
148
151
152
149
152
154
150
153
155
156
151
154
157
158
156
158
159
160
161
162
163
162
164
165
166
168
167
169

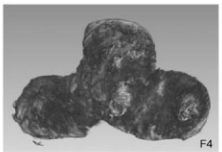

170
171
172
173
174
175
176
173
174
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
I
204
205
206
207
201
208
209
210
211
202
212
213
214
215
216
217
203
218
219
220

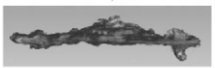

221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290

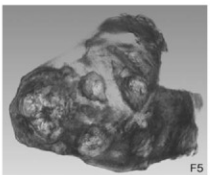

291
292
293
294
295
296
297
298
I
F33
S55
F34
F35
F36
F37
F38
F39
M7
M8
M9
M10
M11

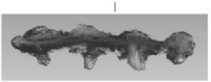

F2

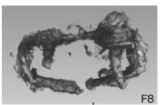

F3

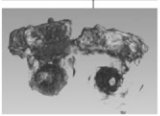

F4

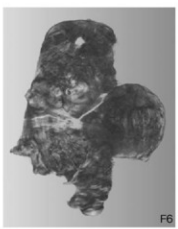


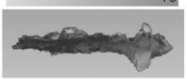

F5

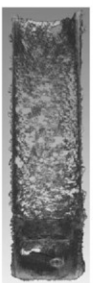


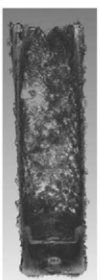

F8

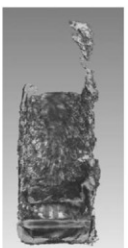


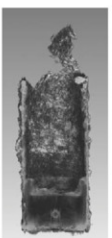

F6

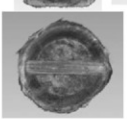


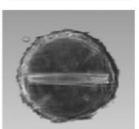



F34




F35





（X線写真）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	よなごしかんのんじおおかみだにやまいせき
書　　名	米子市観音寺狼谷山遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	7
編 著 者 名	平木裕子
編 集 機 関	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室
所　在　地	〒683－0011　鳥取県米子市福市281番地　　TEL・FAX　0859－26－0455 e メールアドレス　yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp
発 行 年 月 日	西暦２０１５年３月３１日　　平成２７年３月３１日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
米子市観音寺狼谷山遺跡	鳥取県米子市観音寺・長砂町地内	31202		35度24分43秒	133度21分37秒	2010年9月14日～2010年11月12日	6,700㎡	配水池設置工事

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
米子市観音寺狼谷山遺跡	古墳	古墳時代	竪穴建物、段状遺構、溝状遺構、古墳、中世山城跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世土器、埴輪、馬具、鉄鏃、小玉、石鏃、鉛弾	・竪穴系横口式石室 ・ｆ字形鏡板出土

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書７
鳥取県米子市
観音寺狼谷山遺跡
２０１５年３月
編集・発行　一般財団法人　米子市文化財団
〒６８３－００１１　鳥取県米子市福市２８１番地
ＴＥＬ　０８５９－２６－０４５５
印　　刷　有限会社米子プリント社